

スポーツを大切に思う子どもを育てる スポーツ指導を求めて

— 児童のスポーツ活動の現状を把握するための意識調査 —

児童期は人が生涯にわたって運動を生活に取り入れた暮らしを築くための基礎を育てる時期であり、児童が児童期にあったスポーツ活動を経験することが大切である。しかし現状は、社会環境や生活様式の変化などにより、子どもの体力・運動能力が長期的に低下傾向にあることや、すすんで運動する子どもとそうでない子どもの二極化の傾向が問題にされている。

本研究では、児童のスポーツ活動の現状を明らかにするために、小学校の「部活動」と「スポーツ少年団」の児童・指導者の意識を調査した。指導者が何を考え、何に問題を感じているか。子どもたちはどのようなスポーツとのかかわりを望み、どのような悩みをもっているか。それらを明らかにしていくことで、子どもたちの豊かなスポーツ活動を支援できるのではないかと考えた。

目 次

はじめに	1	第2節 指導者の意識	
		(1) スポーツ指導への意識	20
		(2) 現在の活動への意識	22
第1章 研究の概要		第3章 子どもの豊かなスポーツ活動を支えるために	
		(「スポーツを大切に思う子ども」を目指して)	
第1節 子どもの体力は本当に低下しているか?		第1節 スポーツの「楽しさ」と「きびしさ」	
(1) 全国的な傾向	1	(1) 楽しさの多様性	27
(2) 京都市の傾向	4	(2) 部活動と少年団の指導者の意識の違い	28
(3) 子どもの生活およびスポーツ活動の現状	6	(3) 子どもたちが求める「きびしさ」とは	29
第2節 調査研究の概要		第2節 スポーツが自分にとってかけがえないものになるために	
(1) 調査の構造および設問の構成	8	(1) 「できる」ことの「楽しさ」をまず	
(2) 調査実施の概要	9	体育学習で	30
		(2) 「一生懸命取り組むことの大切さ」	
第2章 児童のスポーツ活動について見えてきたもの		を伝えるには	31
第1節 子どもとスポーツ活動		(3) 部活動への一提案	
(1) スポーツ活動への参加は子どもに		(総合運動部の取組)	34
プラスなのか?	10	おわりに	37
(2) 運動への子どもの意識	12	付表 基礎集計表	38
(3) スポーツ活動から遠ざかっている理由	15		
(4) スポーツ活動に参加している子ども	15		

<研究担当> 和田 英明 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究調査協力校>

京都市立別所小学校	京都市立中川小学校	京都市立大原小学校
京都市立松ヶ崎小学校	京都市立養徳小学校	京都市立柏野小学校
京都市立衣笠小学校	京都市立乾隆小学校	京都市立常盤野小学校
京都市立川岡東小学校	京都市立福西小学校	京都市立朱雀第三小学校
京都市立陶化小学校	京都市立砂川小学校	京都市立納所小学校
京都市立小栗栖小学校	京都市立音羽川小学校	京都市立六原小学校
京都市立京極小学校	京都市立月輪小学校	京都市立七条小学校
京都市立安朱小学校	京都市立醒泉小学校	京都市立西京極小学校
京都市立大藪小学校	京都市立竹田小学校	京都市立桂東小学校
京都市立西院小学校	京都市立春日野小学校	

<研究調査協力団体(京都市スポーツ少年団)>

西陣中央 宇多野バレーボール 洛南天祥 美豆 藤城 向島南 京都らくほく少年サッカーくらぶ 太秦サッカー 醍醐サッカー 梅津北モンキーズ 旭 洛北ヒーロー 松尾クラブ 日野ライオンズ 鏡山クラブ 少林寺拳法梅津 少林寺拳法京都北醍醐 少林寺拳法京都衣笠 少林寺拳法京都太秦 少林寺拳法小栗栖 少林寺拳法伏見

はじめに

「…バレーのときでは、皆と協力・自分の心の強さ・人を思いやる心・自分のためだけではなく他の人のことも考えて打つ、ということ（中略）スポーツというのは汗をかき、涙を流し、他の場所でも役立つことばかりでした。（中略）私はただ単にやきもち焼きの自己中心的な人でした。でも、一つのスポーツでこんなに気持ちが変わったり、分かったりするんですね。私はバレーボールというスポーツをやっている良かったです。友だちという意味が深くわかりました。…」これは2年前まで小学校で担任していた卒業生が、離任式でくれた手紙の一節である。

1997年9月の保健体育審議会答申では、「萌芽期※1は、生涯にわたって健康や体力を保持増進していくための基礎を培い、健康的な生活習慣を身に付けるとともに、文化としてのスポーツとの出会いを大切に、その担い手としての芽を育成していく時期である」(1)とされている。

また、スポーツの意義の中で「とりわけ青少年にとっては、スポーツが人間形成に多大な影響を与えるなど、心身の両面にわたる健全な発達に資するものである」(2)と述べられている。

学校や地域において、スポーツを通じた子どもの健全育成を願って、多くの指導者が取組を進めている。その中で子どもたちが意味のあるスポーツ活動を経験することが大切であると考える。

しかし、今日、社会環境や生活様式の変化などにより、運動の機会の減少や生活の乱れが生じてきている。子どもの体力・運動能力も長期的に低下傾向にある。また、運動する子どもとしない子どもの二極化の傾向も問題にされている。

「子どもの体力が低下傾向にある」とは、教育現場にいる者にとってはよく耳にすることであり、小学生を担当した者であれば、何らかの実感をもって捉えられるフレーズでもある。

しかし、本当に子どもの体力は低下しているのだろうか。小学生対象のスポーツ活動は昔に比べて大変盛んになっているし、体格も良くなっている。ただし、確かに遊びは質・量ともに不足している感がある。中学校や高等学校では運動系の部活動への所属率が下がっているという話も聞くと、今後ますます児童期のスポーツ活動の重要性は増してくると思われる。

では、体力や運動能力の低下を防ぐ対策として、大人から子どもに運動マニュアル又は処方箋

のようなものを示して、子どもたちに努力させることが求められているのだろうか。

子どもたちは運動やスポーツに何を求めているのだろうか。また、子どもたちに直接かかわる指導者は子どもたちに何を伝えようとして活動しているのだろうか。

そこで、児童のスポーツ活動の現状を明らかにするための意識調査を行った（P.8 図1-10 研究の構造図）。「スポーツを大切に思う子」を育て、結果として体力・運動能力低下の問題も解消していくようなスポーツ活動を求めていきたい。

本研究では、第1章で何が低下して何が問題なのか、先行研究からみていく。第2章では調査の集計結果から京都市の児童と児童のスポーツ指導者の意識を明らかにしていく。そして第3章では若干の考察を加え、指導者が何を大切に子どもたちと向き合えばよいか、自身の反省も含めて考えていきたい。

冒頭の手紙をくれた彼女は、現在中学校で柔道部に所属し、児童福祉関係の仕事に就きたいという夢を叶えるためにがんばっている。彼女の夢が叶うことを願う今日この頃である。

※1 萌芽期(乳幼児期・児童期)

第1章 研究の概要

第1節 子どもの体力は本当に低下しているか？

(1) 全国的な傾向

「子どもの体がおかしい」ということでNHKと日本体育大学が共同で1978年に最初の子どもの体の調査を行って25年以上になる。正木健雄はその著書『おかしいぞ子どものからだ』（大月書店、1995年）の中で、アレルギーの増加、体温調節機能の発育不全、運動能力の低下、肥満と痩せの両極分化、立体視機能の低下、前頭葉不活発型の子の増加などの問題を指摘している。(3)

正木は「この問題は多様な原因によってからだに多面的な変化が進んでいる」(4)とまとめているが、「急激な豊かさの代償として子どもの発育不全という問題がたくさん出てき」(5)たと思った。

2004年1月に出された中央教育審議会『子どもの体力向上のための総合的な方策について』の答申の概要によると、「昭和60年ごろから子どもの体力・運動能力の低下傾向が続くとともに、肥満傾向の割合が増加し、将来の生活習慣病への危険性が高まっている」(6)という。

中央教育審議会答申（2002年）では、「文部科学省が昭和39年から行っている『体力・運動能力調査』によると、子どもの体力・運動能力は、調査開始以降昭和50年ごろにかけては、向上傾向が顕著であるが、昭和50年ごろから昭和60年ごろまでは停滞傾向にあり、昭和60年ごろから現在までは低下傾向が続いている。（中略）持久走（男子1,500m, 女子1,000m）では、例えば、13歳女子は、昭和60年を最高に平成12年では25秒以上遅くなっている」（7）と述べられている。（表1-1, 図1-1）

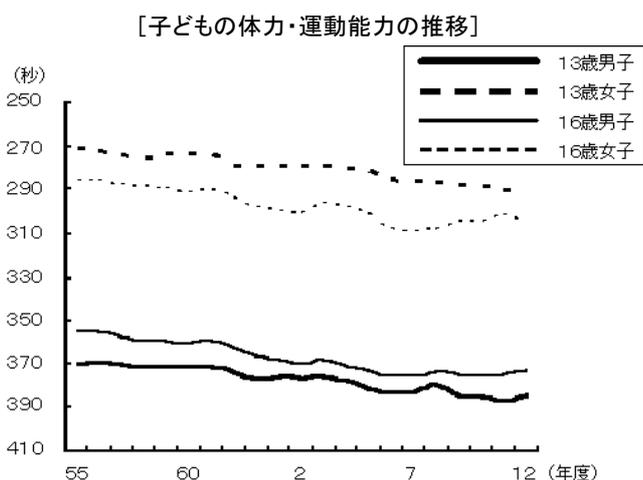
表1-1 持久走記録の低下

文部科学省『平成15年度体力・運動能力調査報告書』P.232より作成

	昭和60年	平成14年	差
13歳男子(1,500m)	366.40秒	388.65秒	-22.25秒
13歳女子(1,000m)	267.11秒	292.77秒	-25.66秒

図1-1 持久走の年次推移

「子どもの体力向上のための総合的な方策」文部科学省2002.9



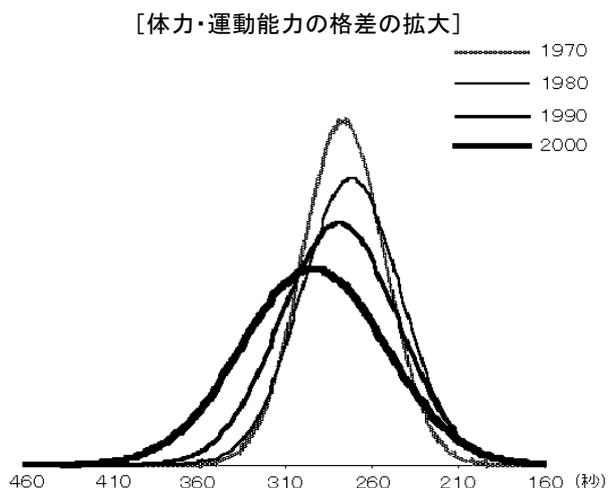
続けて答申には、子どもの体力・運動能力の低下の実態として、以下の3点が書かれている。

- ①親の世代である30年前の調査と比較すると、ほとんどのテスト項目について、子どもの世代が親の世代を下回っている。
- ②部活動やスポーツ少年団などで運動を日常的に行っている者の体力・運動能力は、運動を行っていない者を上回っている。
- ③体力・運動能力が高い子どもと低い子どもの格差が広がるとともに（図1-2）、体力・運動能力が低い子どもが増加していること。（8）

そして「このことはスポーツ少年団や部活動などで運動をよくする子どもとほとんどしない子どもとの二極化傾向が指摘されていることと無縁ではないと思われる」（9）と報告されている。

図1-2 持久走(13歳女子)

「子どもの体力向上のための総合的な方策」文部科学省2002.9

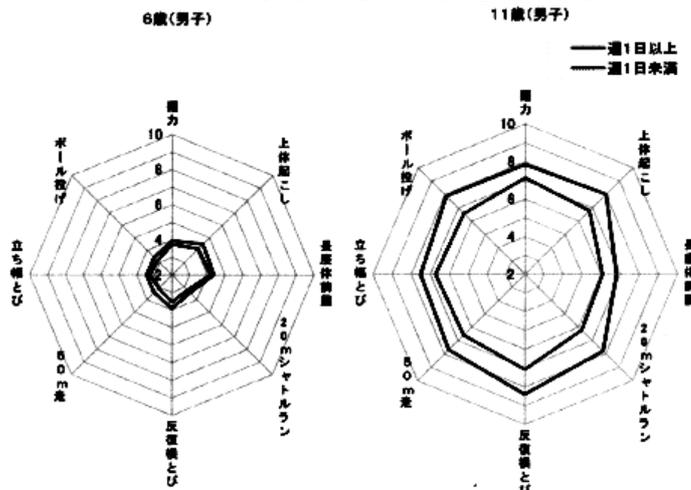


小学生の運動・スポーツ実施頻度と体力・運動能力との関係について、平成15年度の文部科学省『体力・運動能力調査報告書』では「運動・スポーツを実施（週に1日以上）している群の得点と実施していない群の得点の差は、6～11歳へと年齢が進むにつれて大きくなっている」（10）（図1-3）と述べられている。

図1-3の二つのレーダーチャートを見ると、6歳と比較して11歳の方が運動・スポーツ実施群の輪がより大きくなっており、体力・運動能力が日常の運動やスポーツ経験によって高まっていくことがよくわかる。

図1-3 スポーツの実施頻度別新体力テスト得点の比較

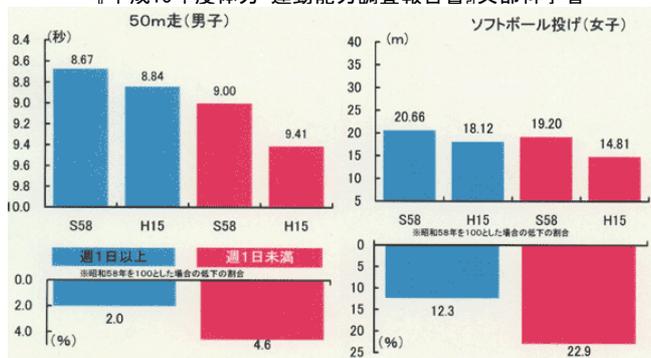
『平成15年度体力・運動能力調査報告書』文部科学省



また、11歳の「50m走」および「ソフトボール投げ」の20年前と現在の記録を比較すると、両テスト項目とも、運動・スポーツの実施頻度にかかわらず、現在が下回っている。しかし、「20年前を100とした場合の低下の割合を運動・スポーツの実

実施頻度別にみると、両テスト項目とも、運動・スポーツを実施（週に1日以上）している群の低下の割合より、実施していない群の低下の割合の方が大きくなっている」（11）（図1-4）。児童期にいかん運動・スポーツに親しませるかが課題である。

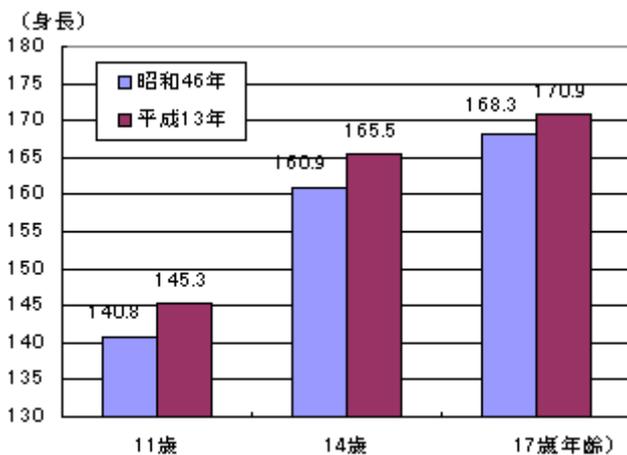
図1-4 スポーツの実施頻度別運動能力の20年前との比較
『平成15年度体力・運動能力調査報告書』文部科学省



さらに、身長、体重など子どもの体格は向上しており、「体格が向上しているにもかかわらず、体力・運動能力が低下していることは、体力の低下が深刻な状況であることを示している」（12）ということが言える。（図1-5）

図1-5 平均身長の推移(男子)

『子どもの体力向上のための総合的な方策』文部科学省2002.9



ここで「体力」について考えてみる。中学校の保健体育の教科書には「体力とは、体や心のいろいろな働きがもとになって総合的に発揮される能力です」（13）とあり、体力の要素として、「行動体力」と「防衛体力」が挙げられている。

「体力」は単に競技力やスポーツの記録と結びつく身体能力という意味で捉えられることもあるが、武藤芳照は、人間生物学の立場から「体力」は「いかなる生物圏内の自然環境にも適応し、生活し、かつ活動しうる生物としての人間本来が

もっている能力」（14）と定義している。つまり、体力が低下するということは、「それに象徴される健康障害をもたらすことを意味している」（15）と述べている。

前述の答申では、「昭和45年から平成12年にかけての30年間に、男女ともに肥満傾向児（性別・年齢別に身長別平均体重を求め、その平均体重の120%以上の体重の者）の割合は増加しているが、特に男子では各年齢層ともおよそ2倍から3倍に増加している状況」（16）が報告されている。

このような近年の子どもの肥満の増加は、肥満に伴う高血圧や高脂血症、さらには、将来の糖尿病や心臓病などの生活習慣病につながる危険性をはらんでおり憂慮される。

また、運動不足や不適切な生活習慣が及ぼす意欲や気力の低下といった精神面への影響も心配される。体力の低下により、ますます体を動かさなくなり、一層の体力低下を招くといった悪循環に陥ることも考えられる。（17）

子どもの体力低下の原因としては、先に挙げた『子どもの体力向上のための総合的な方策について』の答申の概要に以下のようにまとめられた。

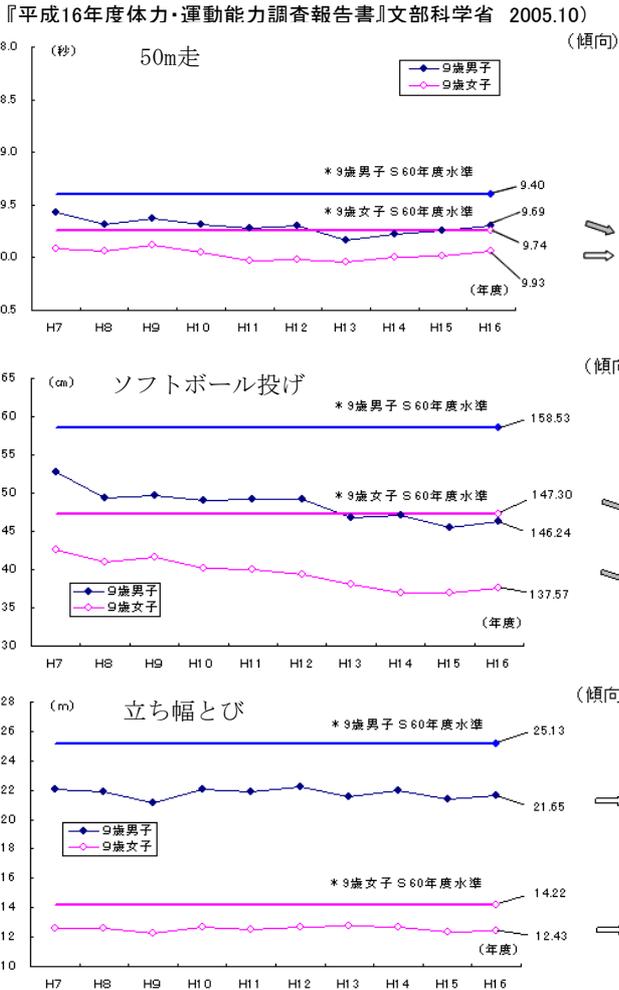
- ◇外遊びやスポーツの重要性の軽視など国民の意識
- ◇子どもを取り巻く環境の問題
 - ・生活が便利になるなど子どもの生活全体の変化
 - ・スポーツや外遊びに不可欠な要素（時間、空間、仲間）の減少など
- ◇就寝時刻の遅さ、朝食欠食や栄養のバランスの取れていない食事など子どもの生活習慣の乱れ（18）

最新の報告書で低下の実態はどうであろうか。

平成16年度の文部科学省『体力・運動能力調査報告書』では、「小学生（9歳）の『50m走（走力）』、『立ち幅とび（跳力）』、『ソフトボール投げ（投力）』について、現在と昭和60年度を比較すると、いずれのテスト項目についても男女とも現在が下回っている」（19）

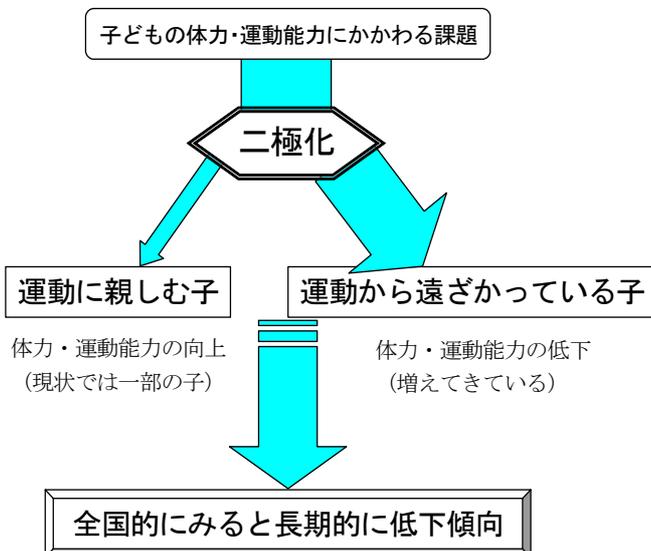
また、最近10年間の年次推移をみると、「『50m走』については、女子では明確な変化（向上もしくは低下）の傾向はみられないが、男子では低下傾向がみられる。『立ち幅とび』については、男女とも低下傾向がみられるが、『ソフトボール投げ』については、男女とも明確な変化（向上もしくは低下）の傾向はみられない」（20）ということが報告されている。（図1-6）

図1-6 小学生(9歳)の最近10年間の年次推移



これらのことから、全国的にみると子どもの体力・運動能力については長期的に低下傾向にあるといえる。しかも、運動に親しむ子とそうでない子の二極化だけではなく、体力・運動能力そのものが二極化してきていること、体力・運動能力が低い子が増えてきていることがわかる。(図1-7)

図1-7 体力・運動能力の低下



(2) 京都市の傾向

京都市の子どもたちの体力・運動能力はどうか。京都市では毎年新体力テストの結果を集計分析し、『新体力テスト結果報告書』としてまとめている。平成16年度の報告書をもてみる。

前年度との比較をみると、小学校男子で上昇が目立ったのは「長座体前屈」である。四つの学年で前年度を上回った。下降が目立ったのは「シャトルラン」で全ての学年で平均値を下回った。小学校女子で上昇が目立ったのは「長座体前屈」で、五つの学年で前年度を上回った。「上体起こし」も四つの学年で前年度を上回った。下降が目立ったのは「シャトルラン」「握力」「立ち幅跳び」で、四つの学年で前年度を下回った。(表1-2)

表1-2 15年度・16年度京都市平均値比較

京都市教育委員会『平成16年度新体力テスト結果報告書』P.23より作成

		シャトルラン(折り返し数)		
性別	学年	15年度	16年度	差
男子	1	14.8	13.1	-1.7
	2	22.4	21.9	-0.5
	3	30.5	28.3	-2.2
	4	39.5	37.7	-1.8
	5	49.3	44.9	-4.4
	6	56.4	55.4	-1.0

全国との比較をみると、小学校男子で上回ったのは「長座体前屈」で、全ての学年において全国平均を上回った。下回ったのは、「握力」「反復横とび」「シャトルラン」で、全ての学年において全国平均を下回った。「立ち幅跳び」は五つの学年において下回った。小学校女子で上回ったのは、「長座体前屈」で、全ての学年において全国平均を上回った。下回ったのは、「握力」「反復横とび」

「シャトルラン」「立ち幅跳び」で全ての学年において全国平均を下回った。(表1-3)

表1-3 16年度京都市・全国平均値比較

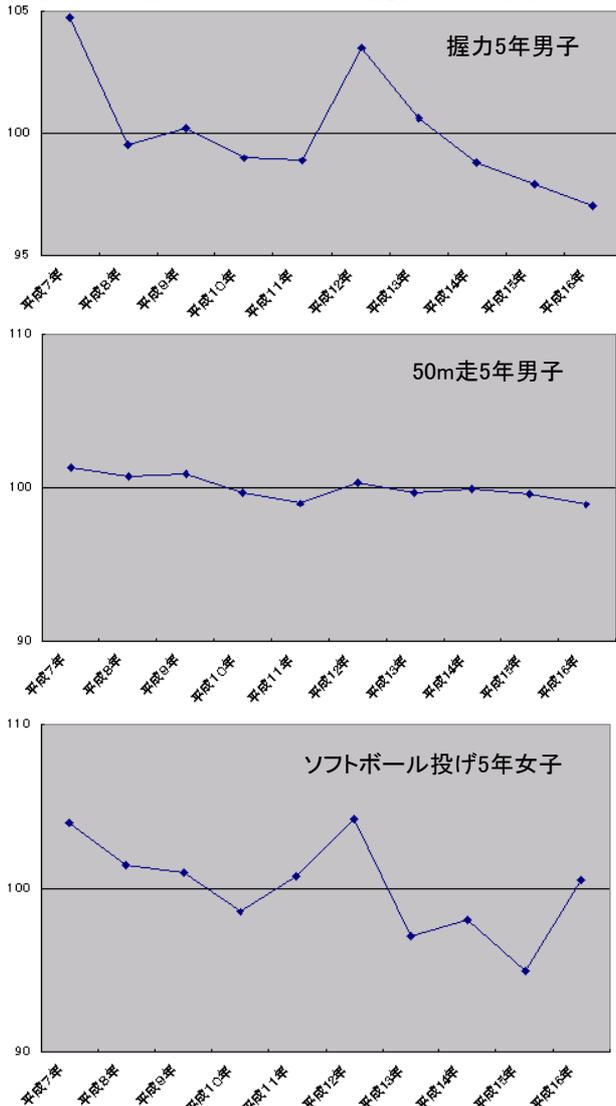
京都市教育委員会『平成16年度新体力テスト結果報告書』P.24より作成

		反復横とび(点)		
性別	学年	京都市	全国	差
女子	1	22.6	26.0	-3.4
	2	24.9	29.1	-4.2
	3	28.6	32.4	-3.8
	4	32.1	35.9	-3.8
	5	35.2	39.5	-4.3
	6	38.1	41.5	-3.4

新体力テスト以前の体力テストにおいても行われていた種目の過去10年の推移をみると、5年生では「握力」は男女とも下降傾向であり、男子は16年度過去最低であった。「50m走」は下降傾向が顕著であり、男子は「握力」同様16年度の記録は過去最低であった。「ソフトボール投げ」はここ10年男女とも横ばいだが、30年前との差は大きい。

図1-8 過去10年間の体力・運動能力の推移 (図1-8)

『平成16年度新体力テスト結果報告書』京都市教育委員会



この10年で見ると、横ばいの種目も、続けて低下傾向の種目もあるが、昭和45年と比べると明らかに低下しているといえる。さらにいえることは上半身の筋力の低下と「走り幅とび」「ソフトボール投げ」や「連続逆上がり」のように経験が左右するものの落ち込みが大きいようだ。(21)

部活動所属による比較をみると、6年生男子では、「シャトルラン」に目立って大きな差がみられた。また、「握力」を除いて全ての種目において未所属者の平均を上回っている(握力はほぼ同じ)。

全国平均と比べて、所属者は「上体起こし」「長座体前屈」「50m走」「立ち幅跳び」が上回った。未所属者は「長座体前屈」のみ上回っている。女子では、「シャトルラン」と「ボール投げ」に目立って大きな差がみられたほか、全ての種目において未所属者の平均を上回った。全国平均と比べて、所属者は「上体起こし」「長座体前屈」「50m走」「シャトルラン」が上回った。未所属者は「長座体前屈」のみ上回った。

これは、部活動の「所属者は未所属者より体力・運動能力で明らかに高い水準にある」(22)『平成16年度体力・運動能力調査報告書』(文部科学省)においても、「運動・スポーツの実施頻度が高いほど体力水準が高いという関係は、9歳ごろから明確になり、その傾向は79歳に至るまで認められる」(23)とされていることから納得できる。

運動をする機会が多い子どもと少ない子どもでは、体力・運動能力の格差が広がることになる。体力の低下が続くと、体を動かすことをしなくなり、一層の体力の低下を招くという悪循環に陥ることが考えられる。運動をよくする子どもとほとんどしない子どもの二極化傾向は、体力・運動能力の二極化傾向につながっていると考えられる。

これらのことから、京都市においても子どもの体力・運動能力は引き続き低下傾向にあるといえる。しかし一部に明るい兆しもみられ、体力要素、運動能力要素によって違いがみられる。

一例が、柔軟性の指標となる「長座体前屈」である。昭和45年のデータと直接は比べられないが、ここ数年のデータや全国平均と比べても上昇傾向にある。全学年で同様の傾向を示しているため、この原因を考察していくことが他の体力・運動能力の低下に歯止めをかけることにつながるかもしれない。今後は低下の実態と原因を詳しくみていく必要があるようである。(表1-4)

表1-4 15年・16年度京都市・16年全国平均値比較
京都市教育委員会『平成16年度新体力テスト結果報告書』P.24より作成

		体前屈 (cm)		
性別	学年	15年京都市	16年京都市	16年全国
女子	1	27.4	28.6	27.4
	2	29.1	30.3	29.7
	3	33.0	31.6	31.5
	4	33.9	34.1	33.4
	5	35.9	36.4	36.0
	6	38.3	39.0	38.0

(3) 子どもの生活およびスポーツ活動の現状

子どもの生活が昔に比べて多忙になり、時間に追われていること、外遊びが減り家に帰った後は一人で過ごすことが多いこと、人間関係が希薄になりがちで友だちとコミュニケーションをとることが難しい子が増えていること、などがいわれるようになってきたが、阿部茂明らがほぼ5年おきに保育や教育の現場で指導者が「実感」している子どもの“からだのおかしさ”を調査してきたことによると、2005年の調査でも表のように体力や運動能力に起因すると思われる子どもの“からだのおかしさ”がみられる。(24) (表1-5)

スポーツ活動の実施状況をみてる。

国際的にみると日本の小学生の運動・スポーツ活動の現状はどうであろうか。2000年に報告されたWHO「Health and Health Behavior among Young People」では、ヨーロッパと北米を中心とした29の国・地域における青少年の身体活動を頻度と時間の観点より国際比較している。

図1-9では11歳の子どもの「活動的な身体活動」を週2回以上、週2時間以上実施した者の割合を、それぞれ27の国・地域と日本で比較した。

この国際比較データを見ると、実施頻度では日本の11歳は男女とも最下位。実施時間では11歳は男女いずれもロシア連邦に次ぐ第26位である。

この結果から、日本の小学校高学年の子どもたちは運動・スポーツ活動の頻度と時間が国際的には非常に低いレベルにあることが明らかになった。(25) (表1-6)

表1-6 「活動的な身体活動」の国際比較

SSF笹川スポーツ財団

『青少年のスポーツライフ・データ2002』P.28より作成

	11歳男子	11歳女子
週2回以上実施者の割合	28位 (最下位)	28位 (最下位)
週2時間以上実施者の割合	26位	26位

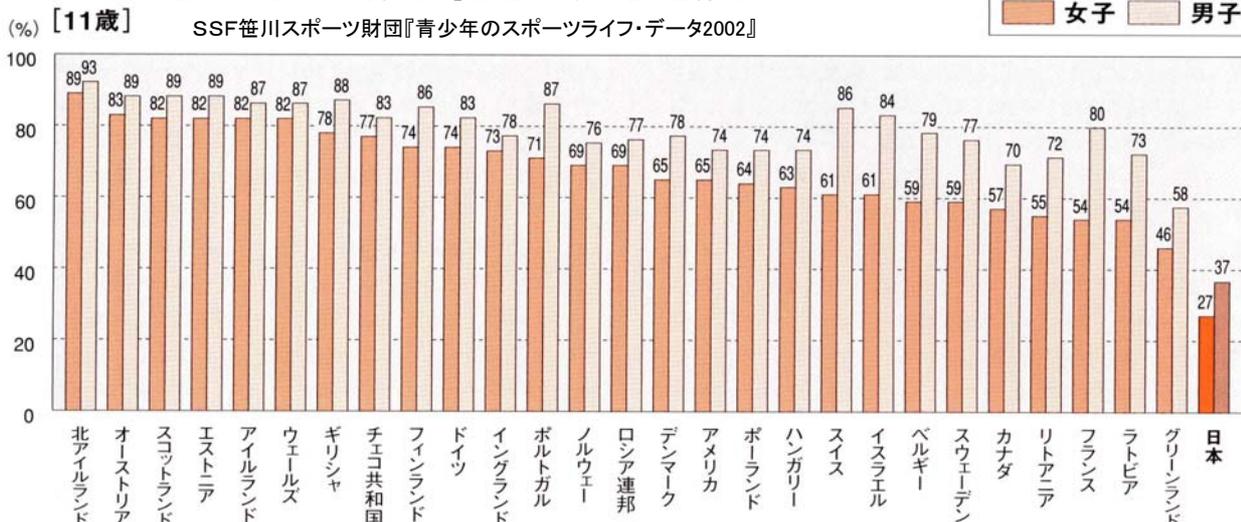
表1-5 子どものからだの調査(2005速報)

(小学校)

(『子ども白書2005』草土文化)

	1978年 (%)	1990年 (%)	1995年 (%)	2000年 (%)	2005年 (%)
①背中ぐにゃ	44	①アレルギー 87.3	①アレルギー 88.0	①アレルギー 82.2	①アレルギー 82.4
②朝からあくび	31	②皮膚がカサカサ 72.6	②すぐ「疲れた」という 77.6	②すぐ「疲れた」という 79.4	②背中ぐにゃ 74.5
③アレルギー	26	③すぐ「疲れた」という 71.6	③視力が低い 76.6	③授業中、じっとしていない 77.5	③授業中、じっとしていない 72.5
④背筋がおかしい	23	④歯ならびが悪い 69.9	④皮膚がカサカサ 71.4	④背中ぐにゃ 74.5	④すぐ「疲れた」という 69.9
⑤朝礼でボタン	22	⑤視力が低い 66.9	⑤歯ならびが悪い 70.8	⑤歯ならびが悪い 73.2	⑤皮膚がカサカサ 65.7
⑥雑巾がかたくしぼれない	20	⑥背中ぐにゃ 68.7	⑥背中ぐにゃ 69.3	⑥視力が低い 71.7	⑥症状が説明できない 63.1
⑦転んで手が出ない	20	⑦腹痛・頭痛を訴える 65.5	⑦腹痛・頭痛を訴える 66.7	⑦皮膚がカサカサ 67.4	⑦視力が低い 63.1
⑧何でもない時骨折	19	⑧転んで手が出ない 62.3	⑧症状が説明できない 63.5	⑧ぜんそく 62.7	⑧平熱36度未満 60.1
⑨腹のでっぱり	19	⑨症状が説明できない 61.9	⑨平熱36度未満 60.4	⑨症状が説明できない 61.9	⑨体が硬い 60.1
⑩懸垂ゼロ	18	⑩ちょっとしたことで骨折 58.4	⑩転んで手が出ない 55.7	⑩平熱36度未満 60.9	⑩ボールが目にあたる 59.8

図1-9 「活動的な身体活動」週2回以上実施者の国際比較



京都市の小学生はどうであろうか。

京都市教育委員会体育健康教育室では毎年各学校の部活動の参加状況と京都市スポーツ少年団の登録状況を集約している。(表1-7, 1-8)

部活動への参加状況をみると4~6年生のいずれも参加人数、割合ともに増加しており、各校の熱心な取組が実を結んでいると思われる。(26)

スポーツ少年団も平成13年度以降毎年団数、団員数ともに増え続けている。こちらも指導者の方々の努力が実を結んでいると思われる。(27)

これらの結果から、京都市の小学生はスポーツに親しむ子が少しずつ増えてきていると考えてよいだろう。しかし、一方では体力・運動能力は停滞、または低下傾向を示し続けている。

これは体力・運動能力の低下の問題が、単に運動・スポーツ活動に親しむ回数を増やしたり、時間を延ばしたりするだけでは解決しないことを物語っているのではないか。そうであるならば、学校での体育学習や体育的な活動、部活動、少年団などのスポーツ団体の活動内容について見直していく必要があるのではないか。

表1-7 京都市スポーツ少年団登録数の推移

京都市教育委員会体育健康教育室 2005

年度	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	5年間推移
単位団(団)	231	232	232	237	246	+15
団員(人)	6,627	6,715	6,728	7,100	7,486	+859
指導者(人)	763	805	847	878	893	+130

さらに心配されることは、児童期という発達段階を考えたときに、「児童期にはどのようなスポーツ環境が必要か。」という視点で活動が仕組まれているかということである。

永井洋一は『スポーツは「良い子」を育てるか』(NHK出版 2004.6)の前書きで、「日本でスポーツに携わる人の多くは『なぜ人はスポーツをするのか』という根源的な問いに対して明確なビジョ

表1-8 京都市立小学校部活動参加児童数の推移

京都市教育委員会体育健康教育室 2005

○学年別参加児童数												
年度等	17年度		16年度		15年度		14年度		13年度	12年度	11年度	10年度
育成学級	1,675	4.7%	1,872	5.5	1,903	5.5	1,067	3.1				
4年	5,064	45.4%	5,009	42.6	4,414	39.8	3,845	34.2	4,733	4,281	3,950	3,915
5年	6,868	58.2%	6,126	55.5	5,825	52.0	5,173	46.6	5,471	5,184	5,336	4,971
6年	6,753	60.8%	6,702	59.9	6,188	45.8	5,650	49.9	5,779	5,969	5,436	5,435
合計	20,360	29.5%	19,709	28.9	18,330	26.9	15,735	23.4	15,983	15,434	14,722	14,321
1校平均児童数	114		111		102		88					
1部平均児童数	31		31		31		29					
			※児童数は延べ人数						※13年度以前はスポーツ教室			

ンをもたないまま、いたずらに体だけが鍛えられていくこととなります。その結果日本のスポーツ界は、『面倒なことを考える前に、まず目の前の勝負に勝つこと』といった、刹那的な視点をもつ人物が大勢を占める状況になっています。少年スポーツの世界も(中略)勝つか負けるかという単純な判断基準でしかスポーツをとらえることができなくなっています」(28)と述べている。

さらに、「少年期にスポーツをどのように与えるべきか、という大切な命題をすっかり忘れてしまっている監督・コーチ、そして親が多いのです。その結果、私から見れば、スポーツに深くかかわることが成長発達に好ましい影響を与えるどころか、かえってスポーツをすることが少年の人格を歪めてしまうのではと心配される現象も増えています」(29)と警鐘を鳴らしている。

その逆に、自由にスポーツをさせていけばよいということで人間関係も含めて指導がほとんどなされていない様子を目にすることがある。子どもたちは、時には弱肉強食の面をもっている。スポーツ活動の中で“得意な子は伸び伸びと活動量も多く、苦手な子は精神的に隅に追いやられ、活動量や力を試す機会も少ないまま休みがちになる”というのは、部活動では目にしてきた光景である。

また、小学生においても近年スポーツ障害の件数が増えつつあることも気がかりである。使いすぎによるスポーツ障害はよく言われるが、体力面、技能面で低位な子がスポーツ活動に入ってきて障害を起こすことも見てきた。子どものスポーツ障害の増加には体力・運動能力の低下が影響していることも考えられる。

武藤芳照らは、学校における健康問題は「昭和10年代の感染症主体から徐々に変遷し、現在はスポーツ障害と生活習慣病が主要なものとなっている。両者の原因は、運動・スポーツの過度と欠如という表裏一体の関係にあり、運動にかかわる健康問題の二極化と捉えられる」(30)と述べている。

子どもたちの遊びの文化が衰えていく中、その再構築も重要な課題であるが、児童のスポーツに関わってきた者として、スポーツ活動の中でまだまだできることがあるように思われる。

では、実際に子どもたちはどのようなスポーツ活動を求めているのだろうか。

子どもとスポーツの関係を生涯のものにし、人として生きていくときに、スポーツがかけがえのないものになるためには、どのような視点が必要になるのだろうか、質問紙調査から現状と課題を探っていきたい。

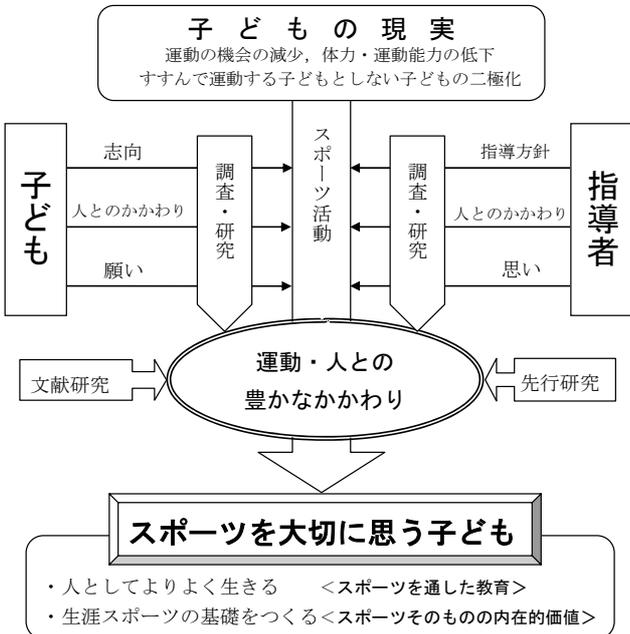
第2節 調査研究の概要

(1) 調査の構造および設問の構成

本研究では、部活動とスポーツ少年団の子どもとその子どもを実際に指導する指導者両方の現状と意識を調査した。また、ある程度スポーツ活動の経験がある子どもたちの意識を調べるために、対象は6年生児童に限定した。

運動の機会の減少、体力・運動能力の低下や、すすんで運動する子どもとそうでない子どもの二極化などの子どもの現状を、子どもたちが運動や人との豊かなかかわりの中で自ら乗り越えていってほしい。豊かなスポーツ活動の経験の中でそのスポーツ経験を自分にとって意味あるものにしてほしい。また、多くの指導者の子どものための献身的な指導が子どもに生きて働いてほしい。そのようなスポーツ活動を探っていくために、図1-10に表した研究の構造を考えた。

図1-10 研究の構造図



<調査研究のねらい>

指導者が何を考え、何に問題を感じているか。子どもたちはどのようなスポーツとのかかわりを望み、どのような悩みをもっているか。両者の意識と現状を明らかにしていく。

<設問の構成>

6年生児童への質問紙は、「①子どものスポーツ活動(運動)を支える子どもの意識と実態」の中に「子どもの生活習慣と自己意識」「運動についての実態と意識」「スポーツ活動の現状」の三つのカテゴリーを考えた。そして「なぜスポーツをするのか」「スポーツに何を求めているのか」という問いに迫るため、「スポーツの楽しさ」については細かく選択肢を設けた。また、人とのかかわりについても意識を探っていくために子どもと「指導者」「保護者」「友だち」との関係を見るカテゴリー分けもしてみた。多くの設問は①とそれ以外で重複している。(図1-11, 表1-9)

図1-11 調査の構造(児童)

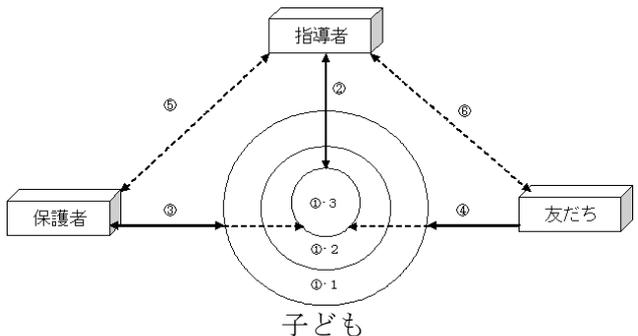


表1-9 質問紙の構成(児童)

要 素			質問番号	
① 子どものスポーツ活動(運動)を支える子どもの意識と実態	①-1 子ども自身の周辺環境	①-1-イ 生活習慣にかかわること	3, 4, 5, 6, 7	
		①-1-ロ 自己認識にかかわること	1, 2, 11, 12, 13, 14	
	①-2 運動についての現状	①-2-イ 運動にかかわる実態	9, 10, 17, 18, 26	
		①-2-ロ 運動にかかわる意識	8, 15, 16, 自由記述	
		①-2-ハ 望む活動	19, 20, 21, 22, 23, 24, 25	
		①-2-ニ スポーツの楽しさ	47	
		①-3 スポーツ活動の現状	①-3-イ スポーツをしない理由	27
			①-3-ロ 現在のスポーツ活動の実態	28, 35, 36, 37, 38, 39, 43, 44
			①-3-ハ 現在のスポーツ活動への意識	29, 30, 31, 32, 33, 34, 40, 41, 42, 45, 46
			①-3-ニ	
人とのかかわりから見ると				
② スポーツ活動を支える「子どもと指導者」のかかわり	指導内容や指導方法にかかわること	23, 31, 32, 33, 34		
	指導者との人間関係にかかわること	20, 23, 36, 自由記述		
③ 子どもと保護者	運動やスポーツへの支援にかかわること	17, 18, 37, 38		
④ 子ども同士	友だちとの人間関係にかかわること	22, 35, 40		
⑤ 指導者と保護者	子どもと指導者との関係への保護者のかかわり	39		
⑥ 友だちと指導者	子どもと友だちとの関係への指導者のかかわり	41, 42		

指導者への質問紙は、「①指導者自身について」の中に立場や運動・競技経験の有無などの「前提となるもの」と「指導の現状」の二つのカテゴリーを考えた。ここでも、「なぜスポーツをするのか」の問いに迫るために、「スポーツの楽しさ」や「ス

「スポーツを通して子どもたちに伝えたいこと」の設問は自由記述にして、指導者の意識をより深く探ろうとした。児童向けと同様に指導者と「子ども」「保護者」「子どもの友だち関係」との関係を聞く設問も設けた。(表1-10)

表1-10 質問紙の構成(指導

児童のスポーツ指導における指導者の意識

要 素	質問番号
① 指導者自身について	①-1 前提となるもの 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7 ①-2 指導の現状 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 25
② 子どもと指導者のかかわり	8, 26
③ 保護者と指導者のかかわり	20, 21
④ 子ども相互の関係への指導者のかかわり	19, 22, 23, 24
指導者が必要としている情報	27, 28

(2) 調査実施の概要

調査の構造と設問の構成から巻末に示した調査問題を作成し、調査を実施した。調査の概要は次のとおりである。

<調査対象>

京都市立小学校、京都市スポーツ少年団の6年生
小学校部活動、京都市スポーツ少年団の指導者
<調査協力校および調査協力団体>

京都市地域類型(31)に基づき、類型ごとの比率に合わせて児童数を算出し、京都市立小学校27校に実施を依頼した。また、京都市スポーツ少年団本部より推薦を受けた21団に実施を依頼した。

京都市立小学校 27校 6年生 (1,447名)
指導者 (205名)

京都市スポーツ少年団 21団 6年生 (約130名)
指導者 (約100名)

<調査期間と方法>

- ・平成17年7月11日～8月末実施
- ・京都市立小学校…学級単位で一斉に実施
- ・スポーツ少年団…団単位で一斉に実施
- ・指導者については適時実施。

<有効回答者数・回答割合および標本誤差>

地域類型ごとの有効回答者数および回答割合は、表1-11のとおりである。さらに調査精度をみるために標本調査で用いられる数式(32)によって標本誤差(E)を算出した。信頼度を95%として標本誤差が最大となる標本の統計値50%の標本誤差を算出したところ、2.64% (標本の統計値が50%の場合、47.36%から52.64%の範囲内にその誤差が収まる確率が95%という意味。)となり、調査結果の水準は概ね満足できるものであるといえる。

$$E = 2.64$$

本市6年生の児童数は11,102名(平成17年4月現在)なので、本調査の1%は110人として換算することができる。

表1-11 有効回答者数・回答割合一

	地域類型	地域	調査協力校数	児童数比率	有効回答数		回答割合	
	京都市立 小学校 6年生	I類	農山村	2	1.5%	7	16	1.2%
II類		3		9				
III類		住宅① 住宅② 住宅③	6	16	63.7%	365	912	65.9%
			5			320		
			5			227		
IV類		商業	4	5	14.7%	155	177	12.8%
1			22					
V類		工業	1	3	20.1%	114	278	20.1%
VI類			1			99		
VII類			1			65		
合計			27	100.0%	1383	1383	100.0%	

- (1) 「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」『保健体育審議会答申』文部科学省 1997.9
- (2) 前掲(1)
- (3) 正木健雄『おかしいぞ子どものからだ』大月書店 1995.6
- (4) 前掲(3) p.96
- (5) 前掲(3) p.97
- (6) 「子どもの体力向上のための総合的な方策について」(答申の概要)中央教育審議会 2004.1
- (7) 「子どもの体力向上のための総合的な方策について」中央教育審議会 2002.9
- (8) 前掲(7)
- (9) 前掲(7)
- (10) 『平成15年度 体力・運動能力調査報告書』文部科学省 2004.10
- (11) 前掲(10)
- (12) 前掲(7)
- (13) 『新・中学保健体育』学習研究社 2005.1 検定済
- (14) 武藤芳照「体力の立体像」『理学療法22』2005.3
- (15) 武藤芳照 他4名「運動器と学校健診」『THE BONE Vol.19 No.4』2005.7 p.32(384)
- (16) 前掲(7)
- (17) 前掲(7)
- (18) 前掲(6)
- (19) 『平成16年度 体力・運動能力調査報告書』文部科学省 2005.10
- (20) 前掲(19)
- (21) 『平成16年度 京都市立学校児童・生徒 新体力テスト結果報告書』京都市教育委員会 2005.3
- (22) 前掲(21) p.44
- (23) 前掲(19) p.29
- (24) 阿部茂明「子どもの『からだのおかしさ』の実感」『子ども白書2005』草土文化 2005.8 p.108,109
- (25) 『青少年のスポーツライフ・データ2002』SSF笹川スポーツ財団 2002.8 pp.28～30
- (26) 「京都市立小学校部活動参加児童数の推移」京都市教育委員会体育健康教育室 2005
- (27) 「京都市スポーツ少年団登録数の推移」京都市教育委員会体育健康教育室 2005
- (28) 永井洋一『スポーツは「良い子」を育てるか』NHK出版 2004.6 p.5,6
- (29) 前掲(28) p.6
- (30) 前掲(15) p.32(384), 33(385)
- (31) 京都市地域類型：京都市の対象地域についてある一定の標識(基準・目印)や、地域特性に基づいて比較的同じような条件にある学校を単位地区(小学校通学区域等)としてまとめ類型化したもので、層化抽出による標本調査のための基礎資料となるもの。
参考：『京都市における地域類型』—教育調査のために—京都市教育研究所 報告471 2001.3
- (32) 岩永雅也 他2名『社会調査の基礎』放送大学教育振興会 2001.3 p.74
標本誤差(E)の算出は次式による。

$$E = |P - p| = 1.96 \sqrt{\frac{p(100-p)}{n}}$$

P：母集団の統計値(%) p：標本の統計値(%) n：標本の規模

第2章 児童のスポーツ活動について見えてきたもの

第1節 子どもとスポーツ活動

(1) スポーツ活動への参加は子どもにプラスなのか？

「スポーツをすると体と心が鍛えられる」から成長期の子どもにはスポーツを経験させたい、と考える保護者や教職員は多いであろう。

では、スポーツ活動に参加している児童は参加していない児童と比べて、本当に望ましい内容を身につけているのだろうか。

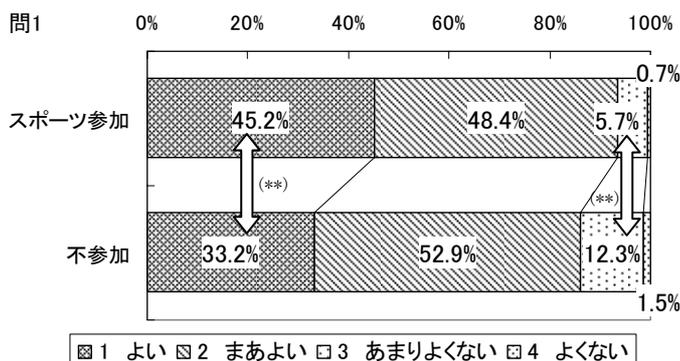
前章第1節では、体力・運動能力について、全国的にも京都市でも、スポーツに参加している児童のほうが上回っていて、しかも学年が上がるほどその差が広がっていくのを確認した。

そこで本項では、児童をスポーツ参加群(n=992, 以下“参加群”)とスポーツ不参加群(n=391, 以下“不参加群”)に分けて、スポーツ参加と生活の現状の関係を質問紙調査の結果を通してみたい。

また本章では、有意差検定により有意水準を求め、有意差の判定を行った結果については、以下、「有意水準1%以内」を(**), 「有意水準5%以内」を(*)という形でグラフ内に示す。

なお、グラフの比率については四捨五入により10分の1の位までの概数で表したため、合計が100%になっていないものもある。

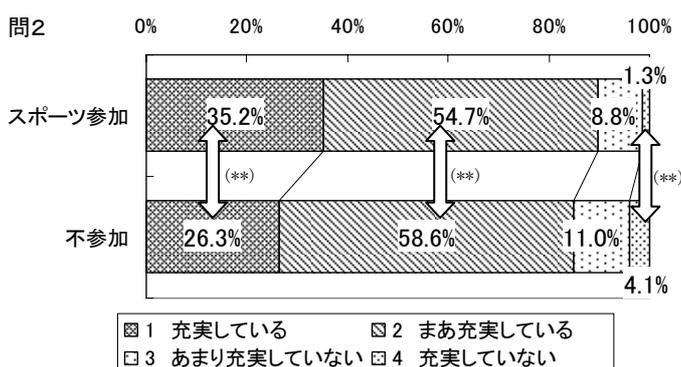
図2-1 普段の体の調子 (n=1,383)



“ふだんの体の調子”という漠然とした質問をすることによって、自分自身の体の状態をどう捉えているか聞いた設問である。

「1よい」は参加群が多く、「3あまりよくない」は不参加群が多い。スポーツ参加群の方が体の調子がよいと考えている傾向がわかる。

図2-2 生活の充実感 (n=1,383)

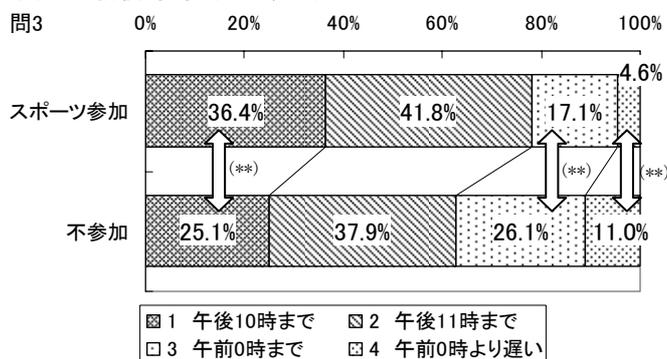


この設問は、児童が自分自身の現状を肯定的に捉えているかを調べるものである。

「1充実している」は参加群が多く、「2まあ充実している」は若干不参加群が多い。また、「4充実していない」は不参加群が多い。全体としてみると、参加群の方に生活が「充実している」と感じている児童が多い傾向がわかる。

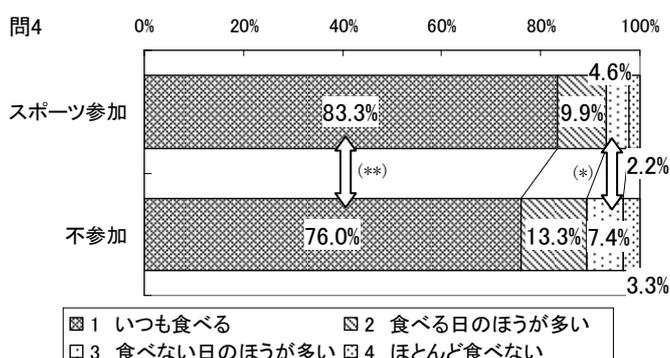
以下は具体的な生活習慣についての問であるが、スポーツ参加の実態とある程度のかかわりがみられると思われる問について取り上げる。

図2-3 就寝時刻 (n=1,383)



参加群は不参加群に比べて、「午後10時まで」に寝る子が多く、11時以降に寝る子が少ないことがわかる。参加群の方が早寝であると言える。全体に11時以降に寝る子が多いのが気になる。

図2-4 学校のある日の朝食 (n=1,383)



参加群は不参加群に比べて、「1いつも食べる」子が多く、「3食べない日の方が多い」子が少ない。参加群の方が朝食を食べている子が多い。

問5はテレビやテレビゲームの時間を訊いた設問である。「1ほとんど見ない、しない」は参加群の方が少なく有意な格差(*)があったが、他は違いがみられなかった。

図2-5 スポーツ以外の習い事 (n=1,383)

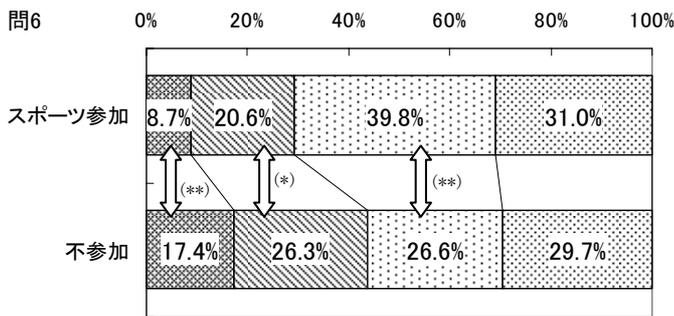


図1 週に5日以上 図2 週に3~4日 図3 週に1~2日 図4 していない

参加群に比べて、不参加群は週に3日以上習い事をしている子が多く、スポーツに参加していない子には習い事で忙しい子が多いことがわかる。

図2-6 下校後過ごす人数 (n=1,383)

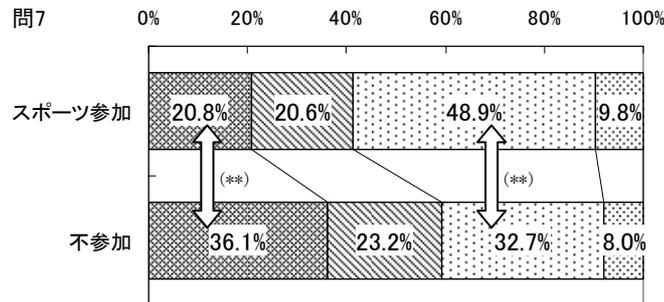
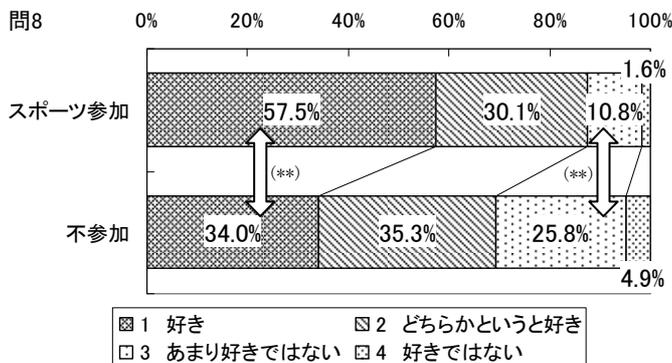


図1 自分ひとりで 図2 友だちと2人で 図3 3人~5人で 図4 6人以上

放課後、参加群は不参加群に比べて「3人~5人」の友だちと過ごす児童が多く、一人で過ごす児童は少ないようである。

図2-7 外遊びについて (n=1,383)



問9 休み時間の外遊び。問10 家庭での外遊び。
問8~10は外遊びについての設問なので、ま

めてみていく。

参加群は不参加群に比べ、「1好き」が多く、「3あまり好きではない」が少ない。参加群の方が外遊びを好きな児童が多いと言える。ただし、不参加群も「好き」と「どちらかという好き」をあわせて70%近くの児童が、外遊びを好ましく思っており、児童がもつ運動欲求の強さがわかる。

表2-1は外遊びにかかわる3問の1, 2(肯定的)と3, 4(否定的)の合計を表したものである。

参加群87.6%, 不参加群69.3%が外遊びを好きだと答えているが、実際に外遊びをしている割合は休み時間(校内), 下校後(校外)と10%程度ずつ下がっていく。これは前章第1節(1)で述べた体力・運動能力の低下の原因の中の、「スポーツや外遊びに不可欠な要素(時間, 空間, 仲間)の減少」が関わっていると思われる。

表2-1 外遊びへの意識と現状

		1, 2	3, 4	
問8	意識	スポーツ参加	87.6%	12.4%
	不参加	69.3%	30.7%	
問9	校内	スポーツ参加	73.5%	26.5%
	不参加	56.3%	43.7%	
問10	校外	スポーツ参加	68.3%	31.7%
	不参加	47.3%	52.7%	

図2-8 運動不足の自覚 (n=1,383)

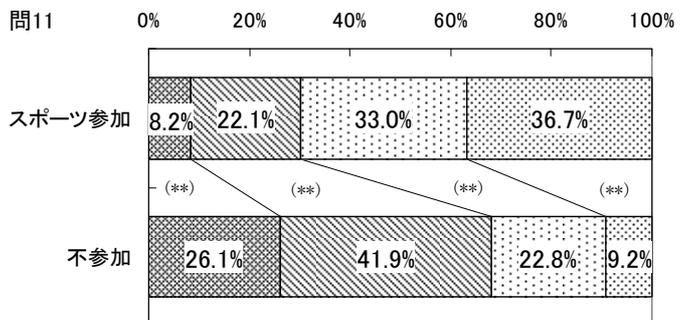


図1 そう思う 図2 まあそう思う 図3 あまり思わない 図4 思わない

不参加群はスポーツをしていないため「1そう思う」と「2まあそう思う」を合わせて68%が運動不足を感じている。約70%が運動不足を感じている不参加群の実態が明らかになったが、参加群の中にも30%程度運動不足を感じている児童がいる。これは参加しているスポーツの活動量や外遊びの不足の他に、「自分の理想と比べて、まだまだ運動が足りない」という意味の「運動不足」もあるのではないかと推測できる。

問12は疲れやすいかどうかを訊いた設問である。参加群に比べて、不参加群の「1そう思う」と

答えた子は5.6%多く、有意な格差^(*)があったが、他には違いがみられなかった。

スポーツ参加の有無にあまり関係がないと思われる設問は以下のものである。

問13 あなたは体がかたいほうだと思いますか。

問14 あなたは姿勢が悪いと言われたことがありますか。

これらの生活習慣を規定している要因はスポーツだけではないということである。ここまでのことから次のようなことがわかる。

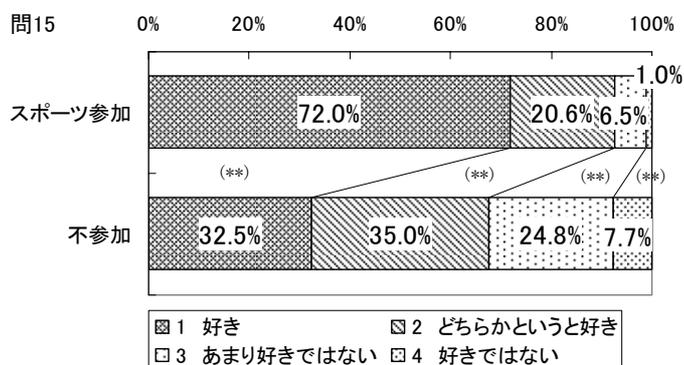
- スポーツ活動をすれば、必ず心身の状態が改善されるわけではないが、スポーツ参加群は、自分自身を積極的に評価し、「やればできる」という有能感を感じていると思われる児童の比率が高い。
- 同様に参加群の方が、基本的な生活習慣を身に付けている比率が高く、スポーツ活動に参加することが児童の生活の改善に機能していることがうかがえる。

ただし、スポーツをしたから上記のような望ましい状態を手に入れることができたのか、もともと望ましい条件をもった児童だったのでスポーツ活動も続いているのかは、今回の調査では不明である。

(2) 運動への子どもの意識

ここでは運動やスポーツそのものに対して児童がどのような意識をもっているのかをみていく。運動・スポーツから遠ざかっている子どもの視点を加えることで、より多くの子どもの運動・スポーツ活動に対する意識を考察することができる。

図2-9 運動・スポーツが好きか (n=1,383)



「好き」と答えた児童は参加群のほうが2倍以上多い。しかし1, 2を加えると参加群92.6%, 不参加群67.5%となり、不参加群の児童も70%近くが運動やスポーツに対して好印象をもっていることがわかる。

さらに、「外遊び」について尋ねた問8と「運動・スポーツ」について尋ねた問15で1, 2と答えた比率と1, 2の比率の合計を表にしてみた(表2-2)。参加群では運動・スポーツが「好き」と答えた児童が14.5%増え、不参加群はそれぞれの比率がほぼ同じである。

つまり、参加群の児童には「外遊びよりスポーツがさらに好き」な子が多く、不参加群の児童には「外遊びは好きだけど、スポーツはちょっと…」ではなく「外遊びもスポーツも同じくらい好き」な子が、70%程度いることがわかる。

表2-2 外遊びとスポーツ活動

	問8		問15	
	1	2	1	2
参加	57.5%	30.1%	72.0%	20.6%
	87.6%		92.6%	
不参加	34.0%	35.3%	32.5%	35.0%
	69.3%		67.5%	

図2-10 運動・スポーツが得意か (n=1,383)

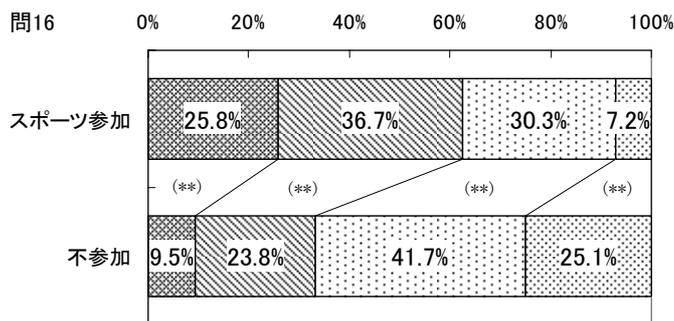


図1 そう思う 図2 まあそう思う 図3 あまり思わない 図4 思わない

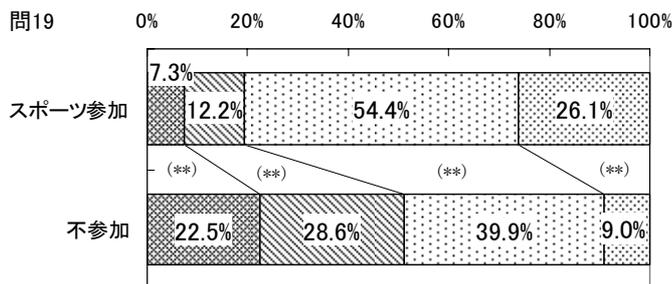
1, 2を合わせて参加群は62.5%の児童が、不参加群は33.3%の児童が得意な方だと思っている。問15で1, 2と答えた不参加群の児童が67.5%なので、不参加群で運動・スポーツが好きの子の半分以上は「好きだけど、苦手」と思っていることになる。

問17, 18はスポーツについての家庭環境を知るための設問である。両設問ともに不参加群より参加群の家族の方が、スポーツ好きであることがわかり、有意(**)な格差がみられた。児童のスポーツ参加においてはスポーツにかかわる家庭環境、家族の好みが大きく影響していることがわかる。

児童のスポーツ活動を活発にするためには、家庭の協力はもちろん必要だが、保護者の休暇の実態や、親子の志向の違いなどむずかしい問題もあり、地域や学校の受け皿作りが大切になると考えられる。

次の設問からは児童がどのようなスポーツ活動を望んでいるかをみていく。

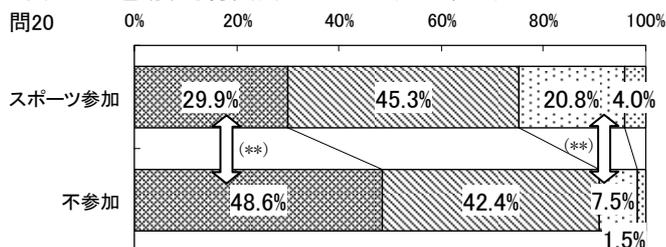
図2-11 運動の時間や量について (n=1,383)



- ☐1 短時間でできる手軽な運動
- ☐2 手軽な運動をしたい
- ☐3 ある程度しっかり運動したい
- ☐4 長時間たくさん運動したい

参加群ではやはりしっかり運動をしたいと考える児童が多いが、不参加群でも48.9%の児童はある程度しっかり運動したいと考えている。児童の潜在的な運動欲求はかなりあるといえる。ただし、手軽にできる運動をしたいと思っている児童の割合もかなりあるため、活動の場の多様性が求められているのかもしれない。

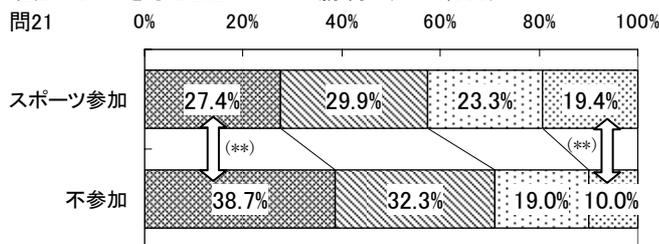
図2-12 運動する雰囲気について (n=1,383)



- ☐1 苦手な子も安心してできるやさしい雰囲気がよい
- ☐2 ある程度の失敗は許される雰囲気がよい
- ☐3 失敗を指摘し合えるきびしい雰囲気がよい
- ☐4 失敗は許されないくらいきびしい雰囲気がよい

参加群も、不参加群も失敗を許容してもらえらる優しい雰囲気を求めている。不参加群にその傾向が強いといえる。参加群の4人に1人はきびしい雰囲気を求めているが、子どもが求める「きびしさ」については第3章で考察したい。

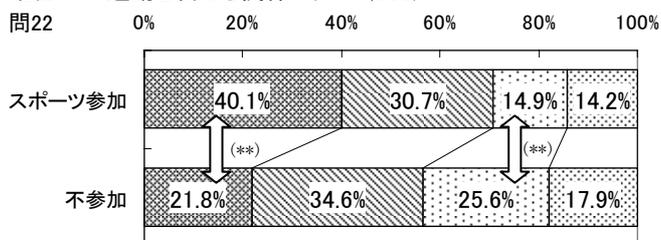
図2-13 できることとチームの勝利 (n=1,383)



- ☐1 できなかった運動ができるようになりたい
- ☐2 どちらかというできなかった運動ができるようになりたい
- ☐3 どちらかというチームが勝つことが大切だ
- ☐4 チームが勝つことのほうが大切だ

「できなかった事ができるようになること」は個人の「めあて」であり、「チームが勝つこと」はチームの「めあて」である。児童は迷った子も多いと思われる。参加群は不参加群に比べて、チームの勝利を優先する子が多いが、両群ともに「できなかった事ができるようになること」を求めている子が多いことがわかる。

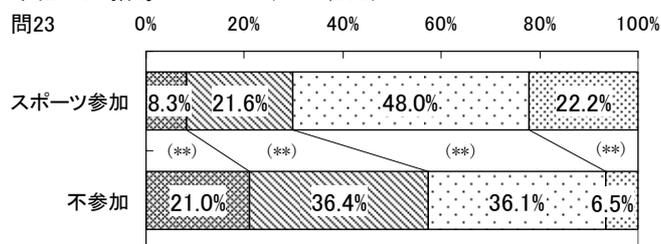
図2-14 運動と友だち関係 (n=1,383)



- ☐1 しっかり運動していく中でよい友だち関係が深まる
- ☐2 どちらかという運動していく中でよい関係ができていく
- ☐3 どちらかという友だち関係をよくしていくことで運動もできるようになる
- ☐4 友だち関係をよくしていくことでより運動も深まる

これも児童にとって選択が難しかったと思われる。どちらも大切なことなので、どちらが先というものではないかもしれない。見方を変えれば、迷うからこそ児童が現在求めている方の比率が高くなると考えられる。不参加群も半数以上が「しっかりと運動する」ことを優先している。

図2-15 指導について (n=1,383)



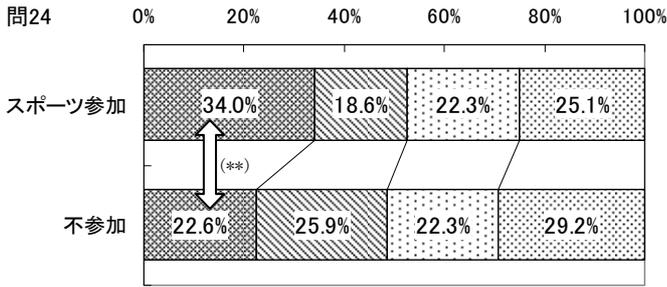
- ☐1 やさしく、ていねいに教えてほしい
- ☐2 ある程度やさしく、ていねいに教えてほしい
- ☐3 ある程度きびしくても、うまくなれる練習がよい
- ☐4 きびしくても、うまくなれる練習がよい

参加群は不参加群よりていねいな指導を求めていることがわかる。

参加群の約半数は「ある程度きびしくても、うまくなれる練習」を望んでいる。不参加群は2と3がほぼ同じ比率である。問20では両群とも「きびしい」雰囲気はあまり望んでいないが、子どもは「やさしい」「きびしい」より「できる」「わかる」を優先して考えていると思われる。

指導における「やさしい」「きびしい」については自由記述欄にも多くみられ、子どもが豊かにスポーツとかかわる指導にとって大切な要素になると思われる。第3章で考察していきたい。

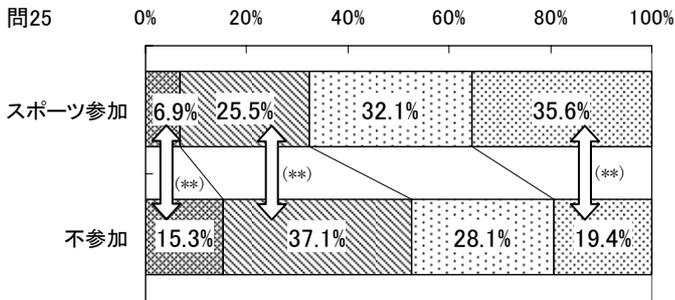
図2-16 種目の継続について (n=1,383)



- 1 ひとつの種目をずっと続けたい
- 2 できればひとつの種目を続けたい
- 3 ちがう種目もしてみたい
- 4 いろいろな種目を経験したい

参加群の児童はひとつの種目を続けたいと思っている子が34.0%いるが、両群ともに半数前後の児童は多種目を経験したいと思っていることがわかる。種目変更が可能なシステムも必要とされているのではないかな。

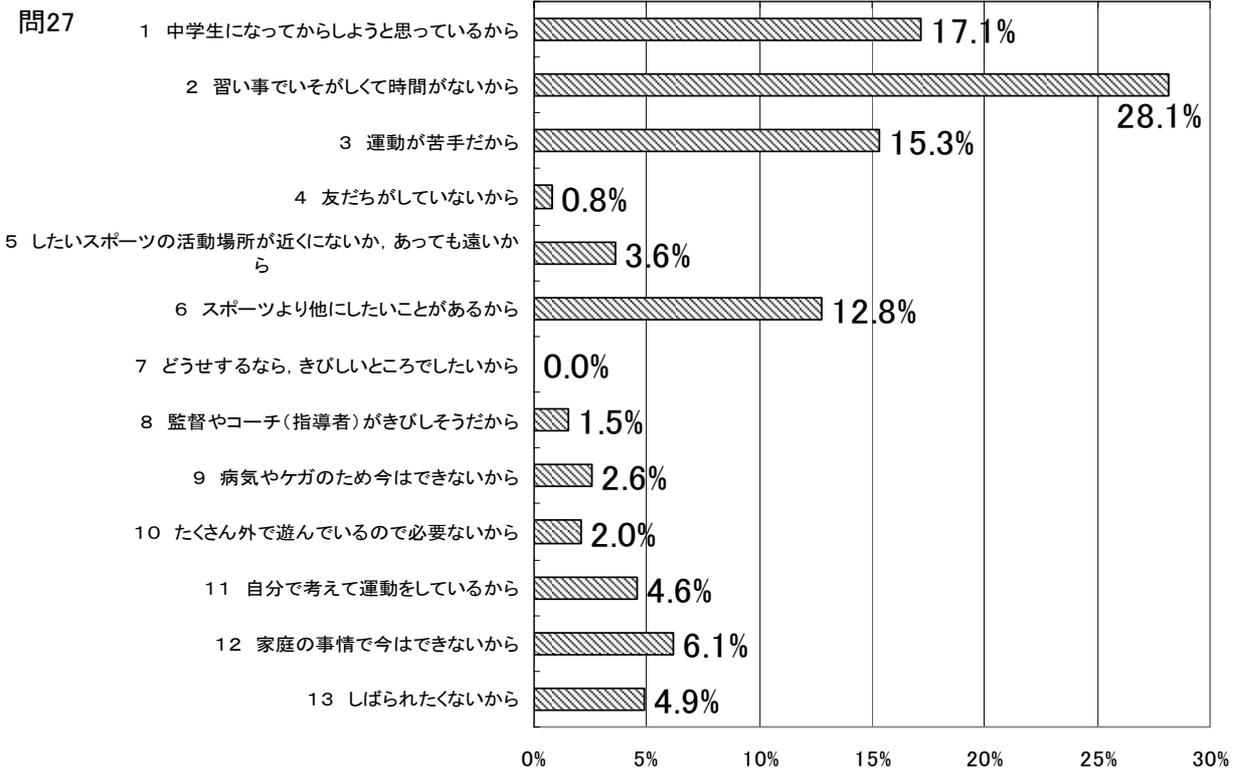
図2-17 勝負や競争について (n=1,383)



- 1 勝ち負けや競争のきびしくない運動
- 2 あまり勝ち負けにこだわらない運動
- 3 ある程度きそい合うことを楽しみたい
- 4 きそい合って楽しみたい

不参加群は参加群に比べて、勝負や競争の緩やかな活動を求めていることがわかる。

図2-18 スポーツをしていない理由 (n=389)



確かに、図2-17をみると、不参加群の1, 2の比率の合計は52.4%で、半数は、あまり勝ち負けにこだわったり、きびしく競争したりしない活動を望んでいる。しかし、3, 4の合計が47.5%で、2と答えたものが37.1%であることを考えると、不参加群も半数以上はある程度競い合うことを楽しみたいと思っていると考えてよいだろう。

参加群はより競争を楽しみたいと思っている児童が多いが、30%程の子はあまりこだわりたいと思っており、無視できない比率である。

以上のことから、運動・スポーツへの子どもの意識をまとめると次のようになる。

- 不参加群を含めて、児童の運動・スポーツをしたいという運動欲求はかなり高い。
- 不参加群に「好き」だけど「苦手」と考えている児童がかなりいる。
- 家族の好みが影響するので、地域・学校の受け皿をより充実させることが必要ではないかな。
- 「少し体を動かしたいなあ。」と思った子が参加できるような場も必要である。
- 種目の変更や、多種目の経験をしたいと思っている子が半数程度いる。
- 指導者や友だちとのかかわりの中で「できなかったことができるようになる」スポーツ活動を楽しみたい(競い合うことも含めて)と考えている児童が多い。

(3) スポーツ活動から遠ざかっている理由

子どもの体力・運動能力の低下や運動・スポーツに親しむ子とそうでない子の二極化の問題を解決していくためには、現在スポーツから遠ざかっている子をスポーツ活動に巻き込んでいくことが大切である。もちろん児童期に熱中するものとしてはスポーツばかりではなく、音楽や絵画、碁や将棋、ボランティア活動をはじめ多くの創造的な活動が考えられる。

しかし、世界的に著名な指揮者である小澤征爾氏は長野オリンピックでスキー競技の前走をするくらい日頃からスキーを楽しんできたと聞く。生涯スポーツという視点で考えたとき、健康で豊かな人生を送るために、生活の中にスポーツが根づいていることは大切なことだと考える。

では、現在スポーツ活動から遠ざかっている子どもは、どのような理由から参加していないのか。問27(図2-18)から多い理由を四つ挙げる。

- 2 習い事でいそがしくて時間がないから
- 1 中学生になってからしようと思っているから
- 3 運動が苦手だから
- 6 スポーツより他にしたいことがあるから

2については子どもの現実として、しっかりとらえなければならないが、ここでは多くふれることはしない。学校が信頼されることにより、特に塾などの習い事はある程度減るものである。家庭・地域と連携した取組を続けていくことが大切であると考えられる。

1は無理にスポーツ活動に入らなくても来年からスポーツに参加する児童である。6も今頑張っていることがあると思われる子どもである。できれば何らかの形でスポーツに関わってほしいが現状では仕方がないと思われる。

気になるのは3を選んだ15.3%の子どもである。問16(図2-10)でみたように、不参加群には運動やスポーツが「好き」だが、「苦手」だと考えている児童が約半数いる。この15.3%の子は「苦手」と思い込んでいることで気兼ね、または気後れしてスポーツから遠ざかっていると思われる。

この15.3%の子のような「苦手な子」が気兼ねなく参加できるようなスポーツ活動の場が児童の身近にあれば、1, 2, 6と答えた子どもたちも自分なりのかかわり方でスポーツ活動へ入ってこられるのではないかと考える。

子どもが遊びの中で運動を十分に経験することができなくなっている現在、そのようなスポーツ活動の場も必要とされている。

(4) スポーツ活動に参加している子ども

ここからは京都市スポーツ少年団の6年生のデータも含め、現在スポーツ活動に参加している6年生が活動中のスポーツについてどのような思いをもっているかをみていく。

ここでは、スポーツ活動に参加している子どもを、次の3群に分けて分析していく。

- ①部活動のみ参加……………部活動群
 - ②スポーツ少年団など部活動以外のスポーツ活動のみ参加……………少年団など群
 - ③部活動に参加し、なおかつ少年団を含めて複数のスポーツ活動に参加……………両方所属群
- まず、「運動への子どもの意識」の間15~25を上記の3群に分けてみたときに、特徴のある傾向が読み取れるものについて紹介する。

図2-19 運動・スポーツが得意か (n=1103)

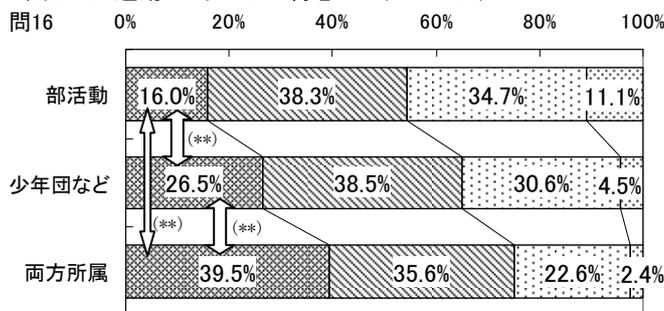


図1 そう思う □2 まあそう思う □3 あまり思わない □4 思わない

スポーツ活動に参加している児童だけをみると、その中でも特徴があることがわかる。

部活群にはスポーツがあまり得意でないと思っている子が3, 4の合計45.8%もいる。少年団など群と両方所属群には得意な子どもが多く、両方所属群は39.5%の子が「そう思う」と答えている。ただし、両方所属群にも3, 4の合計25% (4人に1人)のあまり得意ではない子が所属している。苦手意識をもった子どもが多く参加していることは、指導者として意識しておきたいことである。この子ども達がスポーツを続けていける環境を守り、充実させていくことが望まれる。

図2-20 運動する雰囲気について (n=1103)

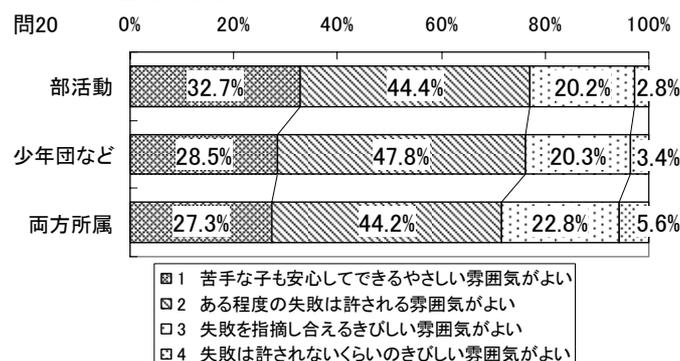


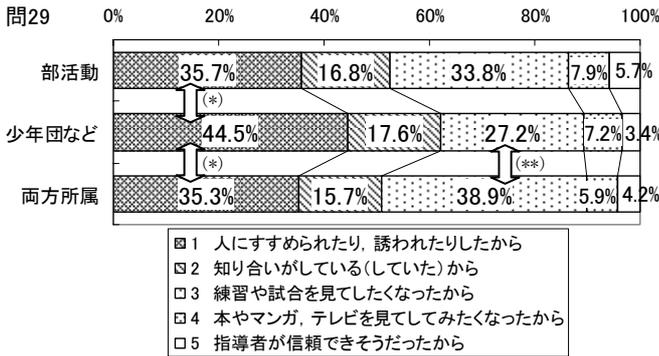
図1 苦手な子も安心してできるやさしい雰囲気がよい
 図2 ある程度の失敗は許される雰囲気がよい
 図3 失敗を指摘し合えるきびしい雰囲気がよい
 図4 失敗は許されないきびしい雰囲気がよい

この設問では、部活群と少年団など群、両方所属群の相互の関係に有意な格差はみられない。

運動が得意だと思っている子の割合は違うが、運動の雰囲気についてはほぼ同様の結果となった。得意な子どもも失敗を恐れてびくびくしながら運動するより、伸び伸びと運動したいと願っていることがわかる。

続いて、現在参加しているスポーツ活動の現状とスポーツ活動への意識をみていく。

図2-21 そのスポーツを選んだ理由 (n=1103)

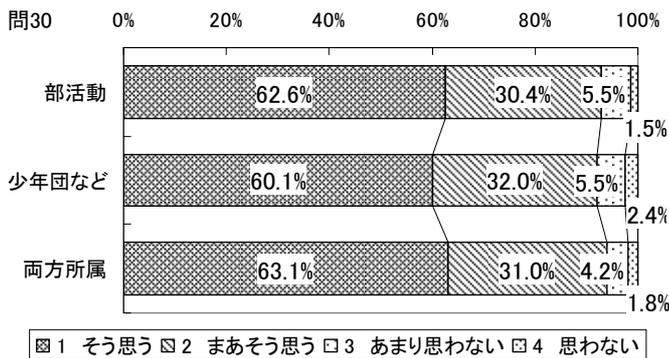


この設問から、両方参加群の子どもには部活動について中心に答えてもらった。

種目選択の二大理由は「1人にすすめられたり、さそわれたりしたから」と「3練習や試合を見てしたくなったから」である。

スポーツに参加していない子に対して、実際の活動を見ることができると多くの機会を作り、指導者や友だちが声をかけて誘うことが参加者を増やすことにつながりそうである。

図2-22 練習に行くのは楽しみか (n=1103)



部活群と少年団など群、両方所属群の相互の関係に有意な格差はみられない。比率をみても3群に違いはみられず、子どもたちはスポーツ活動の時間を、とても楽しみに待ち焦がれていることがうかがわれる。

問16(図2-10)でみたように、スポーツ参加群の37.5%の子どもは「苦手意識」をもっているが、

練習の時間を楽しみにしている子がいずれも90%を超えているのは素晴らしいことである。

では練習の現状についてはどう思っているのだろうか、4問まとめてみていくことにする。

図2-23 練習時間について (n=1103)

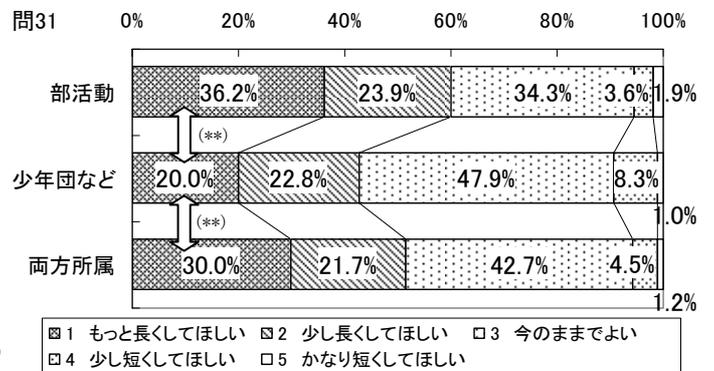


図2-24 運動量について (n=1103)

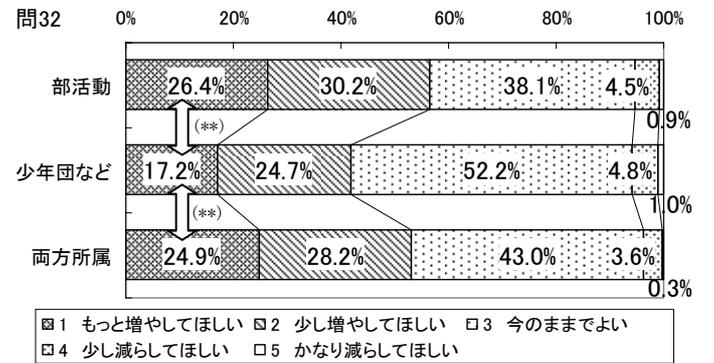


図2-25 練習内容について (n=1103)

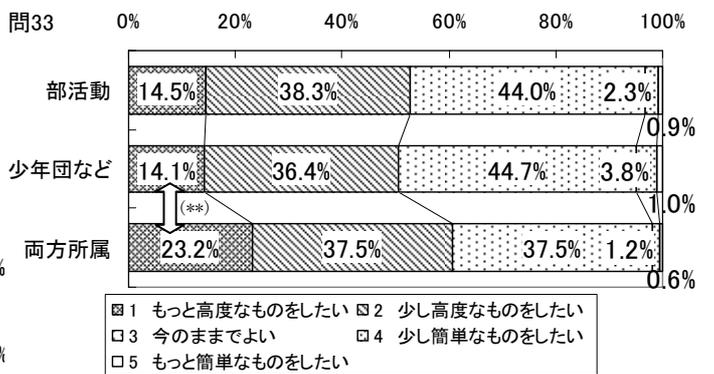
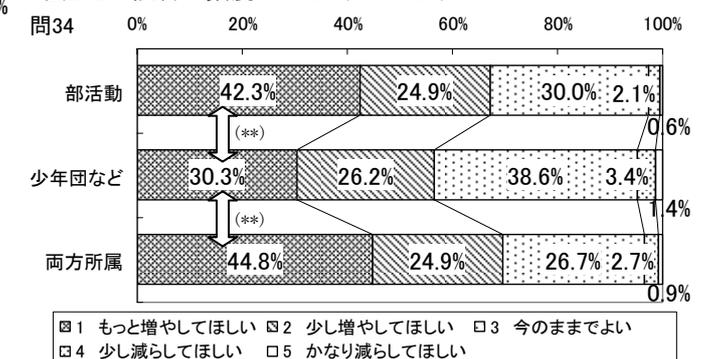


図2-26 試合の頻度について (n=1103)



現状のスポーツ活動について、少年団など群が最も満足している比率が高い。

さらに全体を通して誤解を恐れずにいえば、子どもたちは「真面目にスポーツをしたい。」と願っているのではないかと。苦手意識をもっている子が45.8%いる部活動群でも、60.1%が練習時間を増やしてほしいと考え、67.2%がもっと試合をしたいと答えている。4問を通してみても、3群ともスポーツ活動の中で、技術や戦術についてより自分を向上させたいという気持ちがでてくる。そしてなによりスポーツを、試合をたくさんしたいと考えていることがわかる。子どもたちは「競争」や「達成」の楽しみを求めていることがわかる。

図2-27 友だちはできたか (n=1103)

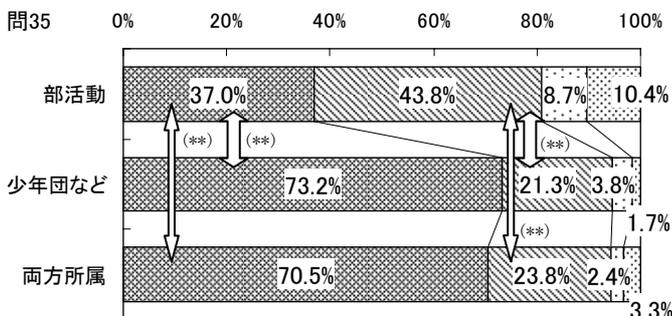


図1 たくさんいる 図2 少しいる 図3 あまりいない 図4 いない

ここから、両方所属群はスポーツ活動全体について答えている。3群ともスポーツ活動を通して友だちも増えているといえるが、部活動群と他の2群の間に有意(**)な格差がみられた。部活動は基本的に学校内の児童が集まるため、「スポーツを始める前から、みんな友だちだった」のであればよいが、「1たくさんいる」は他の2群の2分の1である。特に気になるのは「3あまりいない」「4いない」の合計が19.1%で、他の2群の3倍以上の子供が、あまり友だちができないと答えていることである。

図2-28 指導者の声かけについて (n=1103)

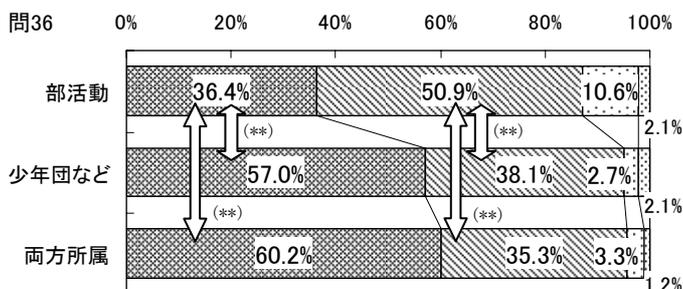


図1 よくかけてくれる 図2 ときどきかけてくれる 図3 あまりかけてくれない 図4 かけてくれない

指導者が意識していろいろな子に声をかけて

いる様子がわかる。部活群と他の2群の差が少し気になる場所である。

問37、問38、問39は家族のかかわりを訊いた設問である。スポーツ少年団などでは、保護者が指導に関わったり、保護者会の活動があったりする団体も多い。そのため部活動と他の2群の違いが出ている。

問40、問41、問42はスポーツ活動の中で子ども相互の人間関係や、人間関係への指導者のかかわりを知るための設問である。

図2-29 どの子も力いっぱい活動しているか (n=1103)

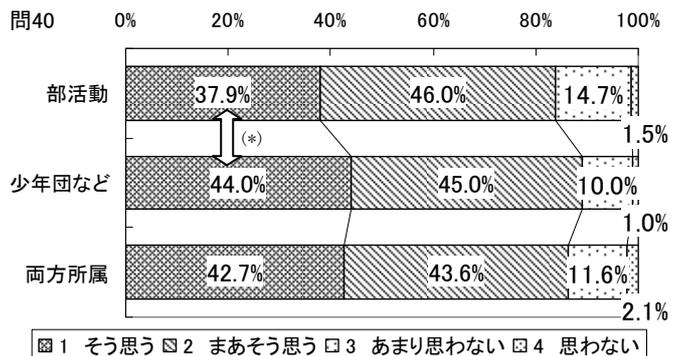


図1 そう思う 図2 まあそう思う 図3 あまり思わない 図4 思わない

図2-30 どの子も挨拶や言葉遣いに気をつけているか (n=1103)

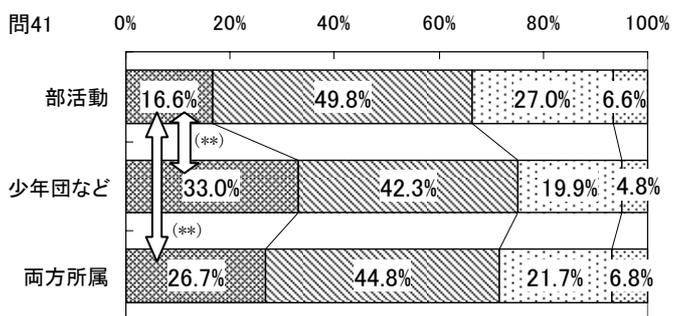


図1 そう思う 図2 まあそう思う 図3 あまり思わない 図4 思わない

図2-31 しんどいこともみんな (n=1103)

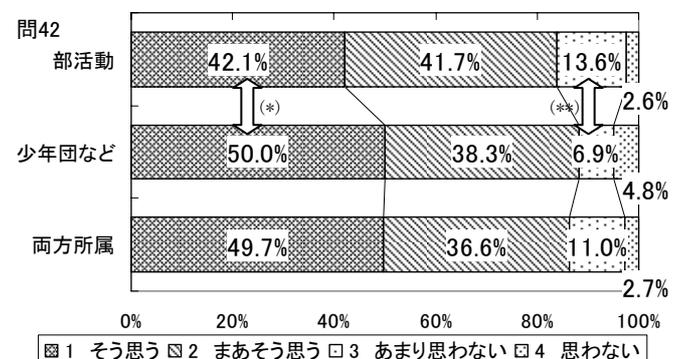


図1 そう思う 図2 まあそう思う 図3 あまり思わない 図4 思わない

80%以上の子供が「どの子も力いっぱい活動している(問40)」「しんどいこともみんなです(問42)」と感じている。

挨拶や言葉遣いについては60%以上が「どの子も気をつけている(問41)」と感じているが、他の2

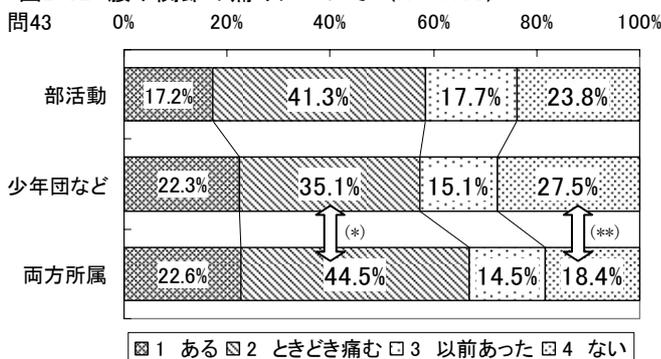
項目に比べると比率が低い。挨拶や、言葉遣いの指導が、当たり前のようにいかに難しいかを物語っている。

いずれの設問も、部活動群と他の2群に差がみられ、スポーツ少年団などの指導者が、人間関係についてより大切に指導していることがわかる。

スポーツ活動は、体力差や能力差がある中での集団活動である。子どもたち相互の人間関係が肯定的、民主的であることは、特に苦手意識をもった子どもにとって大切なことである。

次は最近話題になることが増えたスポーツ障害と翌日まで残る疲労感についての設問である。

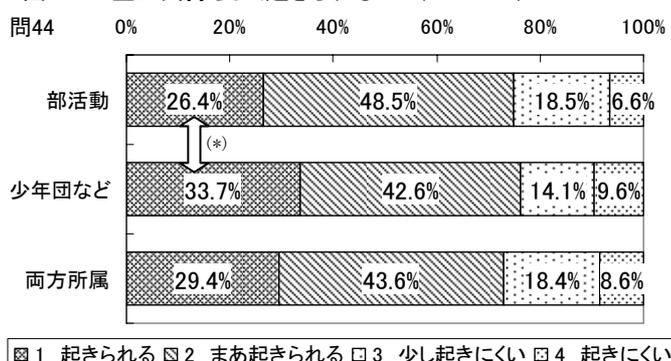
図2-32 腰や関節の痛みについて (n=1103)



子どもがスポーツ障害とスポーツ外傷や軽い筋肉痛などを区別できているかという不安があったため、設問中に部位まで入れたが多少の勘違いは入っているであろう。しかし、70%以上の子が痛みを経験している事実は重く受け止めたい。

指導者にも、子どもの体の特徴やスポーツ医学的な知識が求められるであろう。第3章では指導者の意識と比較してみたい。

図2-33 翌日気持ちよく起きられるか (n=1103)

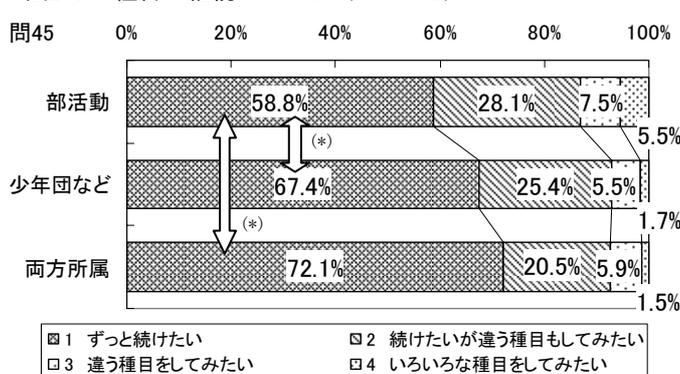


3群とも1, 2を合わせて、70%以上が「まあ気持ちよく起きられる」と答えている。

小学校現場でしばしば聞かれることに「土日にスポーツ少年団等で活動している子が、月曜日に学校で疲れた様子をみせている」というものがあるが、この回答結果からはそのことを裏付ける数値は出てこない。逆に「1起きられる」と答えた子どもは少年団など群の方が多い。児童期は体力にも大きな個人差があるので、個人差に対応した活動が求められるであろう。この設問はスポーツをしていない子との比較をするべきであった。

この回答結果からはそのことを裏付ける数値は出てこない。逆に「1起きられる」と答えた子どもは少年団など群の方が多い。児童期は体力にも大きな個人差があるので、個人差に対応した活動が求められるであろう。この設問はスポーツをしていない子との比較をするべきであった。

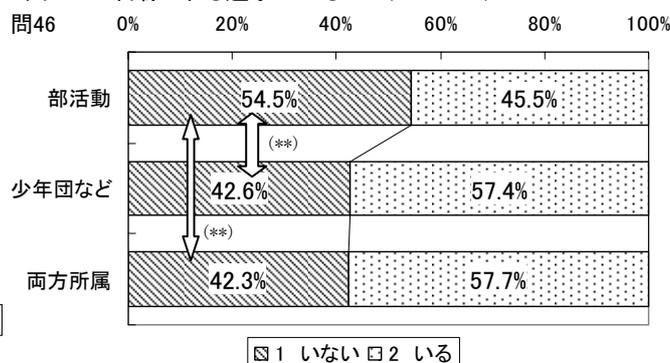
図2-34 種目の継続について (n=1103)



問24(図2-16)では、スポーツ全般への意識として同じ質問をしている。そこではスポーツ参加群の「1ずっと続けたい」の割合は34.0%であった。この間では、比率が最も低い部活群でも58.8%が1と答えており、現在しているスポーツは続けたいと考えている子が多い。

これはおそらく、活動していく中で子どもがその種目の持つ特性にふれ、その種目の「楽しさ」を体感することによって「もっとしたい」という気持ちになったからであろう。また、部活群以外の方が「今の種目を続けたい」子が多く、「いろいろな種目をしてみたい」子が少ないのは、一般的に部活以外群の方がより専門的な指導を受けていることが予想され、そのため、よりその種目の特性にふれているからではないかと考えられる。

図2-35 目標とする選手がいるか (n=1103)



部活動は加入も活動も学校で行うことが多いため、子どものスポーツへの動機付けが様々で、スポーツ選手への関心も、いろいろな段階の子が参加しているためと思われる。

以下に、2005年7月現在の6年生1,514名が目標にするスポーツ選手ベスト20を挙げておく。

1. 大友 愛 (バレーボール)
2. イチロー (野球)
3. 菅山 かおる (バレーボール)
4. 竹下 佳江 (バレーボール)
5. 高橋 みゆき (バレーボール)
6. 友だち
7. 福原 愛 (卓球)
8. 金本 知憲 (野球)
- 中村 俊輔 (サッカー)
10. 北島 康介 (水泳)
- マリア・シャラポア (テニス)
- 宝来 眞紀子 (バレーボール)
13. 監督・コーチ
14. 今岡 誠 (野球)
15. 中田 英寿 (サッカー)
- 赤星 憲広 (野球)
- 田臥 勇太 (バスケットボール)
18. 野口 みずき (陸上)
- 松井 秀喜 (野球)
20. 城島 健司 (野球)
- 大黒 将志 (サッカー)
- 高橋 由伸 (野球)
- 先輩

小学生が目標にする選手として憧れの対象となるのは、マスコミに取り上げられることの多い選手が中心になっている。ただし、友だちや監督・コーチが上位に入っているのは、スポーツでの人との出会い、かかわりが子どものスポーツ活動においても重要であることを示している。

最後に、自由記述の欄に寄せられた子どもたちの思いや意識をみていきたい。同じような内容の記述をカテゴリーに分け整理した。(表2-3)

記入していない子は現状にあまり大きな不満や不安はもっていないと考えられる。「満足している」内容の記述は20であった。「コーチは一生懸命教えてください。これからもお願いしたいと思います」「これ以上望みません。コーチも監督も仕事があるのに優しいです」というような記述が多く、そこに子どもにとってスポーツ、人とのよい出会いがあることがわかる。

自由記述欄を見渡して強く感じるのは、問31～34で述べたように、「子どもたちは“真面目にスポーツしたい”と願っている」ということである。

回答数が最も多かった「試合や練習をもっとたくさんしたい(110)」の中には、もっとスポーツを

したいという思いが溢れている。

「もっと教えてほしい(54)」「練習内容についての要望(59)」「技術的なこと(71)」の中には、参加しているスポーツの技術や戦術での上達や向上を願う記述ばかりであった。「できるようになりたい」「うまくなりたい」という子どもたちの気持ちが伝わってくる。

「練習をもっと厳しくしてほしい(49)」「指導について(75)」「友だちのこと(16)」「活動の雰囲気のこと(53)」には、スポーツに集中できる環境を整えてほしい、という願いが込められている。

「精神的なこと(65)」「体力面のこと(30)」「身体・健康のこと(56)」では、体力的についていけなかったり、行き詰っていたり、体の痛みをかかえていたりする悩みが綴られている。子ども一人一人の状態に配慮した指導が望まれる。

表2-3 自由記述の集計(6年生)

内容	回答数 (件)
試合や練習をもっとたくさんしたい	110
指導について(主に指導者との人間関係)	75
技術的なこと	71
精神的なこと	65
練習内容についての要望	59
身体・健康のこと	56
もっと教えてほしい	54
活動の雰囲気のこと	53
練習をもっと厳しくしてほしい	49
体力面のこと	30
忙しくてスポーツをする時間がない	20
活動の場のこと	18
友だちのこと	16
手軽にできる軽い運動をしたい	12
経済的な悩み	3
満足している	20
その他	8
合計	719

第2節 指導者の意識

(1) スポーツ指導への意識

今回調査を依頼した、京都市立小学校の部活動と京都市スポーツ少年団においては、指導者は自分の仕事が終わった夕方の時間や貴重な休日を割いて子どもたちのために活動している。

本研究は、このような多くの指導者の方々の願いと努力とが子どもたちに届き、子どもにとって意味ある活動が展開されることを、少しでもお手伝いさせていただければと考え、進めている。

そのために指導者の調査については、質問紙調査の対象となった子どもを、直接指導している指導者をお願いした。統計的な意味を考えると調査対象の人数は少ないので、調査結果が普遍性もつかどうかはわからないが、指導者と子どもの意識を対応させて調査・考察するためにこのような方法を用いた。

まず、対象となった指導者がスポーツやスポーツ指導にどのような前提と意識をもっているかをみていきたい。

表2-4 指導者の立場 (n=292)

立場	合計(人)
1 教職員	147
2 地域の指導者	39
3 PTAの指導者	12
4 その他	7
5 少年団の指導者	87
総計	292

回答していただいた指導者の立場の内訳である。1~4が部活動の指導者である。

表2-5 指導種目 (n=292)

種目	合計(人)	種目	合計(人)
1 バレーボール	73	8 柔道	1
2 サッカー	49	9 少林寺・空手	14
3 バスケットボール	20	10 ソフトボール	5
4 テニス	8	11 バドミントン	4
5 卓球	29	12 総合運動	4
6 陸上	33	13 多種目	6
7 野球	43	14 その他	3
総計			292

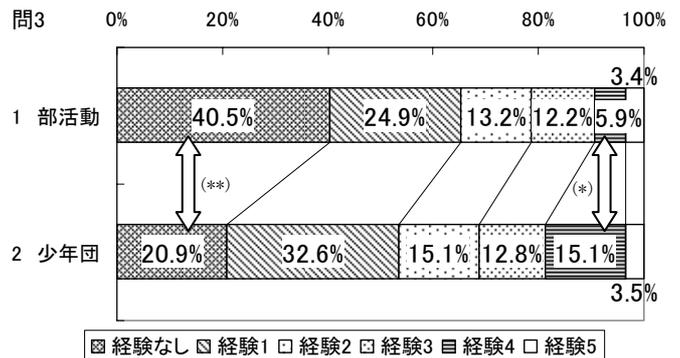
種目による偏りがあるが、バレーボールはほぼ全ての小学校にあり、少年団でも行われているため多くなる。野球は全てスポーツ少年団であった。

次に指導者の競技経験を訊いた。中学校で経験していたら「1」、中学・高校で経験は「2」、小学校・大学・社会人は「3」のように経験した期間の数を集計した。また、部活動とスポーツ少年団の違いをみるために分けてグラフ化してみた。

表2-6 指導種目の競技経験(人数) (n=292)

問3	部活動(人)	少年団(人)	合計(人)
経験なし	83	18	101
経験1	51	28	79
経験2	27	13	40
経験3	25	11	36
経験4	12	13	25
経験5	7	3	10
(空白)		1	1
総計(人)	205	87	292

図2-36 指導種目の競技経験(比率) (n=292)



部活動では、指導種目の経験がない指導者が40.5%であり、スポーツ少年団の約2倍である。スポーツ少年団では経験4の指導者が部活動の3倍近くいる。校務分掌上で担当が決まる部活動では、スポーツ少年団に比べて専門的な経験の少ない指導者が担当することが多いことがわかる。

問4は、他の種目の競技経験を、問5は、現在の自分のスポーツ活動を訊いた設問である。2問とも、有意差検定でも有意な格差はみられない。

「指導する種目」に限定しなければ、部活動とスポーツ少年団の指導者の競技経験も、現在スポーツをしている割合も違いはないと思われる。

表2-7 スポーツの楽しさ(複数回答) ()内は少年団指導者

内容	回答数[件]
チームワーク、人間関係	111(39)
汗をかくこと、体を動かすこと	95(21)
達成感	46(18)
ストレス解消	34(9)
体力・技術の向上	28(6)
競争を楽しむ	14(3)
健康維持	16(8)
生きがい	12(2)
勝つことの喜び	9(3)
目標に挑戦	8(1)
見る楽しみ	3
その他	1
合計	377(110)

問6は、自分にとっての“スポーツの楽しさ”を記述していただいた設問である。

支持の多かったカテゴリについて見てみる。

<チームワーク，人間関係>

スポーツを通して様々な人とかかわり，多くの友人を作ることに“楽しさ”や自分にとっての“意味”を感じている方が多いということであろう。

<汗をかくこと，体を動かすこと>

記述の中でよく出てきたのが“爽快感”であった。仕事や家庭生活の気分転換的な内容が多かった。これは「ストレス解消」と答えていただいた方の思いに近いものだと思われ、「ストレス解消」を含めると最も多くの指導者が支持している。

<達成感>

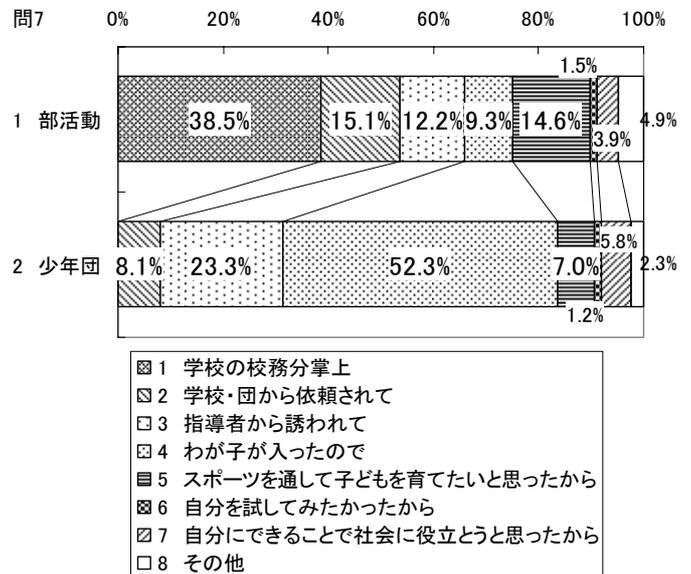
「チームワーク，人間関係」のカテゴリにカウントしたが“仲間と同じ目標に向かって努力し，目標を達成する楽しさ”と回答した方が多く，実際には46名より多くの方が「達成感」を“スポーツの楽しさ”と捉えていると考えられる。

“スポーツの楽しさ”には、「体力・技術の向上」や「健康維持」といった，身体や身体能力的側面の“楽しさ”と「チームワーク，人間関係」や「達成感」といった心理的側面の“楽しさ”の両面がある。

「汗をかくこと，体を動かすこと」については，“爽快感”や“ストレス解消”に代表されるように，心理的側面の“楽しさ”といえ，指導者が感

じる“スポーツの楽しさ”の上位3つのカテゴリはいずれも，運動・スポーツの心理的側面の“楽しさ”であるといえる。

図2-37 指導するようになったきっかけ (n=292)

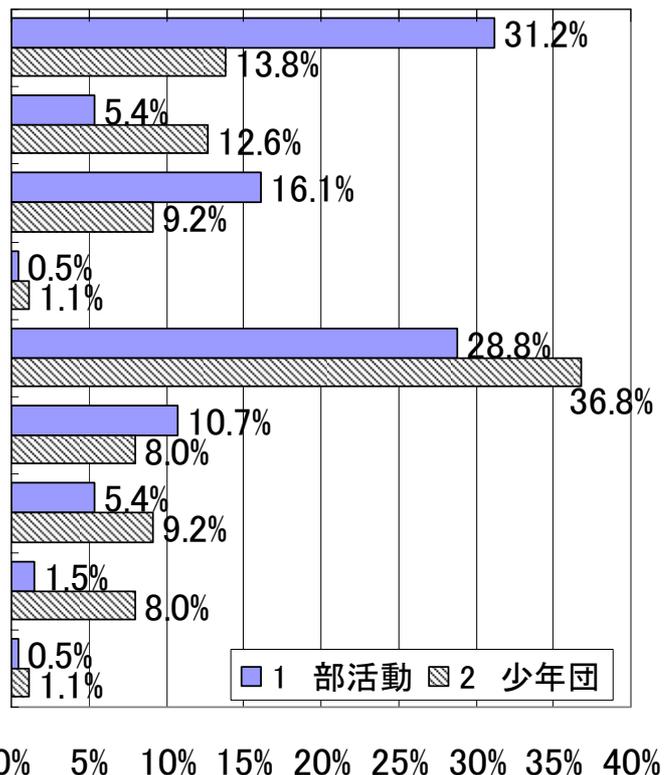


部活動では「学校の校務分掌上」担当しているという回答が38.5%で最も多く，少年団では「わが子が入ったので」が50.6%で最も多い。これはそれぞれの団体の成り立ちを考えれば，もっともなことであるが，そのことが指導の内容に影響していることはあるはずである。

問8では，スポーツを通して子どもたちに伝えたいことを，強く思う順に三つ回答してもらった。

図2-38 スポーツを通して最も伝えたいこと (n=292)

- 1 できなかったことができるようになったり，記録が伸びたりする楽しさ
- 2 努力して勝つことのうれしさ
- 3 運動して汗をかく楽しさ
- 4 体力や体格を向上させることの大切さ
- 5 一生懸命取り組むことの大切さ
- 6 友だちと仲良く運動する楽しさ
- 7 友だちや仲間の大切さ
- 8 マナーやエチケットの大切さ
- 9 支えてもらっている人々への感謝の気持ち



問8-①

指導者が、子どもたちに何を伝えようとしているかは、その団体のスポーツ指導の方向性となり、子どものスポーツ経験の内容を左右する。

ここでは「スポーツを通して最も伝えたいこと」に絞り、全体に対する割合をみていく。(図2-38)

有意水準1%の有意差(**)がみられた選択肢は次の2項目である。

「1できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりする楽しさ」

「8マナーやエチケットの大切さ」

有意水準5%の有意差(*)が見られた選択肢は次の2項目である。

「2努力して勝つことの嬉しさ」

「7友だちや仲間の大切さ」

指導者全体が伝えようと考えていることは

「5一生懸命取り組むことの大切さ」である。

部活動の指導者では、「1できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりする楽しさ」が31.2%、「5一生懸命取り組むことの大切さ」が28.8%で、この二つを選んだ指導者が多い。

スポーツ少年団の指導者では、「5一生懸命取り組むことの大切さ」が最も多く35.6%である。

部活動群と少年団群に明らかな違いがみられる。これについては第3章で触れていきたい。

表2-8 指導する中での喜び ()内は少年団指導者

内容	回答数[件]
子どもの成長	168(61)
子どもが楽しんでいる様子	45(5)
子どもの一生懸命さ	42(8)
人とのかかわり	33(6)
スポーツを好きになる	6(1)
礼儀やマナー	6(4)
その他	5(3)
合計	305(88)

記述による設問であるので、カテゴリーごとに分けて集計した。回答数は全体の件数で、()内はその内のスポーツ少年団の指導者の数である。最も多いものが「子どもの成長」で、168の回答が得られた。続いて「子どもが楽しんでいる様子」「子どもの一生懸命さ」「人とのかかわり」と続く。

ただし、「子どもが楽しんでいる様子」の45以外は、ある意味「子どもの成長」に含まれるものであり、その場合は「楽しむ」45、「成長」255となる。

“子どもの成長”255の回答を、スポーツ面の成長、人間としての成長、両面の成長の三つに分けたものが表2-9である。

表2-9 子どもの成長の内容

	スポーツ	人間	両面	合計
部活動	58(32.9)	92(52.3)	26(14.8)	176(100)
少年団	31(39.2)	39(49.4)	9(11.4)	79(100)
合計	89	131	35	255

()内は行の合計に対する比率(百分率)

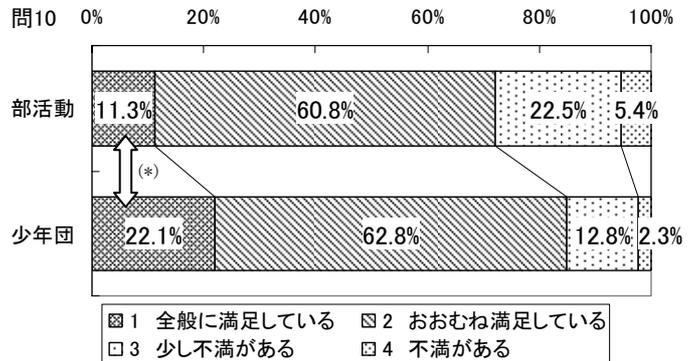
指導者は部活動、スポーツ少年団ともに、「スポーツ面の成長」と「人間としての成長」の両面を“子どもの成長”にとらえて“喜び”と感じているが、両者とも、子どもの心理的側面の育ちにより大きな“喜び”を感じていることがわかる。

これは、「スポーツを通じた子どもの健全育成」という、児童期のスポーツ活動の教育的な一面を示しているといえる。

(2) 現在の活動への意識

指導者が現在の活動について、どのように感じ、どのような課題をもっているかをみていく。

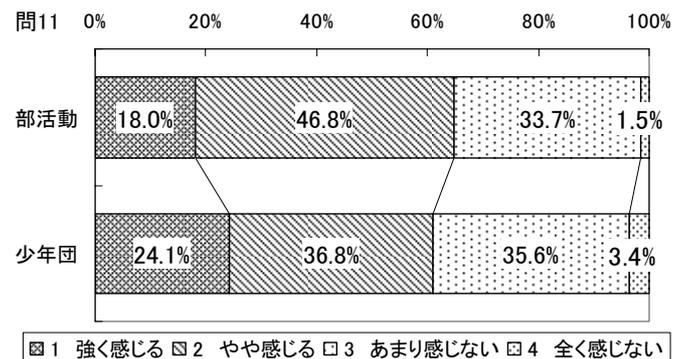
図2-39 活動への満足度 (n=292)



部活動の指導者の72.1%、スポーツ少年団の指導者の84.9%が現状の活動にほぼ満足している。「全般に満足している」は少年団22.1%、部活動11.3%で少年団は部活動のほぼ2倍である。

スポーツ少年団の指導者の方が現状への満足度が高い傾向がある。

図2-40 体力低下の認識 (n=292)



有意差検定では有意な格差はみられない。部活動、少年団とも指導者の60%強が子どもの体力低下を実感している。課外スポーツに参加していない6年生全体の様子を聞けば、より低下を感じる比率が高くなると思われる。

表2-10 低下したと感じる体力要素 ()内は少年団指導者

内容	回答数[件]
持久力	81(21)
気力	32(6)
全体的に	30(12)
筋力	30(8)
調整力	27(10)
瞬発力	24(6)
柔軟性	13(4)
走力	10(4)
その他	15(8)
合計	262(79)

問11で3, 4と回答した指導者対象である。

最も多かったのが「持久力」である。また、「全体的に」と「持久力」と回答した中に、精神的な持久力や気力にかかわる記述が多く見られ、「気力」と回答した指導者の数と合わせると、指導者が低下していると感じている内容が「体力」だけではなく、「心の持久力」と深い関連性をもつことがわかる。

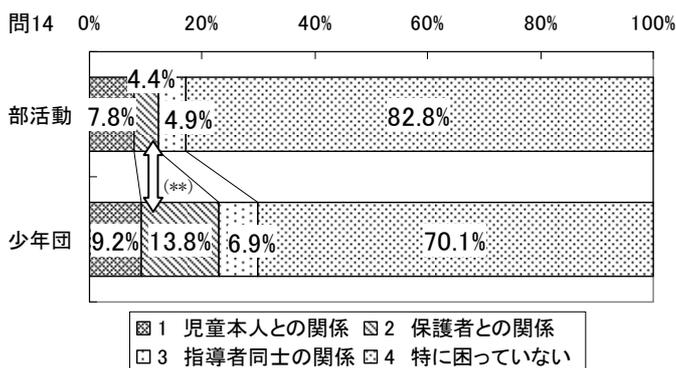
表2-11 体力低下への取組 ()内は少年団指導者

内容	回答数[件]
ランニング	19(10)
補強運動	14(7)
ストレッチ	12(6)
遊びの要素を取り入れる	10(5)
動き作り	8(3)
精神的なサポート	8(1)
基礎の反復	7(3)
他の種目	4(1)
その他	19(11)
合計	101(47)

問⑫で体力低下を感じている指導者の中でも、無回答や特にしていないという回答も多く、回答内容も分かれている。

現状では特別な取組をするというよりも、現場の指導者がそれぞれ創意工夫しながら、手探りで取組を進めていることがわかる。

図2-41 人間関係について (n=292)



部活動で82.8%、スポーツ少年団で70.1%の指導者が「人間関係では困っていない」と回答している。スポーツ少年団では、部活動に比べて保護者との関係が難しいと感じている指導者が3倍以上おり、有意(**)な格差がみられた。

これは、スポーツ少年団では保護者自身が指導に当たる場合も多く、保護者会が組織されて場合も多いために、保護者の関心が高いことの裏返しでもある。

指導者、保護者、子どもがクラブ運営に関わって情報交換し、協力体制を作ることが求められる。

問15(図2-42)から問18(図2-45)までを通して、部活動とスポーツ少年団の指導者のスポーツ活動の現状への意識をみていく。

図2-42 1日の練習時間について (n=292)

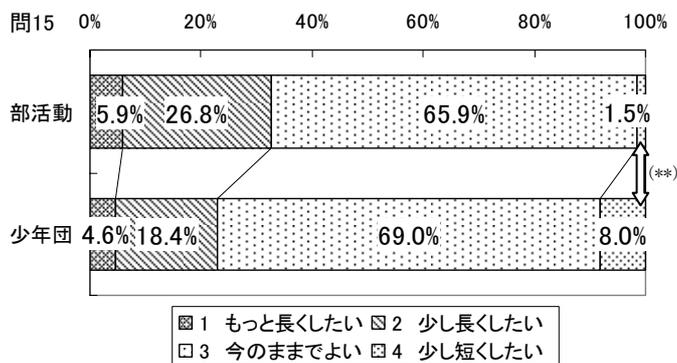


図2-43 1日の運動量について (n=292)

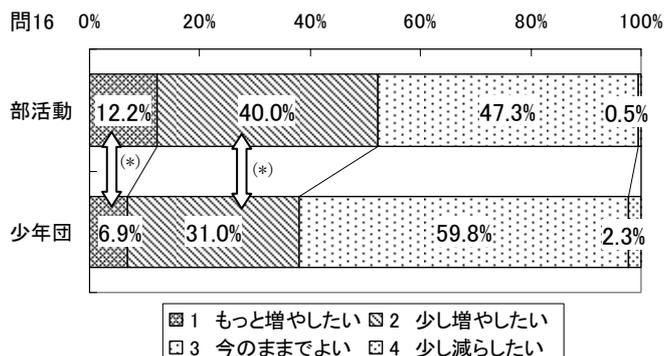


図2-44 練習内容について (n=292)

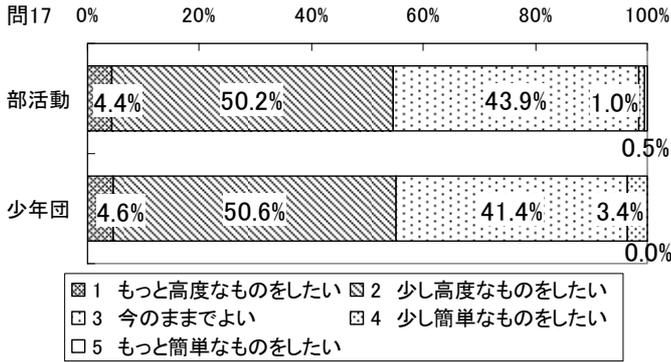
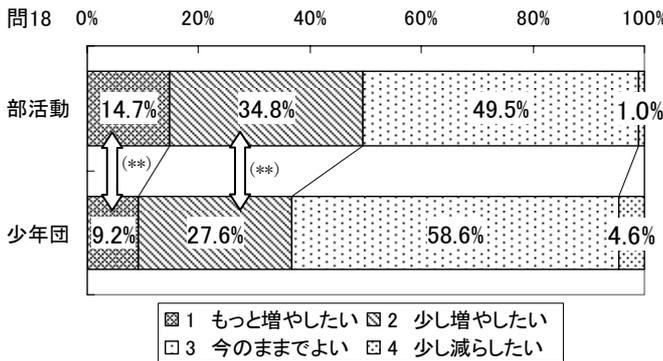


図2-45 試合の回数について (n=292)



練習時間については部活動で65.9%、少年団で69.0%の指導者が「今のままでよい」と答えている。スポーツ少年団では8%が「少し短くしたい」と考えていることがわかる。

練習内容については、部活動も少年団も40%強が今のままでよいと回答し、50%強が少し高度な練習をしたいと考えている。部活動とスポーツ少年団の指導者の意識に違いはない。

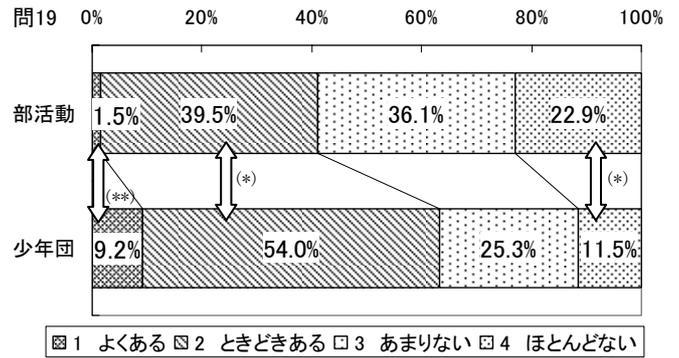
試合の回数・頻度については、少年団の指導者の58.6%が「今のままでよい」と回答し、部活動の指導者は1, 2合わせて49.5%が「練習試合や試合を増やしたい」と答えている。

問15から問18までを通してみると、指導者は練習時間よりも活動内容を効率的にして、子どもに力をつけたり、運動量を増やしたりしようと模索していることがうかがえる。

さらに、部活動とスポーツ少年団の指導者のスポーツ活動の現状への意識を比べると、部活動の指導者の方が現状より活発に活動させたいと考えている傾向があると考えられる。

次に、人間関係についてみていく。問14で指導者との直接の関係はみたので、ここでは子ども相互の関係(問19) 保護者への働きかけと保護者の関心度(問20, 21) や、子ども相互の関係への間接的な指導者の働きかけ(問22, 23, 24) をみていくことにする。

図2-46 子ども同士のトラブル (n=292)

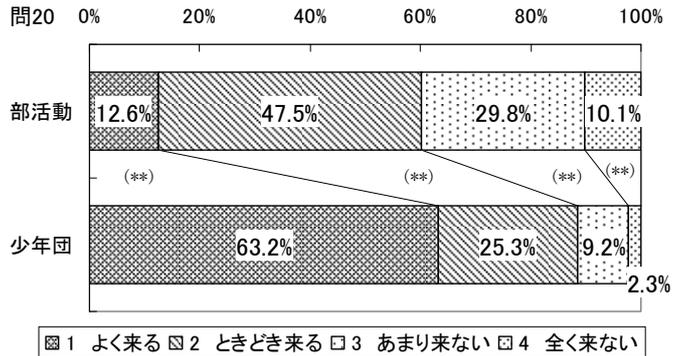


「よくある」と「ときどきある」を合計すると部活動では41.0%、少年団では63.2%の指導者が子どものトラブルがあると答えている。

部活動は学校単位の場合が多いため、ある程度子ども相互の人間関係ができていることとも関係しているかもしれない。

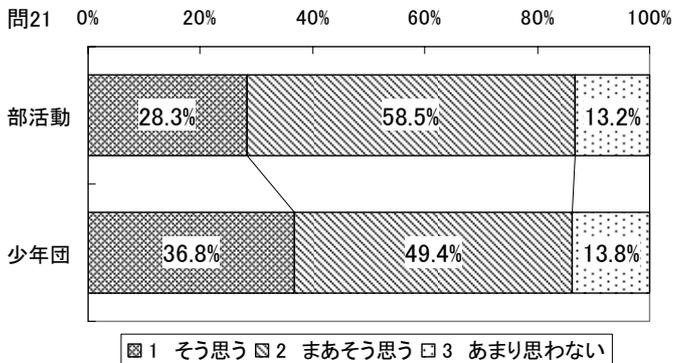
ただし、子ども相互の力関係が固定している場合も見かけのトラブルはなくなるので、指導者の見目が大切になる。

図2-47 保護者は見に来るか (n=292)



少年団では、練習も保護者が見に来ることが多く、部活動では試合のとき見に来る保護者が多いと思われる。

図2-48 活動への保護者の理解は得られているか (n=292)



どの選択肢も、有意な格差はみられない。部活動も少年団も1, 2合わせて86%の指導者が保護者の理解は得られていると考えている。

図2-49 どの子どもがいっぱい活動しているか (n=292)

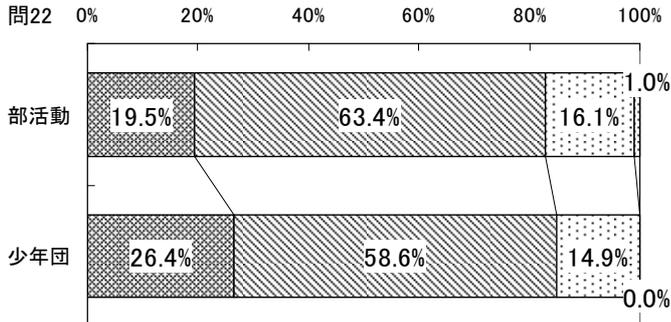


図1 そう思う 図2 まあそう思う 図3 あまり思わない 図4 思わない

1, 2合わせて部活動は82%, 少年団は85.0%の指導者が「どの子どもがいっぱい活動している」と回答している。

図2-50 どの子どもあいさつや言葉遣いに気をつけているか (n=292)

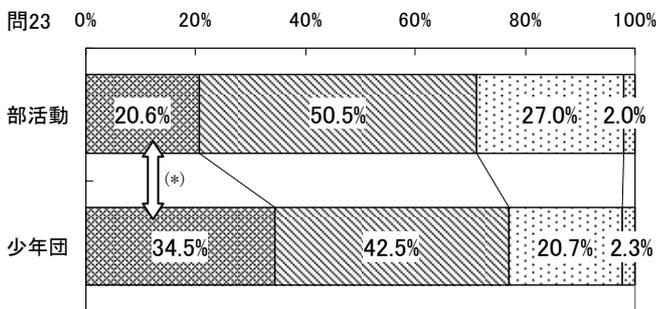


図1 そう思う 図2 まあそう思う 図3 あまり思わない 図4 思わない

「そう思う」と「まあそう思う」を合計すると部活動では71.1%, 少年団では77.0%の指導者が、どの子ども挨拶や言葉遣いに気をつけていると回答している。

図2-51 しんどいこともみんなでしているか (n=292)

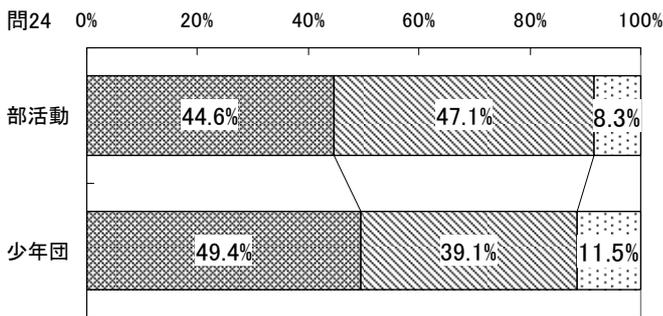


図1 そう思う 図2 まあそう思う 図3 あまり思わない

どの選択肢も、有意な格差はみられない。1と2を合計すると、部活動では91.7%, 少年団では88.5%の指導者が、準備や片付け、しんどいこともみんなでしていると回答している。

問23の“挨拶や言葉遣い”での部活動と少年団の指導者の意識の差は、「スポーツを通して子どもに伝えたいこと」での「7友だちや仲間の大切さ」や「8マナーやエチケットの大切さ」への意識の違

いが出ているものと考えられる。

児童期のスポーツ活動においては、特に問22～問24の「どの子ども」「みんなで」というところにこだわる指導をするべきであると考えられる。

図2-52 スポーツ障害について (n=292)

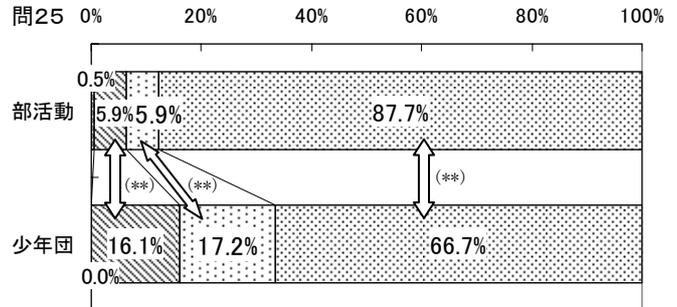


図1 かなりいる 図2 少しいる 図3 以前いたが現在はいない 図4 いない

「少しいる」部活動5.9%, 少年団16.1%。「以前いたが現在はいない」部活動5.9%, 少年団17.2%である。少年団にスポーツ障害もその経験者も多いと感じている指導者が多い。

ただし、問22～問25には指導者自身の考え方や、子どもをみる観察力もかかわってくる。問25については、指導者がどれくらいスポーツ障害について理解しているかが未知数である。スポーツ障害とスポーツ外傷の違いはかなり広まっていると考えられるが、いわゆる“成長痛”の問題なども含めて、指導者にとっては、スポーツ障害についての研修は欠かせないものであろう。

図2-53 子どもは満足していると思うか (n=292)

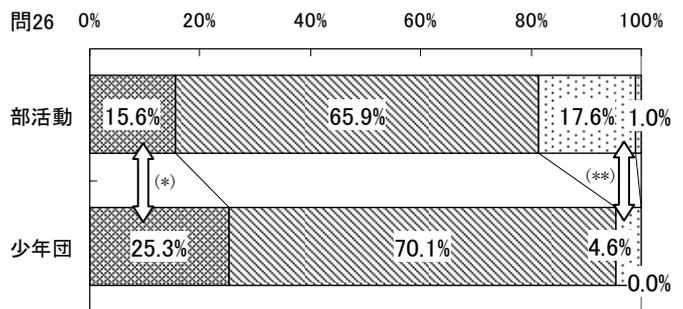


図1 そう思う 図2 まあそう思う 図3 あまり思わない 図4 思わない

「そう思う」と「まあそう思う」を合計すると、部活動では81.5%, 少年団では95.4%の指導者が、子どもは満足していると考えている。

この結果は、本章第1節でみてきた、子どもが「今の種目を続けていきたいと考えている割合」や本項の問10でみてきた、指導者の「今の活動への満足度」の結果とも合うもので、現状のスポーツ活動への子どもの意識と、指導者の意識はおおよそ一致しているといえるだろう。

問27は指導者として知りたい情報を問う設問である。(図2-54)

指導者にとっては、「子ども向けの指導法」のニーズが大きいことがわかる。

問3でみたように部活動では40%以上の指導者が担当している種目の経験がないので、これは当然であるといえる。

また、競技経験の豊富な指導者にあっても小学生の発達段階に合った指導法は未知の領域であり、「子ども向けの指導法」を求めるのは、向上心のある、良心的な指導者であるといえるだろう。

部活動とスポーツ少年団の指導者を比べて、有意(*)な格差がみられた選択肢は、「9保護者へのかかわり方」である。これは本項の問14でみてきた「人間関係で困ること」の結果と一致する。

最後に、自由記述の「指導上の悩みや感じていること」をカテゴリーごとに集計した。(表2-12)全文を読むと、記入していただいた指導者の方々の指導にかける思いと悩みが溢れている。

部活動の指導者の特徴的な悩みは以下のふたつである。

- ①種目の専門的な経験・知識がないことで子どもたちの思いにこたえてあげられないもどかしさ。
- ②校務の忙しさから、指導に十分な時間がとれないことと学校の仕事とのバランスの難しさ。

少年団指導者の特徴的な悩みは以下の三つである。

- ③仕事や家庭生活との両立が難しい。
- ④指導者・練習時間・練習場所の不足。
- ⑤指導者間の連携の難しさ

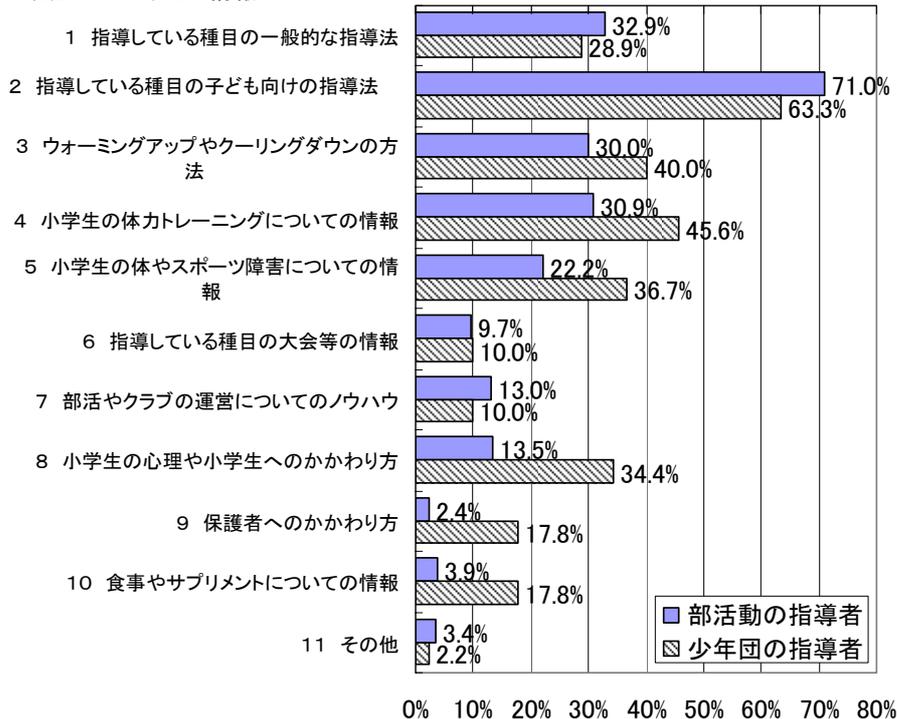
連携の難しさということでは、スポーツ少年団の指導者同士の連携以外に、学校との連携の必要性和難しさを感じている少年団の指導者がいる。

問23(図2-50)では表面化しなかったが、自由記述のカテゴリーでの、最も大きな悩みと迷いは

- ⑥言葉遣いや挨拶の大切さと指導の難しさを含む、子どもへのかかわり方であった。

スポーツ少年団の指導者にこの記述が多かったのは、子どもが学校では見せない生の姿を見せるためと、問8(図2-38)でみたように少年団の指導

図2-54 知りたい情報



者に「マナーやエチケットの大切さ」や「友だちや仲間の大切さ」の意識が高いためではないかと思われる。この部分については第3章で考察する。

全体を通して、それぞれの指導者が自分の仕事や家庭を抱え、困難な状況の中で、地域・学校の子どものためにより良いスポーツ活動を求めている様子が伝わってくる。

表2-12 悩みや感じていること ()内は少年団指導者

内容	回答数[件]
マナーや躰, 子どもについて	25(17)
指導について	24(6)
指導の専門性	24(4)
指導の時間	23(5)
指導者・場所の不足	16(7)
子どもの不足	4(1)
試合について	3(1)
楽しく活動	2
用具の不足	1
合計	122(41)

第3章 子どもの豊かなスポーツ活動を支えるために

(「スポーツを大切に思う子ども」を目指して)

第1節 スポーツの「楽しさ」と「きびしさ」

(1) 楽しさの多様性

私たちはなぜスポーツをするのか。本来スポーツとは何なのか。ここで論じることにはできないが、竹之下休蔵は「スポーツは、本来プレイの領域に属する。(中略)プレイの本質とは何か、人々をプレイに誘いこみ、夢中にさせるものは何か、ということが問題になるわけであるが、それはプレイのもつ楽しさ (fun) である」(33) と述べている。つまり、私たちは“楽しさ”を求めてスポーツをしているわけである。

竹之下休蔵は同時に「しかし、この楽しさは努力や苦しみの過程を経た後の楽しさであるから、スポーツの楽しさは努力や苦しさと対立するものではなく、それらを含んだものとして考えるべきである。

現代のスポーツはプレイとしてのスポーツだけではない。教育としてのスポーツもあれば労働(職業)としてのスポーツもあり、多くの人々が健康・体力の保持・増進を兼ねて行っている」(34)とも述べている。

スポーツの志向や楽しさの多様性について述べているのだが、ここで、子どもが感じている“楽しさ”と指導者が現在感じている“楽しさ”を比較してみたい。

前章第2節でみたように(表2-7)、指導者が社会人としてスポーツとかかわる中で現在感じている“スポーツの楽しさ”は、

- 「チームワーク・人間関係(人とのかかわり)」
- 「汗をかくこと、体を動かすこと(爽快感)」
- 「達成感」

の三つのカテゴリーのものが多かった。「爽快感」の中には「ストレス解消」と書かれた方も多く、スポーツで日常生活の気分転換を図っていることがわかる。

つまり、指導者はプレイとしての“スポーツの楽しさ”だけでなく、心身の健康やコミュニケーションのためにスポーツをしていることになる。

児童の調査は、その他を含めて13の選択肢から選ぶ形でを行った。その中で「1できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりしたとき」を一番目にした子どもが圧倒的に多い。

一番目の“楽しさ”に3点、2番目に2点、3番目に1点として選択肢ごとに集計したものが図3-1である。ポイントの高い順に挙げると、

- 「1できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりしたとき」、
- 「3試合に勝ったとき」、
- 「2練習してきたことが試合でできたとき」

図3-1 子どもが感じるスポーツの楽しさ



となり、子どもはプレイとしての“スポーツの楽しさ”である「達成」や「競争」に楽しさを見出していることがわかる。これは、前章第1節で「子どもたちは“真面目にスポーツしたい”と願っている」とみてきたこととも一致する。続いて、

- 「7友だちと仲良く運動したとき」
- 「6全力で一生懸命運動しているとき」
- 「8監督やコーチにほめられたとき」

となり、大人同様にコミュニケーション（人のかかわり）にかかわる内容がでてくる。しかし、「4運動して汗をかいたとき」は少なく、子どもは気分転換やリフレッシュにスポーツをするのではなく指導者の結果と違いがみられる。スポーツに参加していない子どもについても、選択肢7以外格差がなかった。

子どもが願う「達成」や「競争」の“楽しさ”については異論ないであろう。子どもがさらにこれらの楽しさを味わえる活動の工夫が望まれる。

指導者としては、子どものスポーツへの志向が大人とは違うことと、個人差があることを認識しつつ、スポーツ活動に参加する全ての子どもに“スポーツの楽しさ”を伝えていきたいものである。

では、指導者は多様な“スポーツの楽しさ”を子どもたちに伝えるために、どのような配慮をした活動をすればよいのだろう。

それと共に、子どものスポーツ活動では、教育としてのスポーツの視点も忘れてはいけないと思われる。「スポーツを通した子どもの健全育成」の視点である。

(2) 部活動と少年団の指導者の意識の違い

前章第2節では、実際に指導者がスポーツを通して何を子どもたちに伝えようとしているかについてみてきた。

指導者全体が強く意識していること

「一生懸命取り組むことの大切さ」

これは、指導者が現在感じているスポーツの楽しさとは少し違い、多分に教育的なスポーツの視点といえる。指導者が「スポーツを通した子どもの健全育成」を願って活動していることがよくわかる結果である。

しかし、部活動と少年団の指導者に分けてみると違いがみられる。

部活動では以下の二項目がほぼ同じ程度の強さで支持されている。

「一生懸命取り組むことの大切さ」

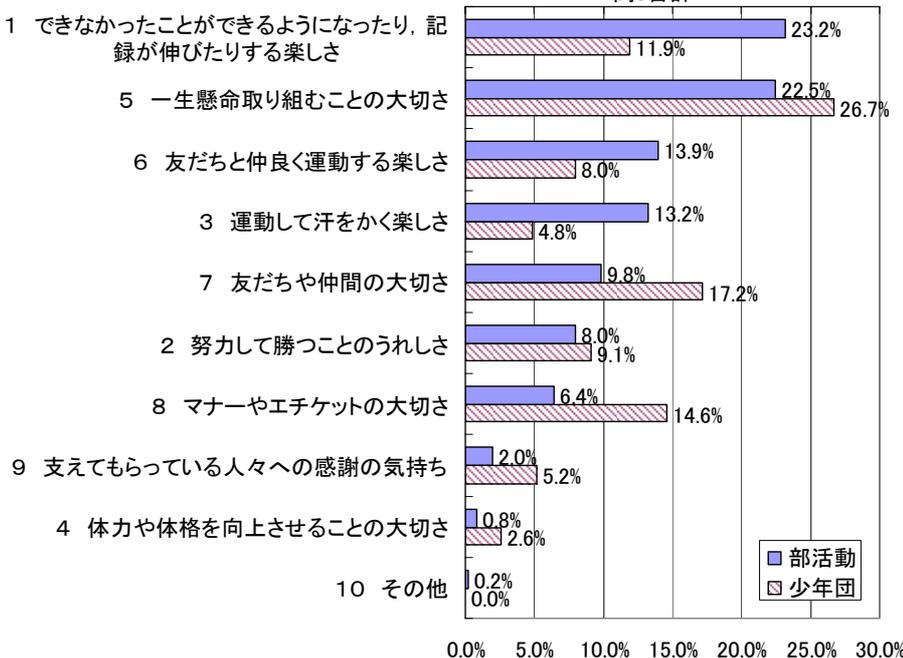
「できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりする楽しさ」

スポーツ少年団では次の項目が圧倒的に強く支持されていた。

「一生懸命取り組むことの大切さ」

これは、日本スポーツ少年団の考え方の基本に「スポーツ少年団は、スポーツを通した青少年の教育の場である」(35)ということがあるためと思われる。他に見られた部活動と少年団の指導者の意識の違いも、このことが多く関わっているように思える。違いがわかりやすいように、部活動の指導者の伝えたいことを降順に並べて少年団の指導者のものをあわせてみた。(図3-2)

図3-2 スポーツを通して伝えたいこと



ここでも“楽しさ”の集計と同じように、一番目に“伝えたいこと”に3点、2番目に2点、3番目に1点として選択肢ごとに集計した。

前章第2節の最も「伝えたいこと」で部活動指導者と少年団指導者に有意な格差のみられた選択肢は、次の4つであった。

「1できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりする楽しさ」

「2努力して勝つことのうれしさ」

「7友だちや仲間の大切さ」

「8マナーやエチケットの大切さ」

三番目までを考慮すると、

「2努力して勝つことのうれしさ」の格差はなくなり、2と3が入れ替わり、1、「3運動して汗をかく楽しさ」、7、8に有意(*)な差がみられた。(図3-2)

部活動の指導者は、子どもが“スポーツの楽しさ”で最も多く選んだ選択肢「1できなかつたことができるように…」の内容を最も伝えたいと考えている。しかし、「3運動して汗をかく楽しさ」は大人が感じる「爽快感」「リフレッシュ」「ストレス解消」につながる“スポーツの楽しさ”であり、子どもの思いにはほとんどないものである。

少年団の指導者が高い支持を示した「7友だちや仲間の大切さ」「8マナーやエチケットの大切さ」は、「スポーツを通した子どもの健全育成」の立場から理解できるものである。

また、それぞれの指導者が選択した選択肢を比率の高い順に並べてみると面白いことがわかる。

○部活動指導者が高い支持をしたもの

「1できなかつたことができるようになったり、記録が伸びたりする楽しさ」

「5一生懸命取り組むことの大切さ」

「6友だちと仲良く運動する楽しさ」

「3運動して汗をかく楽しさ」

○少年団の指導者が高い支持をしたもの

「5一生懸命取り組むことの大切さ」

「7友だちや仲間の大大切さ」

「8マナーやエチケットの大切さ」

「1できなかつたことができるようになったり、記録が伸びたりする楽しさ」

部活動では、スポーツを通して「**楽しさ**」を伝えようとし、少年団では、スポーツを通して「**大切さ**」を伝えようとしていることがわかる。

部活動の指導者は「プレイとしてのスポーツ」、少年団の指導者は「教育としてのスポーツ」の部分を強く意識しているともいえる。どちらも児童期のスポーツ活動においては大切な要素であると考えられる。ただし、伝えようと考えていることが子どもに上手く伝えられているかどうか問題となってくる。

前章第1節でみたように、部活動のみで活動している子どもと、複数の団体で活動している子では、少年団や他のスポーツ団体でも活動している子の方が、現状のスポーツ活動に満足している比率が高い傾向があった(問30～問45)。

部活動のみに参加している子どもの方が、スポーツや運動に苦手意識をもった子どもが多いにもかかわらず(問16)、「もっと運動・スポーツをしたい」と思っているわけである。

これは、前章第2節でみたように部活動の指導者には「専門性をもった指導者」が少なく(問3, 問27)、「校務の忙しさ」から十分な指導時間がとれないため、指導者自身の満足度もあまり高くない(問10, 26, 28)こととも一致している。

つまり部活動では、指導者はスポーツの「楽しさ」を伝えようと考えているが、専門性の少なさから、どうしても積極的に指導にかかわることができなかつたり、公務の多忙さでなかなか思うように指導の場に出られなかつたりするため、せめて“楽しく”活動させてやろう。と考えている指導者が多いのかもしれない。

指導の場の現状を考えるとある程度仕方のない部分もある。指導者の自由記述欄には、「学校での仕事が忙しく、部活動へ手がまわらない。また、部員数がとても多く指導者が少ないので十分なかわりができない。一人一人の子どもの向上を目指したいが、やれきれない状態

である」というような部活動指導者の、子どもの願いに答えられないことに対する思いが多くみられた。

しかし、見かけの“楽しい活動”のみに終わると、本来のスポーツの楽しさに届かない危険性がある。

(3) 子どもたちが求める「きびしさ」とは

前章第1節の子どもの自由記述には、“真面目にスポーツしたい”という子どもたちの願いが溢れていた(表2-3)。

そこには、「もっと練習や試合をしたい」

「もっと教えてほしい」「うまくなりたい」のほか『きびしく』してほしいという記述が多く驚かされた。『きびしい』という言葉を使った子どもの記述の代表的なものを挙げると、

「もっともっと厳しくみんながいっぱい動く練習がしたい」

「少し厳しく上手くなるように指導してほしい」

「厳しい中の楽しさをもっと感じたい」

「間違っていたり、おかしいところは厳しくしてほしい」

「ふざけている人が多いから、もっと厳しくしてほしい」

「男子だけでなく女子にも厳しくして、かまっしてほしい」

などである。子どもはいずれも『きびしい』という言葉を使っているが、込められた意味は少しずつ違う。まとめると以下ようになる。

「たくさん運動できるように厳しく」
 「上手くなるように厳しく」
 「間違っているところは厳しく」
 「ふざけていたら厳しく」
 「ひいきせずに厳しく」

『きびしい』という言葉は直接使っていないが、＜指導について＞＜友だちのこと＞＜活動の雰囲気のこと＞のカテゴリーの中にも同様の意味の記述が多い。

ただし、子どもはただ『きびしい』ことだけを求めているわけではない。自由記述の＜教えてほしい＞＜指導について＞のカテゴリーには、次のような記述が多く見られる。

「できないことは優しく教えてほしい。できるところは厳しくもっと上手になるように教えてほしい」
 「時には厳しく、時には優しくして、いろいろなことが出来るように指導してほしい」
 「言葉遣いをていねいにしてほしい」
 「あまり怒らないで指導してほしい」
 「できれば人の失敗をみんなの前で(大きな声で)言わないでほしい」
 「何かが出来るようになったときには一緒に喜んでほしい」
 「精一杯がんばって走っているのに『もっと腕を振って』とかいわれて、悲しい。もっと一人一人の運動を見てほしい」
 「もし私が運動をやっていたら記録だけを、結果だけを全てにせず、一生懸命なところを見てほしい！」

厳しい表情で、厳しい言葉遣いで、とてもできないような厳しい内容を指導してほしいと考えているのではないことは明らかである。「怖い指導者」を求めているのではないことも当然である。

記述の中に少数ではあるが、部活動では、怒鳴り散らす指導や無関心な指導への批判の意見、少年団では、怒鳴り散らす指導と体罰を含む指導への批判の意見があったことが残念である。

指導者の自由記述欄に、部活動のある指導者は「スポーツの楽しさと厳しさをどうすれば上手く教えてやることができるか」と書いていた。その答えが子どもの記述(表2-3)の中に溢れていた。

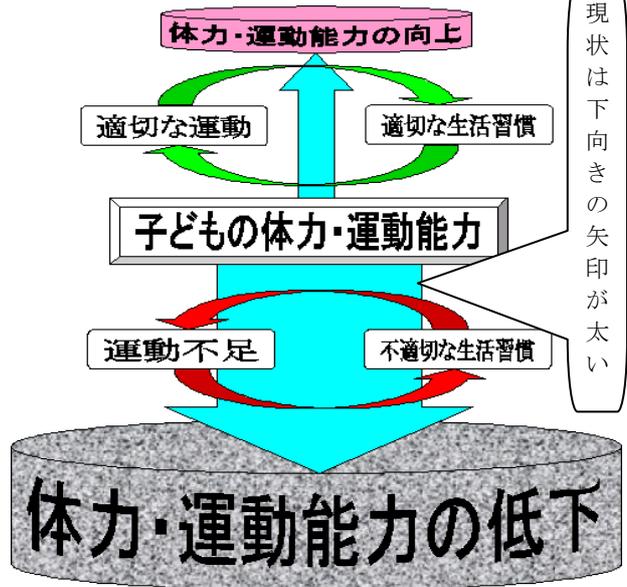
子どもたちは、一人一人しっかりみてほしいと願っている。そして「真面目にスポーツする」ことを願う子どもたちは、指導者にスポーツに集中できる環境を求めている。そのための『きびしさ』を指導者に求めていると考えられる。

第2節 スポーツが自分にとってかけがえのないものになるために

(1) 「できる」ことの「楽しさ」をまず体育学習で

「体力・運動能力の低下」を考えたとき、子どもの現状を改善させるためには、「適切な運動」と「適切な生活習慣」が良い循環をしていくことが必要である(図3-3)。

図3-3 体力・運動能力の二極化



そのためには、運動・スポーツから遠ざかっている子に“スポーツの楽しさ”を感じさせ、運動・スポーツに向かわせることが大切になる。

現在中学2年生のA児は、4年生で担任したとき典型的な中度肥満の児童であった。もちろん運動には苦手意識をもち、体育の服装も忘れがちであった。「リレー」の单元では、トラック1周を走りきることができず、彼専用の内回りコースを作り、グループに速い児童を集めてやっと他グループと勝負ができるほどであった。友だちに笑われたり、非難されたりすることを恐れ、一生懸命走ることにも消極的な様子がみられた。

3年間担任する間、クラスの児童は、彼が必死に走る姿を決して笑わず、応援し続けた。

6年生になったある日、彼は自ら陸上部に入った。「続くだろうか?」という教職員や友だちの心配をよそに彼は走り続けた。大文字駅伝大会を目標にハイペースで走り続ける友だちに何周も抜かれながら。

夏休みが終わった発育測定の日、A児の名前が肥満傾向の児童の名簿から消えたことを、養護教諭から聞いた。そのころには、縦6段のとび箱を開

脚とびで越えていくようになっていた。

A児が「やればできる」気持ちをもち、スポーツに「一生懸命取り組み続ける」ためには、周囲の友だちや指導者の直接、間接のかかわり、支援があった。

A児は、友だちの支えや励ましの中で運動するうちに、「達成」や「克服」の喜びを知り、自分の体が変わっていくことに自己実現の“楽しさ”を知ったのであろう。

A児は中学校へ進学した現在も、柔道部へ入り、生活にスポーツを取り込んだ生活を続けている。

A児の場合は、まず「体育学習」を大切にしたい。運動が苦手な子や肥満傾向の子は、第2章第1節でみたように、苦手意識から、周りの児童を意識したり、遠慮したりする傾向がみられる。そのような子に“スポーツの楽しさ”を経験させるには、平均して週に2～3時間子ども全員が経験する体育学習の役割が大きい。

体育学習の中で子どもに“有能感”をもたせたい。“有能感”については、「楽しさの土台に運動に関する有能さの認知が介在している(中略)運動経験の中でどのような有能感を、どの程度認知するのかということが私たちのその後の運動に取り組む態度や姿勢につながり、生涯スポーツへと発展していくことになる」(36)といわれている。

苦手意識をもつ子どもは、それまでの経験から運動に対して「どうせできない」という“無力感”をもたされている。「やればできる」という“有能感”をもつことで“自己肯定感”も強くなり、運動・スポーツに対して積極的になるであろう。

そうなれば、部活動へ参加する子、少年団に参加する子、民間のスポーツ団体に参加する子、さらには自分で運動を考え生活の中で実践する子も出てくるであろう。そういった選択肢の中から、今の自分にあった運動・スポーツとのかかわりを子どもは探していくことができるであろう。

いくら部活動やスポーツ少年団で素晴らしい活動が展開されていても、子どもがその活動に入っていかなければ“スポーツの楽しさ”を味わえないし、「体力・運動能力の二極化」の問題も解決の方向に向かわない。体育学習を大切にしたい。

さらに、学校体育と社会体育の指導者が同じ思いで指導することで、苦手意識をもつ子どもも、スポーツ活動に参加しやすくなるはずである。

では、運動が得意な子も苦手な子も皆が、“スポーツの楽しさ”を知り、「一生懸命スポーツに取り組む」ためには、何が必要なのだろうか。

(2)「一生懸命取り組むことの大切さ」を伝えるには

多くの部活動とスポーツ少年団の指導者が、スポーツを通して子どもに伝えたいこととして考えている「一生懸命取り組むことの大切さ」は、スポーツに限らず児童期の子どもたちに伝えたいことである。

まず、スポーツにとって「一生懸命する」とは、どのような意味をもっているのだろうか。

スポーツは「プレイとしての競争(アゴーン)」(37)ともいえる。「アゴーン(agon)の本質は、平等の条件の下で、最善の努力を尽くすことにある」(38)ので、そもそも、「一生懸命」「全力を尽くす」ことは、スポーツをすることの前提条件といえる。

さらに言えば、「平等の条件でやるのだから、結果はあらかじめわからない。だから、全力を尽くすのだ」(39)。体育学習で我々が子どもによく言う「勝つか負けるか、やってみなくてはわからないチームやルールでゲームをするから、勝てば嬉しいし、負ければ悔しいんだね。」ということである。

どの子どもが、自分の努力でなんとかなりそうだと思う条件の下で、スポーツ活動をすることにより、子どもが自らスポーツに向かい、技術、戦術、ルール、仲間などスポーツにかかわること全てを通して“スポーツの楽しさ”を味わい、その中から「一生懸命取り組むことの大切さ」を学び取っていくものではないかと考える。

指導者の役割は「どの子どもが、自分の努力でなんとかなりそうだと思う条件」を作り出すことにある。そのためには何が必要なのだろうか。

スポーツの指導でまず頭に浮かぶのは、その種目の「技術や戦術にかかわることの指導」である。

子どもが感じる“スポーツの楽しさ”の一番目が「できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりしたとき」であることや、「やればできる」ことを通して“有能感”が身に付くことを考えると、指導者はどの子どもが今の力を伸ばしていくための指導技術や理論をもっていることが望ましい。

しかし、特に部活動では指導する種目の経験のない指導者が多い。スポーツ少年団といえども、保護者としてかかわり、慣れない種目の指導に苦労している指導者も多いはずである。まして指導

対象が小学生となると大人の指導法がそのまま通用しないことも多い。前章第2節の間27でみたように、子ども向けの指導法を知りたいと考える指導者が最も多いことからわかる。学校や地域の人材をいかに見つけ出し、活用するかも大切になってくるだろう。

現在、指導のマニュアルのようなものは書籍やインターネットを探すと結構みつけることができる。ただし、子ども向けの指導法を教えてくれるものは少ない。子ども向けの指導法の確立は今後の課題である。

技術や戦術の指導においても、本当に大切なのは、指導者の競技経験や実技の技術ではなく、子どもが伸び悩んでいるかどうか、どこで伸び悩んでいるかを見極める“子どもをみる目”であると考えられる。

全国大会出場チームの監督やコーチが、その種目の競技経験のない方であることは、珍しいことではない。

次に「活動の場やルールの工夫」である。

部活動やスポーツ少年団で大会等に出場するときは仕方がないが、普段の練習時には、子どもが安心して活動できる場やルートを工夫することが大切である。

活動の場やルールは固定したものである必要はない。「平等の原則を重んじながら、お互いが合意するルールであればよい」(40)。

もちろん、易しく簡単にするばかりでは、子どもはやがて退屈してしまう。子どもを観察しながら、工夫した難しいものに変えていったり、正規の競技規則に近づけていったりすることも必要である。「どの子どもが、自分の努力でなんとかなりそうだと思う条件」が大切になる。その際に重要なことは「平等、安全、興味である」(41)。

ルールはスポーツにおいて平等の条件を保障するものである。児童のスポーツ活動においても、参加者が合意したルールについては尊重する態度をしっかり身に付けさせなければならない。

なぜならば、「このルールが無視されたときプレイの世界は崩壊する」(42)からである。スポーツにおけるルールは、スポーツの空間を日常的な世界から隔て、守る働きをするものであり、スポーツにとってはルールを守ることは絶対である。

この点において、体育学習を含む児童のスポーツ活動を振り返ったとき、自らの反省も含めて、考えなければならないことがある。

子どもは、勝負や記録がかかった場面で、悪意なくルール違反を犯すことがある。このときに指導者が「子どものことだから少しくらい…」「まだルールに慣れていないのだから仕方ない」「一生懸命やった結果だから…」と見逃してしまうことはないだろうか。

もしその場面でルール違反を見逃されると、そのときは悪意なく偶然に起こった違反であったかもしれないが、子どもは次第に確信犯的にルールを破るようになってしまう。

特に、ルールに慣れる段階の子どもたちには、時間がかかっても、そのルールの意味とルールを守ることの大切さを、優しく、ていねいに指導したいものである。そうすることで、どの子どもが安心して一杯活動できるスポーツ活動に近づいていくと考えられる。

そして「**スポーツマンシップとフェアプレイ**」である。

スポーツには、競技規則を意味する成文化されたルールと、マナーやエチケット、あるいはスポーツマンシップやフェアプレイと呼ばれる慣習的に支持されているものがある。これらをどのように理解すればよいか、いくつかの記述を挙げる。

「エチケットの語源は入場券ticketで、それをわきまえ身につけていけばスムーズに集団の仲間入りができるという意味の言葉である」(43)

「エチケットの意味は正確に表現しがたいけれども、よきマナーの全域、よい躰及び真の礼儀正しさを表現するもの」(44)

「各種目に共通なエチケットの基礎がスポーツマンシップということになる。したがってスポーツマンシップは各種目のエチケットが導き出される共通な原則と考えればよい」(45)

「フェアプレイはスポーツマンシップの重要な構成要素とされている。すなわち、スポーツマンシップは通例人間的であること(思いやりをもつ)、個人的には感情を抑制し、社会的にはルールを守り公正に振舞うことといわれる」(46)

「フェアプレイの本質はスポーツだけでなく、すべての競争場面で他人に思いやりをもち、ルール規定を守ること」(47)

スポーツマンシップは「人間的であること(思いやり)」であり、スポーツマンシップを基礎にエチケットやマナーが導かれ、フェアプレイもスポーツマンシップに含まれる。フェアプレイは思いやりをもち、ルールを守ることと同義と理解できる。

では、スポーツマンシップに代表される概念は、スポーツを神聖視する特別な概念なのだろうか。

竹之下休蔵は「プレイとしてのスポーツを問題にするときは、ルール（きまり）やフェアプレイにふれなければならない。これらはまた体育の内容でもある」（48）と述べ、また「スポーツマンシップやフェアプレイが失われたとき、スポーツもまた現実の社会も、その意味を失うほかないだろう」（49）と述べている。

これらの概念（図3-4）はスポーツとは切り離すことができないものである。スポーツをするとは、これらの概念も一緒に受け入れることである。

しかし、体育学習や部活動において、スポーツのマナーは学習内容として重視されてきたとはいえないのではないだろうか。指導者の自由記述に下記のような悩みがある。

「きびきびした動き、挨拶を望んでいるが、部活動でどこまできびしく指導すればいいのか少し悩む」

「小学校の中のクラブ活動としての練習であるため、言葉遣いや挨拶をどこまで踏み込んでいいのか迷います」

スポーツにおいて相手は「敵」ではない。「競争」は相手の存在を肯定し、尊重しなければならない。

「スポーツの世界では、相手は、まず第一に、自分と『一緒』にその活動を享受し合う『仲間』なのだ」（50）。そして人間的であることと、他人に思いやりをもつことはスポーツマンシップとフェアプレイの中身である。挨拶や言葉遣いは「人のかかわりの入り口」である。たとえどの段階のスポーツ活動であろうと、しっかり指導したい。

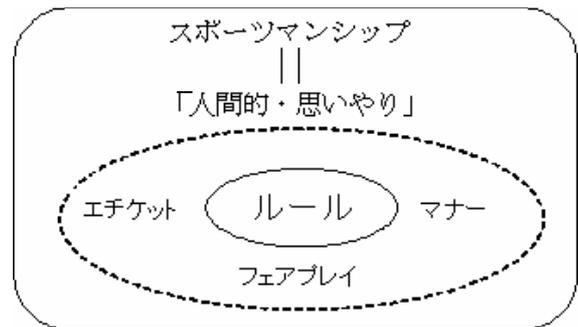
ただし、挨拶や言葉遣いに限らずマナーやエチケットの指導が形だけのものにならないようにしたい。ルールのときと同様に、子どもにその意味を優しく、ていねいに教えなければならない。

我々は「スポーツの素晴らしさ」を伝えるために、今こそ、マナーやエチケットを含めスポーツマンシップやフェアプレイの意味と大切さを、子どもと共に考えていかなければならない。

そのような「人を大切に作る雰囲気」のあるスポーツ活動の場では、苦手意識をもつ子も伸び伸びとスポーツに集中できるであろう。また得意な子や、もともとスポーツが大好きな多くの子どもも、仲間との相互作用でさらにスポーツに熱中できるようになるであろう。

結果として個人の力もチームの力も伸び、「やればできる」気持ちもより強くなると思われる。

図3-4 スポーツマンシップについて



最後に「子どもの心身の健康」である。

これは、どちらかというスポーツ活動に熱心に取り組んでいる子どもに対するものである。

前章第1節の間43でみたように、スポーツで関節の痛みを感じている子どもが半分以上いる。

「以前あった」と入れると70%以上である。

いわゆる成長痛に伴う痛みも含まれると思われる、オーバーユースによる痛みがどれくらいあるかは不明だが、運動によって痛んでいることは確かである。

心配なのは、前章第2節の間25で指導者に尋ねた割合が、「かなりいる」と「少しいる」を合わせて、部活動6.4%、少年団16.1%しかないことである。「以前いたが現在ははいない」を足しても、部活動12.4%、少年団33.3%である。指導者の意識と子どもの現状がずいぶん離れている。

痛みがあるということは、体が警告を発しているということである。子どもの体は骨も関節も成長途中で柔らかく、変形しやすい。指導者には、子どもの体の様子に注意を払うことと多少のスポーツ医学的な知識をもつことが求められる。

もう一点は、「勝利志向」の強い指導による弊害である。「勝つこと」を目指すのが悪いわけではない。スポーツである以上、ルールに則り、マナー良く、ベストを尽くして勝ちに行くことは当然である。しかし、ゲームの勝敗は、謙虚にこれを受けとめなければならない。

「勝利志向」の強い指導は、指導者が「無意識のうちにレギュラーとイレギュラーの差別、敵対意識、仲間の排除、嫉妬、妨害といった人間関係や劣等意識を醸成している」（51）場合がある。

その場合バーンアウトやドロップアウトという心理的な問題を起こすことも考えられる。せっかくスポーツ活動に参加した子どもが、小学生の時点でスポーツから離れていくのは非常に残念なことである。

指導者は「幼い時期から狭い視野でスポーツに

没頭することの危険な一面」(52)をもっと認識しなければならない。

子どもは、大人よりも壊れやすい心と体を持っている。指導者が「子どもの心身の健康」に目を向けることで、子どもはさらに一杯スポーツに取り組むことができるであろう。

本項で述べた配慮は「人権意識」や「人権感覚」という言葉に置き換えてもよい。「人権」というと硬いイメージがあるかもしれないが、「その子どもも周囲の人も幸せになるには、今何をすべきかを考えて行動する」ことだと信じている。

調査結果からも、子どもは本来運動・スポーツが大好きである。子どもは、スポーツマンシップに代表される「人を大切にする」雰囲気のあるスポーツを経験することで、スポーツの過程や結果、人とのかかわりの全てを通して“有能感”をもつ。それはやがて“自己肯定感”に高まるだろう。

その中で、子どもはスポーツをすることの意味を知り、スポーツが自分にとってかけがえのないものになるはずである。自ら「一生懸命取り組むことの大切さ」も感じ取ってくれると思う。

“自己肯定感”をもつ子どもは、自分の大切さを知っている。自分を大切にできる子どもは、人も大切にすることができる。そのような子どもが社会へ出て行くとき、日本は「誰もが住みやすい国」になっていくはずである。

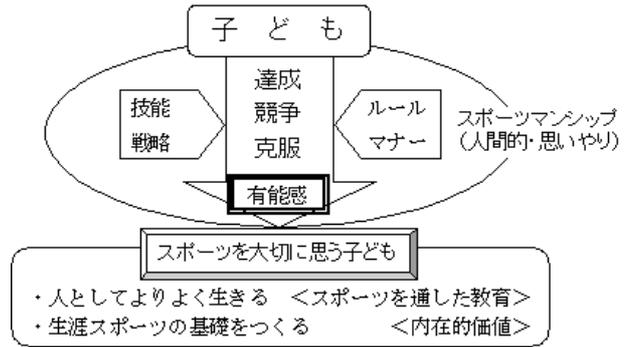
これこそが「スポーツを通した健全育成」の目的が達成された姿ではないだろうか。(図3-5)

「プレイとしてのスポーツ」と「教育としてのスポーツ」は別のものではなく、「スポーツとは何か」を理解した指導者と子どもが、一生懸命スポーツに取り組む中で、教育的な目的も達成されるといえないだろうか。

子どもは指導者の鏡である。我々指導者は、指導する子ども一人一人を大切に育てていきたい。苦手な子が「一生懸命した結果の失敗」に気付ける指導者、得意な子が「手を抜いていること」に気付ける指導者の中では、子ども同士もお互いを理解し、思いやりをもち、高め合えるであろう。

最後に、自身の反省も含めて、指導者に実行してほしいことは「笑顔あふれるスポーツ活動」である。スポーツは“楽しい”ものである。子どもは楽しいと、きびしい練習でも進んでやるものである。指導者は「笑顔あふれるスポーツ活動」を実践することで、「スポーツを通しての子どもの成長」という宝物が手に入ることになるであろう。

図3-5 人を大切にするスポーツ



(3) 部活動への一提案(総合運動部の取組)

京都市立小学校では、平成14年度より、学校と地域のより一層の連携を目指し、それまで30年以上続いてきたスポーツ教室の取組を、部活動の取組に発展的に改革した。

しかし、学校現場ではそれまでのスポーツ教室との違いや、地域との関係、教職員の参加形態など様々な問題があり、どの学校も新しい活動の形を試行錯誤しながら探っている段階である。その悩みが部活動の指導者の記述にも表れていた。

そこで本研究の最後に、いくつかの学校の取組を紹介したい。

学校・地域の実態は様々であるので、そのままこの学校でもできる取組はないが、どの取組も、今ある学校の力と地域の力を最大限に活用しようとする参考になる取組である。

特徴的なのは、学校として全ての児童がスポーツの入り口に立ちやすくするための工夫である。典型的なのは“総合運動部”といわれる、多種目を経験できる部活動である。

これは、前章第1節の間24でみてきた「種目を一つに絞る前に多くの種目を経験したい」という子どもの思いに応える取組といえる。

また、調整力を身につける段階の小学校の児童にとって、発達段階に合った活動ともいえる。

“総合運動部”は教職員の指導者の「専門性が少ない」という悩みにも応えるものとなるかもしれない。スポーツ経験の少ない教職員も「こういう活動なら自分も指導に参加できそうだ」と思える活動になりえるかもしれない。また、指導者の異動による部活動への影響も小さくできる。

他に、子どもが多種目に参加したり、自分の予定に合わせて、参加する日を選んだりすることができる取組もみられる。活動する日を増やさなければならないために、校内の会議、研修や行事の調整に工夫がいるが、参考になる取組である。

以下、各校の取組を紹介する。

<春日野小学校の取組>

- “総合運動部” の設置
- 部活動を3時～下校時間に設定することで、下校時間に遅れることなく帰ることができる。
- 下校時間以降をクラブチームの活動とすることで、児童も指導者もけじめをつけやすい。
- 部活動とクラブチームは同じ種目でも、違う種目でもよいので、“総合運動部”に入らなくても、結果的に多種目を経験できる。
- 地域の行事に部活動として積極的に参加したり、校内で部活動の発表会を開催したりする。

<西院小学校の取組>

- “基礎スポーツ部（総合運動部）” の設置
- “基礎スポーツ部” を中学年に設定することで、高学年での種目選択の準備ができる。
- 巧みな動きを身に付けさせたい中学年の児童に、いろいろな運動を経験させられる。
- 4年生は放課後の遊びの延長感覚で参加
- 現在のところ教職員の指導者のみで指導
- 加入率が高いため活動場所が手狭なことが悩み

表3-1 春日野小学校の取組

	月		火		水		木		金		土		日	
	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館
8:00	走ろう会	バレー	走ろう会	バレー	走ろう会	バレー	走ろう会	バレー	走ろう会	バレー				
9:00											野球	バレー ボール	野球	
10:00														
11:00														
12:00														
13:00		コーラス		コーラス		コーラス		コーラス		コーラス				バレー ボール
14:00														
15:00	全種目	全種目												
16:00			駅伝		駅伝		駅伝		駅伝					
17:00														
18:00														
	空手(19:00～21:00)		野球(19:00～21:00)		種目	・総合運動部 ・タグラグビー ・陸上 ・ジャンプロープ ・バレーボール	・卓球 ・コーラス ・昔遊び ・読書		空手(19:00～21:00)					

表3-2 西院小学校の取組

	月		火		水		木		金		土		日	
	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館
8:00											駅伝			
9:00														
10:00												バレー ボール		
11:00														
12:00														
13:00														
14:00														
15:00														
16:00														
17:00	陸上 サッカー	バス ケット	駅伝	バレー ボール	サッカー 基礎スポ	バス ケット				陸上 サッカー	卓球			
18:00														
					剣道(17:00～21:00)							駅伝は大文字駅伝支 部予選の前のみ		

<砂川小学校の取組>

- 活動日を増やすことで、多種目を経験できたり、自分の生活に合わせたスポーツとのかかわりができたりする。
- バレー、バスケ、陸上はクラブチームを兼ね、大会や記録会に参加している。子どもは部活動のみの子も、一緒に活動している。
- 陸上以外は地域の指導者の協力で活動している。会議や研修の時間は地域の指導者が指導することで活動日を増やしている。
- 今年度4年生以上の児童の7割が参加している。

<六原小学校の取組>

- 部活動は全校児童が対象
発達段階の違いを考慮し、ルールや場の工夫を重ね、全学年で取り組む。
- 総合運動部の設置
- 50gのソフトバレーボールを使った、「ハンドテニス」を教材化し、体育や部活動において全校で取り組む。
- 中間休みは、30分+5分。昼休みは25分確保することにより、外遊びの時間を充分にとる。
- 合気道と美術教室は、地域の指導者の協力で「部活動」として実施している。

表3-3 砂川小学校の取組

	月		火		水		木		金		土		日	
	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館
7:00	大文字		大文字		大文字		大文字		大文字					
8:00														
9:00												バレーボール		バレーボール
10:00											ソフトボール 陸上			
11:00														
12:00														
13:00														
14:00														
15:00														
16:00	陸上	バレーボール	ゲートボール	卓球 バスケット	陸上	バドミントン			陸上	バスケットボール				
17:00														
	第1, 3, 5火曜 和太鼓				第2, 4木曜 お話しキッズ 第3木曜 お茶の会								部活動	地域児童活動

表3-4 六原小学校の取組

	月		火		水		木		金		土		日	
	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	教室	運動場	体育館	運動場	体育館	運動場	体育館
8:00	朝マラソン		朝マラソン		朝マラソン		朝マラソン		朝マラソン					
9:00												合気道		
10:00	全校サッカー		全校サッカー		全校サッカー		全校サッカー		全校サッカー					
11:00														
12:00														
13:00	全校サッカー		全校サッカー		全校サッカー		全校サッカー		全校サッカー					
14:00														
15:00							美術教室							
16:00	総合部活動		バレーボール				サッカー		総合部活動					
17:00														
18:00														
	総合運動部 ・卓球 ・タグラグビー ・ハンドテニス ・ティーボール				ソフトバレー ・ラケットベース ・キックベース								合気道と美術教室は「部活動」として行っているが、地域の指導者の協力で指導	

- (33) 竹之下休蔵『プレイ・スポーツ・体育論』
大修館書店 1972.10 p.140
- (34) 前掲(33) p.197
- (35) 『スポーツ少年団とは』財団法人日本体育協会
日本スポーツ少年団 2004.1 p.3
- (36) 森 司朗『スポーツ心理学の世界』「6章スポーツにおける
内発的動機付け」福村出版 2000.10 p.91
- (37) 前掲(33) p.140
- (38) 前掲(33) p.148
- (39) 前掲(33) p.161
- (40) 前掲(33) p.209
- (41) 前掲(33) p.209
- (42) 前掲(33) p.143
- (43) 前掲(33) p.211
- (44) 前掲(33) p.211
- (45) 前掲(33) p.214
- (46) 前掲(33) p.215
- (47) 前掲(33) p.215
- (48) 前掲(33) p.135
- (49) 前掲(33) p.213
- (50) 加納弘二『生涯スポーツの理論と実際』「第3章青年とス
ポーツ」大修館書店 2001.4 p.83
- (51) 日下裕弘『生涯スポーツの理論と実際』「第2章子どもと
遊び・遊戯スポーツ」大修館書店 2001.4 p.48
- (52) 岸 順治『スポーツ心理学の世界』「15章スポーツ選手の
バーンアウト」福村出版 2000.10 p.224



おわりに

「体力・運動能力の低下」や「すすんで運動する子とそうでない子の二極化」が言われる中、今回の意識調査を通して、子どもが昔と変わらず「運動やスポーツが大好き」であることがわかった。しかし、子どもを取り巻く生活環境は、子どもの願いを実現することに楽観できる状況ではない。

子どもが自ら、すすんで運動・スポーツに親しむ生活を作り上げていくために、指導者や大人がしなければならないことが多いと感じる。

スポーツが得意な子も、苦手な子も、子どもはみな「たくさんスポーツをしたい」「上手になりたい」と願っている。一人一人のその気持ちを指導者が知り、子ども同士もお互いの気持ちを知り、かかわりあってスポーツをする。苦手な子も気兼ねなく、得意な子はさらに上達できるように“一生懸命”になる。

そのような素敵なスポーツ活動では、子どもとスポーツ、子どもと指導者、子どもと子ども、子どもと家族、どの関係もが子どもにとって“大切なもの”になる。そのように思える「子ども」を育てる指導が理想である。

本研究を進めるにあたって、京都市立小学校、京都市スポーツ少年団の本郷芳男本部長をはじめとする関係者の方々、そして多くの子どもたちに調査にご協力いただいた。さらに研究を進める中で、京都教育大学名誉教授の野原弘嗣博士や、体育健康教育室の方々に様々にサポートしていただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

最後に、京都市小学校体育研究会がお世話になっている、筑波大学の佐伯年詩雄先生の講演中の記憶に残る一節を記す。

「今日、アウトドアスポーツが盛んになってきました。みなさんの中にもアウトドアスポーツが“好き”な方は多いでしょう。では、日本の海や山の現状はどうでしょうか。休日になると人があふれ、後にはゴミの山が残ります。

本来は、アウトドアスポーツが好きな人が増えれば増えるほど、海や山がきれいになる。ということではなければなりません。

その人にとって、スポーツが“好き”なものから、“大切”なものになることが大切なのです。」

この話を「奥志摩みさきの家」や「花背山の家」での野外活動の際に、子どもに話してきた。子どもは目を輝かせ、大きく頷きながら聞いてくれる。子どもは無限の可能性を秘めている。

【付表】(1) 基礎集計表(6年生児童)

調査事項			児童 6年生			
			小学校		少年団	
			人数	割合	人数	割合
サンプル数			1383		131	
1	あなたのふだんの体の調子はどうですか。	1 よい	578	41.8%		
		2 まあよい	687	49.7%		
		3 あまりよくない	105	7.6%		
		4 よくない	13	0.9%		
2	あなたの今の生活は充実していますか。	1 充実している	452	32.7%		
		2 まあ充実している	771	55.7%		
		3 あまり充実していない	130	9.4%		
		4 充実していない	29	2.1%		
3	あなたは次の日に学校があるとき、だいたい何時ごろまでに寝ますか。	1 午後10時まで	459	33.2%		
		2 午後11時まで	563	40.7%		
		3 午前0時まで	272	19.7%		
		4 午前0時よりおそく寝る	89	6.4%		
4	あなたは学校のあある日、朝食を食べますか。	1 いつも食べる	1123	81.2%		
		2 食べる日の方が多い	150	10.8%		
		3 食べない日の方が多い	75	5.4%		
		4 ほとんど食べない	35	2.5%		
5	あなたは学校のあある日、1日合計何時間ぐらいいん、テレビを見たたり、テレビゲームをしたたりしますか。	1 ほとんど見ない、しない	125	9.0%		
		2 1時間まで	163	11.8%		
		3 1～2時間	403	29.1%		
		4 2時間以上	692	50.0%		
6	あなたは1週間に何日ぐらいいん、スポーツ以外の習い事をしていますか。	1 週に5日以上	154	11.1%		
		2 週に3日～4日	307	22.2%		
		3 週に1日～2日	498	36.0%		
		4 してない	423	30.6%		
7	あなたは学校から帰って、何人ぐらいいん友だちと過ごすことが多いですか。	1 自分1人で	346	25.0%		
		2 友だちと2人で	294	21.3%		
		3 3人～5人	612	44.3%		
		4 6人以上	128	9.3%		
8	あなたは外で遊ぶことが好きですか。	1 好き	701	50.7%		
		2 どちらかという好き	435	31.5%		
		3 あまり好きではない	208	15.0%		
		4 好きではない	35	2.5%		
9	あなたは学校の休みの時間に外で遊びますか。	1 たいい外で遊ぶ	513	37.1%		
		2 とときき外で遊ぶ	433	31.3%		
		3 あまり外では遊ばない	237	17.1%		
		4 ほとんど外では遊ばない	196	14.2%		
10	あなたは学校から帰って外で遊びますか。	1 たいい毎日外で遊ぶ	291	21.0%		
		2 とときき外で遊ぶ	569	41.1%		
		3 あまり外では遊ばない	241	17.4%		
		4 ほとんど外では遊ばない	278	20.1%		
11	あなたは自分が運動不足だと思いますか。	1 そう思う	183	13.2%		
		2 まあそう思う	382	27.6%		
		3 あまり思わない	415	30.0%		
		4 思わない	399	28.9%		
12	あなたは疲れやすいほうですか。	1 そう思う	280	20.2%		
		2 まあそう思う	480	34.7%		
		3 あまり思わない	445	32.2%		
		4 思わない	173	12.5%		
13	あなたは体がかたいほうだと思いますか。	1 そう思う	498	36.0%		
		2 まあそう思う	440	31.8%		
		3 あまり思わない	314	22.7%		
		4 思わない	127	9.2%		
14	あなたは姿勢が悪いと言われたことがありますか。	1 よく言われる	268	19.4%		
		2 とときき言われる	548	39.6%		
		3 あまり言われない	422	30.5%		
		4 言われたことはない	141	10.2%		
15	あなたはスポーツや運動をすることが好きですか。	1 好き	841	60.8%	118	90.1%
		2 どちらかという好き	341	24.7%	11	8.4%
		3 あまり好きではない	161	11.6%	2	1.5%
		4 好きではない	40	2.9%	0	0.0%
16	あなたはスポーツや運動がとくいなほうだと思いますか。	1 そう思う	293	21.2%	35	26.7%
		2 まあそう思う	457	33.0%	59	45.0%
		3 あまり思わない	463	33.5%	34	26.0%
		4 思わない	169	12.2%	3	2.3%
17	あなたの家族はスポーツが好きですか。	1 好き	440	31.8%		
		2 どちらかという好き	516	37.3%		
		3 あまり好きではない	343	24.8%		
		4 好きではない	84	6.1%		
18	あなたは家族でスポーツ(ハイキングなども含めて)をすることがありますか。	1 よくある	140	10.1%		
		2 たまにある	489	35.4%		
		3 あまりない	466	33.7%		
		4 ない	287	20.8%		

調査事項			児童 6年生			
			小学校		少年団	
			人数	割合	人数	割合
サンプル数			1383		131	
19	運動の時間や量についてはどう思いますか。	1 短時間でできる手軽な運動をしたい	160	11.6%	5	3.8%
		2 手軽な運動をしたい	233	16.8%	7	5.3%
		3 ある程度しっかり運動したい	696	50.3%	80	61.1%
		4 長時間たくさん運動をしたい	294	21.3%	39	29.8%
20	運動する雰囲気についてはどう思いますか。	1 昔手な子も安心してできるやさしい雰囲気がよい	486	35.1%	35	26.7%
		2 ある程度の失敗は許される雰囲気がよい	614	44.4%	61	46.6%
		3 失敗をしてきし合えるきびしい雰囲気がよい	235	17.0%	32	24.4%
		4 失敗は許されないきびしい雰囲気がよい	46	3.3%	3	2.3%
21	一人一人ができるようになること、チームが勝つことのどちらを優先しますか。	1 できなかった運動ができるようになりたい	423	30.6%	38	29.0%
		2 どちらかというできなかった運動ができるようになりたい	422	30.5%	27	20.6%
		3 どちらかというチームが勝つことが大切だ	305	22.1%	38	29.0%
		4 チームが勝つことのほうが大切だ	231	16.7%	28	21.4%
22	運動と友だち関係についてどう思いますか。	1 しっかり運動していく中でよい友だち関係が深まる	482	34.9%	73	55.7%
		2 どちらかという運動していく中でよい関係ができていくもの	439	31.7%	32	24.4%
		3 どちらかという友だち関係をよくしていくほうが運動もできるようになる	248	17.9%	12	9.2%
		4 友だち関係をよくしていくことでより運動も深まる	211	15.3%	13	9.9%
23	監督やコーチ(指導者)についてどう思いますか。	1 やさしく、ていねいに教えてほしい	163	11.8%	8	6.1%
		2 ある程度やさしく、ていねいに教えてほしい	354	25.6%	17	13.0%
		3 ある程度きびしくても、うまくなれる練習がよい	615	44.5%	77	58.8%
		4 きびしくても、うまく強くなれる練習がよい	245	17.7%	29	22.1%
24	スポーツの種目についてどう思いますか。	1 ひとつの種目をずっと続けたい	425	30.7%	58	44.3%
		2 できればひとつの種目を続けたい	286	20.7%	27	20.6%
		3 ちがう種目もしてみたい	308	22.3%	18	13.7%
		4 いろいろな種目を経験したい	363	26.2%	28	21.4%
25	勝ち負けや競争についてどう思いますか。	1 勝ち負けや競争のきびしくない運動をしたい	128	9.3%	10	7.6%
		2 あまり勝ち負けにこだわらない運動をしたい	398	28.8%	25	19.1%
		3 ある程度きさい合うことを楽しみたい	428	30.9%	42	32.1%
		4 きさい合って勝負を楽しみたい	429	31.0%	54	41.2%
26	あなたは体育の授業以外にスポーツを習っていますか。	1 はい	992	71.7%		
		2 いいえ	391	28.3%		
27	スポーツを習っていない理由について、あなたの考えに近いものをひとつ選んでください。	1 中学生になってからしようと思っているから	67	17.1%		
		2 習い事でいそがしくて時間がなから	110	28.1%		
		3 運動が苦手だから	60	15.3%		
		4 友だちがしていないから	3	0.8%		
		5 したいスポーツの活動場所が近くにないから、あっても遠いから	14	3.6%		
		6 スポーツより他にしたいことがあるから	50	12.8%		
		7 どうせするなら、きびしいところでしたいから	0	0.0%		
		8 監督やコーチ(指導者)がきびしうだから	6	1.5%		
		9 病気やケガのため今はできないから	10	2.6%		
		10 たくさん外で遊んでいるので必要ないから	8	2.0%		
		11 自分で考えて運動をしているから	18	4.6%		
		12 家庭の事情で今はできないから	24	6.1%		
		13 しぼられたくないから	19	4.9%		
28	あなたがスポーツをしている曜日に○をしてください。	1 週1日	175	17.6%	12	9.2%
		2 週2日	287	28.9%	39	29.8%
		3 週3日	149	15.0%	29	22.1%
		4 週4日	132	13.3%	32	24.4%
		5 週5日	97	9.8%	10	7.6%
		6 週6日	75	7.6%	7	5.3%
		7 週7日	76	7.7%	2	1.5%
29	そのスポーツに決めた理由は何かですか？	1 人にすすめられたり、さそわれたりしたから	373	37.6%	51	38.9%
		2 知り合いがしている(していた)から	168	16.9%	21	16.0%
		3 練習や試合を見てたくなったから	338	34.1%	39	29.8%
		4 本やマンガ、テレビを見てみたかったから	63	6.4%	16	12.2%
		5 指導者が信頼できそうだったから	48	4.8%	4	3.1%
30	あなたは練習に行くのが好きですか。	1 そう思う	604	60.9%	99	75.6%
		2 まあそう思う	311	31.4%	30	22.9%
		3 あまり思わない	55	5.5%	2	1.5%
		4 思わない	20	2.0%	0	0.0%

調査事項		児童				
		6年生				
		小学校		少年団		
サンプル数		人数	人数	人数	人数	
		1383	131			
31	あなたは1日の練習時間についてどう思っていますか。	1 もっと長くしてほしい	304	30.6%	35	26.7%
		2 少し長くしてほしい	228	23.0%	29	22.1%
		3今のままでよい	389	39.2%	61	46.6%
		4 少し短くしてほしい	52	5.2%	5	3.8%
		5 かなり短くしてほしい	17	1.7%	0	0.0%
32	あなたは練習の運動量についてどう思っていますか。	1 もっと増やしてほしい	240	24.2%	28	21.4%
		2 少し増やしてほしい	281	28.3%	38	29.0%
		3今のままでよい	420	42.3%	59	45.0%
		4 少し減らしてほしい	42	4.2%	6	4.6%
		5 かなり減らしてほしい	8	0.8%	0	0.0%
33	あなたは練習の内容についてどう思っていますか。	1 もっと高度なものをしたい	174	17.5%	16	12.2%
		2 少し高度なものをしたい	371	37.4%	54	41.2%
		3今のままでよい	412	41.5%	58	44.3%
		4 少し簡単なものをしたい	24	2.4%	3	2.3%
		5 もっと簡単なものをしたい	9	0.9%	0	0.0%
34	あなたは練習試合や試合の回数についてどう思っていますか。	1 もっと増やしてほしい	398	40.1%	55	42.0%
		2 少し増やしてほしい	246	24.8%	37	28.2%
		3今のままでよい	307	30.9%	38	29.0%
		4 少し減らしてほしい	29	2.9%	1	0.8%
		5 かなり減らしてほしい	10	1.0%	0	0.0%
35	あなたはスポーツを始めてからできた友だちがいますか。	1 たくさんいる	539	54.3%	106	80.9%
		2 少ない	328	33.1%	22	16.8%
		3 あまりいない	57	5.7%	3	2.3%
		4 いない	66	6.7%	0	0.0%
36	監督やコーチ(指導者)はあなたに声をかけてくれますか。	1 よくかけてくれる	478	48.2%	78	59.5%
		2 ときどきかけてくれる	425	42.8%	51	38.9%
		3 あまりかけてくれない	68	6.9%	2	1.5%
		4 かけてくれない	20	2.0%	0	0.0%
37	あなたの家族は練習や試合を見に来てくれますか。	1 よく来る	290	29.2%	62	47.3%
		2 ときどき来る	319	32.2%	47	35.9%
		3 あまり来ない	146	14.7%	15	11.5%
		4 来ない	235	23.7%	7	5.3%
38	あなたは家族に練習や試合の話をしますか。	1 よくする	472	47.6%	69	52.7%
		2 ときどきする	339	34.2%	49	37.4%
		3 あまりしない	102	10.3%	12	9.2%
		4 しない	74	7.5%	1	0.8%
39	あなたの家族は監督やコーチ(指導者)の指導について話をしますか。	1 よくする	129	13.0%	19	14.5%
		2 ときどきする	277	27.9%	57	43.5%
		3 あまりしない	295	29.7%	41	31.3%
		4 しない	289	29.1%	14	10.7%
40	あなたの部活動やスポーツ団体はどの子も力いっぱい活動していると思いますか。	1 そう思う	395	39.8%	72	55.0%
		2 まあそう思う	446	45.0%	54	41.2%
		3 あまり思わない	133	13.4%	5	3.8%
		4 思わない	17	1.7%	0	0.0%
41	あなたの部活動やスポーツ団体はどの子もあいさつや言葉づかいに気を付けていますか。	1 そう思う	232	23.4%	41	31.3%
		2 まあそう思う	462	46.6%	60	45.8%
		3 あまり思わない	234	23.6%	25	19.1%
		4 思わない	63	6.4%	5	3.8%
42	あなたの部活動やスポーツ団体は練習の準備や片付け、しんどいこともみんなできていますか。	1 そう思う	457	46.1%	69	52.7%
		2 まあそう思う	386	38.9%	48	36.6%
		3 あまり思わない	115	11.6%	10	7.6%
		4 思わない	31	3.1%	4	3.1%
43	あなたは腰やひざ、肩やひじなど体の痛みはありませんか。	1 ある	205	20.7%	22	16.8%
		2 ときどき痛む	411	41.4%	48	36.6%
		3 以前あった	158	15.9%	20	15.3%
		4 ない	217	21.9%	41	31.3%
44	あなたは活動の次の日、気持ちよく起きられますか。	1 起きられる	278	28.0%	50	38.2%
		2 まあ起きられる	449	45.3%	62	47.3%
		3 少し起きにくい	182	18.3%	13	9.9%
		4 起きにくい	82	8.3%	6	4.6%
45	あなたは今の種目を今後も続けようと思いますか。	1 ずっと続けたい	647	65.2%	89	67.9%
		2 続けたいが違う種目もしてみた	240	24.2%	36	27.5%
		3 違う種目をしてみたい	69	7.0%	4	3.1%
		4 いろいろな種目をしてみたい	34	3.4%	2	1.5%
46	あなたの目標とする選手がいれば教えてください。	1 いない	484	48.8%	44	33.6%
		2 いる	506	51.0%	87	66.4%

調査事項		児童				
		6年生				
		小学校		少年団		
サンプル数		人数	人数	人数	人数	
		1383	131			
1番	スポーツをして楽しいと感じるのはどんなときですか。楽しい順に三つ選んでください。(その他も含めて順番をつけてください。) 体育の学習も含めて考えてください。	1 できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりしたとき	641	46.3%	64	48.9%
		2 練習してきたことが試合でできたとき	128	9.3%	18	13.7%
		3 試合に勝ったとき	253	18.3%	30	22.9%
		4 運動して汗をかいたとき	19	1.4%	0	0.0%
		5 体力が向上したとき	28	2.0%	0	0.0%
		6 全力で一生涯懸命運動しているとき	82	5.9%	5	3.8%
		7 友だちと仲良く運動したとき	94	6.8%	1	0.8%
		8 監督やコーチ(指導者)にほめられたとき	34	2.5%	11	8.4%
		9 家族にほめられたとき	12	0.9%	1	0.8%
		10 友だちにほめられたとき	16	1.2%	0	0.0%
		11 多くの友だちができたとき	28	2.0%	0	0.0%
		12 家族で同じスポーツをしたとき	6	0.4%	0	0.0%
		13 その他	16	1.2%	0	0.0%
2番	スポーツをして楽しいと感じるのはどんなときですか。楽しい順に三つ選んでください。(その他も含めて順番をつけてください。) 体育の学習も含めて考えてください。	1 できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりしたとき	225	16.3%	16	12.2%
		2 練習してきたことが試合でできたとき	190	13.7%	27	20.6%
		3 試合に勝ったとき	288	20.8%	32	24.4%
		4 運動して汗をかいたとき	50	3.6%	1	0.8%
		5 体力が向上したとき	100	7.2%	5	3.8%
		6 全力で一生涯懸命運動しているとき	128	9.3%	17	13.0%
		7 友だちと仲良く運動したとき	118	8.5%	7	5.3%
		8 監督やコーチ(指導者)にほめられたとき	134	9.7%	17	13.0%
		9 家族にほめられたとき	39	2.8%	2	1.5%
		10 友だちにほめられたとき	26	1.9%	4	3.1%
		11 多くの友だちができたとき	42	3.0%	2	1.5%
		12 家族で同じスポーツをしたとき	9	0.7%	0	0.0%
		13 その他	6	0.4%	0	0.0%
3番	スポーツをして楽しいと感じるのはどんなときですか。楽しい順に三つ選んでください。(その他も含めて順番をつけてください。) 体育の学習も含めて考えてください。	1 できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりしたとき	139	10.1%	13	9.9%
		2 練習してきたことが試合でできたとき	114	8.2%	15	11.5%
		3 試合に勝ったとき	203	14.7%	22	16.8%
		4 運動して汗をかいたとき	40	2.9%	1	0.8%
		5 体力が向上したとき	101	7.3%	3	2.3%
		6 全力で一生涯懸命運動しているとき	138	10.0%	18	13.7%
		7 友だちと仲良く運動したとき	140	10.1%	15	11.5%
		8 監督やコーチ(指導者)にほめられたとき	211	15.3%	25	19.1%
		9 家族にほめられたとき	74	5.4%	5	3.8%
		10 友だちにほめられたとき	54	3.9%	5	3.8%
		11 多くの友だちができたとき	100	7.2%	3	2.3%
		12 家族で同じスポーツをしたとき	27	2.0%	3	2.3%
		13 その他	14	1.0%	1	0.8%
スポーツや運動について困っていること、悩んでいることがあれば書いてください。		(記述)				
監督やコーチ、指導者に望むことがあれば書いてください。		(記述)				

【付表】(2) 基礎集計表(スポーツ指導者)

調査事項		スポーツ指導者				
		小学校		少年団		
		人数	人数	人数	人数	
サンプル数		205	90			
1	あなたの立場を教えてください。	1 教職員	147	71.72		
		2 地域の指導者	39	19.02		
		3 PTAの指導者	12	5.85		
		4 その他	7	3.41		
2	あなたが指導されている種目は何ですか。	(記述)				
3	指導している種目の競技経験はお持ちですか。(複数回答可)	1 一つ経験あり	83	40.49	20	22.22
		2 二つ経験あり	51	24.88	28	31.11
		3 三つ経験あり	27	13.17	14	15.56
		4 四つ経験あり	25	12.20	11	12.22
		5 五つ経験あり	12	5.85	13	14.44
		6 経験なし	7	3.41	3	3.33
4	他の種目の競技経験はお持ちですか。(複数回答可)	1 一つ経験あり	24	11.71	6	6.67
		2 二つ経験あり	38	18.54	12	13.33
		3 三つ経験あり	40	19.51	19	21.11
		4 四つ経験あり	42	20.49	22	24.44
		5 五つ経験あり	41	20.00	24	26.67
		6 経験なし	20	9.76	6	6.67
5	あなたは現在ご自身もスポーツをされていますか。	1 定期的にしている	69	33.66	32	35.56
		2 ときどきしている	60	29.27	30	33.33
		3 あまりしていない	28	13.66	13	14.44
		4 していない	48	23.41	14	15.56
6	あなたにとってスポーツの楽しさとは何ですか。	(記述)				
7	あなたが指導に関わるようになったきっかけは何ですか。	1 学校の校務分掌上(部活動)	79	38.54		
		2 学校から依頼されて	31	15.12	8	8.89
		3 指導者から誘われて	25	12.20	21	23.33
		4 わが子が部活動に入ったので	19	9.27	45	50.00
		5 スポーツを通して子どもを育てたいと思ったから	30	14.63	6	6.67
		6 自分を試してみたいから	3	1.46	1	1.11
		7 自分にできることで社会に役立つと思ったから	8	3.90	5	5.56
		8 その他	10	4.88	3	3.33
8	あなたがスポーツを通して子どもたちに伝えたいことは何ですか。強く思う順に三つ選んでください。	一番				
		1 できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりする楽しさ	64	31.22	12	13.33
		2 努力して勝つことのうれしさ	11	5.37	11	12.22
		3 運動して汗をかく楽しさ	33	16.10	8	8.89
		4 体や体格を向上させることの大切さ	1	0.49	1	1.11
		5 一生懸命取り組むことの大切さ	59	28.78	32	35.56
		6 友だちと仲良く運動する楽しさ	22	10.73	7	7.78
		7 友だちや仲間の大切さ	11	5.37	11	12.22
		8 マナーやエチケットの大切さ	3	1.46	7	7.78
		9 支えてもらっている人々への感謝の気持ち	1	0.49	1	1.11
10 その他	0	0.00	0	0.00		
二番						
1 できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりする楽しさ	31	15.12	9	10.00		
2 努力して勝つことのうれしさ	23	11.22	6	6.67		
3 運動して汗をかく楽しさ	22	10.73	0	0.00		
4 体や体格を向上させることの大切さ	2	0.98	4	4.44		
5 一生懸命取り組むことの大切さ	36	17.56	21	23.33		
6 友だちと仲良く運動する楽しさ	44	21.46	9	10.00		
7 友だちや仲間の大切さ	28	13.66	21	23.33		
8 マナーやエチケットの大切さ	13	6.34	18	20.00		
9 支えてもらっている人々への感謝の気持ち	5	2.44	2	2.22		
10 その他	1	0.49	0	0.00		
三番						
1 できなかったことができるようになったり、記録が伸びたりする楽しさ	31	15.12	10	11.11		
2 努力して勝つことのうれしさ	20	9.76	4	4.44		
3 運動して汗をかく楽しさ	21	10.24	2	2.22		
4 体や体格を向上させることの大切さ	3	1.46	3	3.33		
5 一生懸命取り組むことの大切さ	25	12.20	6	6.67		
6 友だちと仲良く運動する楽しさ	19	9.27	4	4.44		
7 友だちや仲間の大切さ	31	15.12	18	20.00		
8 マナーやエチケットの大切さ	43	20.98	22	24.44		
9 支えてもらっている人々への感謝の気持ち	12	5.85	21	23.33		
10 その他	0	0.00	0	0.00		
9	指導する中での喜びは何ですか。	(記述)				
10	あなたは今の活動に満足していますか。	1 全般に満足している	23	11.22	19	21.11
		2 おおむね満足している	124	60.49	55	61.11
		3 少し不満がある	46	22.44	13	14.44
		4 不満がある	11	5.37	2	2.22
11	指導していて子どもの体力の低下を感じますか。	1 強く感じる	37	18.05	21	23.33
		2 やや感じる	96	46.83	32	35.56
		3 あまり感じない	69	33.66	33	36.67
		4 まったく感じない	3	1.46	4	4.44
12	どのような力が低下していると感じていますか。	(記述)				

調査事項		スポーツ指導者				
		小学校		少年団		
		人数	人数	人数	人数	
サンプル数		205	90			
13	子どもの体力の低下に対応して取り組みをしていますか。されている場合は内容をお書きください。	(記述)				
		1 児童本人との関係	16	7.80	9	9.09
		2 保護者との関係	9	4.39	16	16.16
		3 指導者同士の関係	10	4.88	13	13.13
14	指導していて人間関係で困ることはありませんか。(複数回答可)	4 特に困っていない	169	82.44	61	61.62
		1 もっと長くしたい	12	5.85	4	4.44
		2 少し長くしたい	55	26.83	16	17.78
		3今のままでよい	135	65.85	63	70.00
		4 少し短くしたい	3	1.46	7	7.78
15	あなたは子どもたちの1日の練習時間についてどう思っていますか。	5 かなり短くしたい	0	0.00	0	0.00
		1 もっと増やしたい	25	12.20	6	6.67
		2 少し増やしたい	82	40.00	27	30.00
		3今のままでよい	97	47.32	55	61.11
		4 少し減らしたい	1	0.49	2	2.22
16	あなたは子どもたちの1日の練習の運動量についてどう思っていますか。	5 かなり減らしたい	0	0.00	0	0.00
		1 もっと高度なものをしたい	9	4.39	5	5.56
		2 少し高度なものをしたい	103	50.24	44	48.89
		3今のままでよい	90	43.90	38	42.22
		4 少し簡単なものをしたい	2	0.98	3	3.33
17	あなたは子どもたちの練習の内容についてどう思っていますか。	5 もっと簡単なものをしたい	1	0.49	0	0.00
		1 もっと増やしたい	30	14.63	8	8.89
		2 少し増やしたい	71	34.63	24	26.67
		3今のままでよい	101	49.27	52	57.78
		4 少し減らしたい	2	0.98	6	6.67
18	あなたは子どもたちの練習試合や試合の回数についてどう思っていますか。	5 かなり減らしたい	0	0.00	0	0.00
		1 よくある	3	1.46	8	8.89
		2 ときどきある	81	39.51	50	55.56
		3 あまりない	74	36.10	22	24.44
		4 ほとんどない	47	22.93	10	11.11
19	子ども同士のトラブルはありますか。	1 よく来る	25	12.20	58	64.44
		2 ときどき来る	94	45.85	22	24.44
		3 あまり来ない	59	28.78	8	8.89
		4 全く来ない	20	9.76	2	2.22
		5 来ないように願っている	0	0.00	0	0.00
20	保護者は練習や試合を見に来ますか。	1 そう思う	58	28.29	32	35.56
		2 まあそう思う	120	58.54	44	48.89
		3 あまり思わない	27	13.17	14	15.56
		4 思わない	0	0.00	0	0.00
21	活動方針や活動内容について、保護者の理解は得られていると思いますか。	1 そう思う	40	19.51	23	25.56
		2 まあそう思う	130	63.41	53	58.89
		3 あまり思わない	33	16.10	14	15.56
		4 思わない	2	0.98	0	0.00
22	あなたの部活動はどの子も力いっぱい活動していると思いますか。	1 そう思う	40	19.51	23	25.56
		2 まあそう思う	130	63.41	53	58.89
		3 あまり思わない	33	16.10	14	15.56
		4 思わない	2	0.98	0	0.00
23	あなたの部活動はどの子もあいさつや言葉づかいに気をつけるようにしていますか。	1 そう思う	42	20.49	30	33.33
		2 まあそう思う	103	50.24	37	41.11
		3 あまり思わない	55	26.83	21	23.33
		4 思わない	4	1.95	2	2.22
24	あなたの部活動は練習の準備や片付け、しんどいことも、子どもたちみんなできていますか。	1 そう思う	91	44.39	43	47.78
		2 まあそう思う	96	46.83	35	38.89
		3 あまり思わない	17	8.29	12	13.33
		4 思わない	0	0.00	0	0.00
25	現在あなたの部活動にはスポーツ障害を起こしている子がいますか。	1 かなりいる	1	0.49	0	0.00
		2 少しいる	12	5.85	14	15.56
		3 以前いたが現在はいない	12	5.85	15	16.67
		4 いない	179	87.32	61	67.78
26	子どもたちは今の活動に満足していると思いますか。	1 そう思う	32	15.61	22	24.44
		2 まあそう思う	135	65.85	64	71.11
		3 あまり思わない	36	17.56	4	4.44
		4 思わない	2	0.98	0	0.00
27	指導者としてのどのような情報を望んでいますか。(複数回答可)	1 指導している種目の一般的な指導法	67	13.79	26	9.32
		2 指導している種目の子ども向けの指導法	147	30.25	57	20.43
		3 ウォーミングアップやクーリングダウンの	62	12.76	36	12.90
		4 小学生の体カトレーニングについての情報	64	13.17	41	14.70
		5 小学生の体やスポーツ障害について	46	9.47	33	11.83
		6 指導している種目の大会等の情報	20	4.12	9	3.23
		7 部活やクラブの運営についてのノウハウ	27	5.56	9	3.23
		8 小学生の心理や小学生への関わり方	28	5.76	31	11.11
		9 保護者への関わり方	5	1.03	16	5.73
		10 食事やサプリメントについての情報	8	1.65	16	5.73
		11 その他	6	1.23	2	0.72
28	指導されていて感じていることや、悩んでいることがあれば書いてください。	(記述)				